『あゝ、ツルリオ、貴方ですの。』
彼女は極めて自然に話しかけた。
『眠つてゐたのかえ？』と、私は自分でも物の言へるのに全く驚きながら、そして彼女の眼を避けるようにしながら訊いた。
『えゝ、今眼が覺めた所なの。』
『ぢや私が起したのだ――濟まないことをしたね――ただ お前の口の覆ひを取らうとしただけだつたのだが――息苦しいだらうと思つてね――この 夜具はお前には重過ぎやしないかと思つたので――』
『えゝ、さうなの。私隨分暑くつてよ。どうか夜具を少し除けて下さい。』
私は云はれるまゝに起つて其通りにした。だが自分のした事に、自分の言つたやうにジュリアナも私も何一つ不安の種子となるものを有つてゐなかつたやうに、この穩かな凹間(アンコヲ)には、姦淫も、虚僞も、悔恨も、嫉妬も、死も――一切さういふ人の心の苦悶などは潜んでゐなかつたかのやうに、極く自然に運ばれて行つたさういふ一切の事柄とに就いて、私がどう考へてゐたか、それはとても説明されさうにない。
『もう餘程晩いでせう。』口と彼女は訊いた。

『いや、未だ十二時前だよ。』
『おつ母さんはお休みになつて。』
『未だだよ。』
彼女は一寸默つてゐたが、又言ひ出した。『で、貴方は――未だお休にはなりませんの？お疲れでございませう――？』
私は何と答へていゝか分らなかつた。此處にゐないとでも云はうか――此處にゐさせて呉れとでも賴まうか。それともヴィルラリルラの部屋で二人肱掛椅子に凭れてながら、互に話し合つたあの優しい言葉でも繰返さうか。だが、若し此處にゐるとすれば、どうして一夜を過ごしたらいゝのか。彼女の寢床の傍に坐つて見はりをしながら？　そんなことが私にやり通せるだらうか？　最後までさういふ態度をとつてゐることが出來るだらうか。
『貴方は彼方へ行つてゐて下さるがようございますわ。ツルリオ――今夜はね。』と、彼女は話し續けた。『私は別に何も要りませんわ――たゞ休ませてさへ貰へれば。貴方にゐて頂くと――私却つていけないんですの。彼方へおいで下さいね。其の方がいゝんですの――今夜だけわ、ツルリオ。』
『だが何か欲しくはないかい。』

『いゝえ、何も欲しくはありませんわ。それに、若しもの時には、クリスチナが隣の部屋に寢てゐますから。』

『私は毛布にくるまつて、長椅子の上へ寢てもいゝんだよ――。』

『そんな窮屈な思ひをなさらなくても可いぢやありませんの。貴方も餘程疲れてゐらつしやいますわ――お顏で分ります。それに、貴方が此處にゐらつしやいますと、私は眠れないんですの、どうか、ツルリオ、私の言ふことをきいて下さいね！　其の代り明朝は直ぐに來て見て下さい。もう休まなくちやいけませんよ。二人ともぐつすり寢なくちや。』

彼女の聲は、いつもと變つた調子はなく、低く優しかつた。ただ私に彼方へ行けと迫るばかりで、外に彼女は最後の決心を示すやうな素振は一つも見せなかつた。彼女は疲れきつてゐるやうであつたが極めて落着いてゐた。時々眠くて眼瞼が溶けんばかりに、眠を閉ぢた。さて何したものだらう？　其儘にして置かうか？　だが餘り靜かなので私は怖しくなつた――かう云ふ落着は堅い決心許りから起るものである。一體何うしたらいゝものだらう？　畢竟するに、今夜此處にゐたつて、何の役にも立ちはすまい。彼女は棄て用意してあることだし、直ぐに手段を取ることが出來るのだから、旨く目的を遂行することの出來ない筈はないのだ。其の手段とは謨爾比涅だらうか？　瓶は何處に隱してあるのだらう？――枕の下か――寢臺の抽斗か？　何うしてそれを搜し出したらよからうか？　いつそ思ひ切つて、『お前は自殺しようと思つてゐるんだらう。』と言つたらどうだらう。さうしたら、何んな事が起つて來るだらう。さう云ひ出した以上、外の事を隱して置く譯には行かない。かういふ入り組んだ、こんぐらかつた考は私が殘して持つてゐた僅かばかりの力をさへ奪つて仕舞つた。私の神經は全く綏んだ。身體の疲勞は刻々に增して來た。機官といふ機官はへな〳〵になつて自發的な作用は悉く中斷されて仕舞つた。能動と反動が互に應ずるといふこともなく又全然相會するといふこともなくなつた。私は抵抗力も無く、努力もなく、何んなものに對しても働きかけるといふ力も無くなつたやうな氣がした。自身が無能であるといふ感じ、現に起つてゐる、又これから起らうとしてゐる出來事は、起るべくして起るのだといふ考へは私をすつかり痲痺させて仕舞つた。私は生きてゐるといふ微かな、ぼんやりした意識からさへ、遁れたいといふ變てこな慾望を感じないではゐられなかつた。到頭、私の感情は悉く或る絶望的な考の中に溶け込んだ。『何うともなれ、俺も亦死ぬだけのことさ。』

『さうだ、ジュリアナ。』と私は云つた。『ぢや構はないから其儘靜かにしておいで。お休み。明日また逢はうね。』

『貴方立てないぢやありませんの。』

『あゝ、さうだね。さよなら、お休み！』
『ツルリオ、接吻して下さらないの？』
嫌悪の戰慄が本能的に全身に行き亘つた。私は躊躇つた。
丁度其處へ母が戻つて來た。
『何！　未だ起きてゐたの？』と彼女は叫んだ。
『えゝ、眠らうとしてゐた所です。』
『子供達を見に行つてゐたんですよ。ナタリアはすつかり眠を覺しちやつたよ。で直ぐ私に訊くんだよ。「おつ母さんは歸つていらしつて？」と。それからお前の所へ行きたいと言つてね——』
『何故連れて來るやうにエディスに仰有つて下さいませんでしたの。エディスはもう就寢みましたか？』
『いゝえ。』
『お休み、ジュリアナ。』と、私は二人の話を遮つた。
私は近くへ寄つて、屈んだ。そして彼女が肱を突いて少し身體を擡げるやうにして私の方へ差し出して呉れた頰に接吻した。

『お休みなさい、おつ母さん。私も休みます。眠くて仆れさうです。』
『お前さん何か喰べないのかい？　フェデリコが階下で待つてゐるよ。』
「有難うございますが、澤山——ではお休み！』
私は又ジュリアナの頰の接吻した。そして彼女の方は見ないやうにして、急いで出て行つた。殘つてゐる僅かの力を絞り出して、やつと私は部屋の閾を跨いだ、かと思ふ間もなく、自分の部屋へ歸らない先から若しや惨めにも仆れやすまいかといふことが氣になつたので、廊下を駈ける樣にして降りた。
苦しみの結目が解けかける時、心の緊張が緩かになりかける時には、涙の出る前に、先づ身顫ひが感ぜられるものだ。私はさういふ身顫ひに襲はれながら寢床の上に身體を投げた。だが身顫ひばかりが續いて、涙は出て來なかつた。私の苦しみは實に怖しかつた。私は恐しい重みで壓潰されるやうな氣がした——其の重みは上から加へられるのではなかつた。つまり中からさうされるやうだつた。まるで骨格や筋肉が重い鉛にでも變つて仕舞つたやうに。けれども私は頭で物を考へ續けてゐた。心は未だ眠りきりはしなかつた！
いや、彼女をあのまゝにして置いてはいけない。部屋を去れと云つてたがそれに同意すべきではないのだ。母がゐなくなれば、屹度自殺するに違ひない。ナタリアに會ひたいと言つ

た時のあの言葉の響き！　私は直ぐにある幻覺に襲はれた。母は部屋を去る。ジュリアナは寢床の上に坐つて耳を傾けてゐる。それから最後に誰もゐないことが分ると、寢臺の抽斗を開けて謨爾比涅の瓶を取り出す。少しも躊躇しないで、思ひ切つた身振で瓶の藥を飲み乾す彼女は又もや蒲團にくるまつて待つてゐる……屍の幻影がまざ〳〵と私の眼の前に現れた。其の爲め、私は凒かれた人のやうに寢床から身體を投げ出して、いろ〳〵な家具に打突かつたり、絨氈に躓いて轉んだり、狂人のやうな手眞似をしたりしながら、部屋中を歩き廻つたほどであつた。

私は窓を開けた。靜かな夜で森としてゐた。蛙が絶えずガアガアと單調な鳴聲を續けてゐた。群星はチラ〳〵と瞬き、私の眞向うには北斗星がキラ〳〵と輝いた。夜はしん〳〵と更けて行つた。

私は暫く窓に凭つて、此の涯しもない空を瞶めてゐた。私の搔き亂れた視覺には、それが段々近づいて來るやうに見えた。私は何を待つてゐたのであらうか。分らなかつた。心はすつかり混亂した。多少でも明確と認められるものは、ただ涯しない大穹ばかりであつた。何も考へないでゐると、まるで或る漠とした力が私の內部意識を動かしでもしたやうに、其の時までは何のことか全く解らなかつた『私をどうして下さつたの？』といふ質問が、不圖

浮んで來た。すると同樣消えかゝつてゐた屍の幻影が、又も生々と甦つて來た。

私は非常に恐しくなつた。で自分ながら何をするつもりなのかそれさへ知らないで、部屋を出た。そして少しも躊躇しないで、ジュリアナの部屋の方へ足を運んで行つた。私は廊下でエディス嬢に會つた。

『何處から來たのだえ、エディス。』と、私は訊いた。そして私の樣子を見て驚いてゐるのに氣がついた。

『奧樣がナタリアさんに會ひたいつて仰しやいましたから、お母さまのお部屋へお連れ申した所で御座います。ですが、どうしても彼處へ置いて來なければなりませんでした。だつてどうすゝめても自分の部屋の寢床へ歸るのはいやだと仰しやるんですもの。そしてあんまりお泣きになるもんですから、お母さまも仕方なしに置いて行けと仰しやいました。マリアさんも亦お眼覺めでなければ好いと思ひますが——！』

『あゝ、それぢや——』心臟の動悸が烈しくなつて、私は聲を出すことが出來ないほどだつた。『あゝ、それぢや、ナタリアはお母さんの寢床にゐるんだね？』

『左樣で御座います。』

『でマリアは……二人でマリアを見て來よう。』

いろ〳〵の思ひで胸は塞がつた。尠くも今夜だけは、ジュリアナは大丈夫だ！　子供を傍に置いて、自殺を企てようなぞといふことはあるまい。不思議にも、ナタリアの優しい氣まぐれが母の命を救ふことになつたのだ。有難い！　有難い！

私は眠つてゐるマリアの顏を見る先に、今一つある小さい空つぽの寢床を眺めた。そこには未だ少しばかり凹んだ跡が殘つてゐた。私は其の枕に接吻して、小さな身體が殘して行つた跡が未だ溫いかどうかを知つて見たいやうな、妙な慾望に襲はれた。が、エディスがゐたので、思ひ止つた。私はマリアの方へ向いて、息を殺しながら其の上に俯向いて、長い間凝視めてゐた。そして私に似寄つた色々の點を、一つ一つ調べたり、顴顴や、頰や、咽喉の上に浮んでゐる纖細な血管を殆ど數へ盡さんばかりにしたりした。彼女は頭を反らせて横になつて寢てゐたので、小さな咽喉は仰向けに頤の下からよく見えた。開いた口の間からは小さな米粒のやうな齒が見えた。母親そつくりの長い睫毛は、頰の出張つた處へ屆くほどの影を投げてゐた。世にも珍らしい美しい花のたゐいない風情、得も云はれぬ優美、それが此の子供の姿の特色だつた。私はその姿の中に、自分の血が淸く流れてゐるの感ぜずには居られなかつた。

二人の幼兒が生れてから、何時、これ程深い、これ程優しい、これ程悲しい感じを懷いたことがあつたらう。

私は到頭やつとの思ひで、此の兒の姿から眼をはなした。出來ることなら二つの小さな寢床の間に坐つて、空の寢床の方へ頭をのせて、其の儘明日の日を待ちたかつた。

『お休み、エディス。』と云つて、私は部屋を出た。私の聲は顫へてゐた。

私は部屋へ歸つて、又寢床の上に身體を投げた。今度は聲を擧げて、思はずわつと泣き立てた。

（十三）

其の夜、まあ獸的だとも言つてよい重苦しい眠――私を到頭引きずり倒すやうにした眠から覺めた時には、今迄起つた事件を色々考へ出すことさへ難かしかつた。

とは云へ、少しづつ、事實が――冷い、裸の、動かすことの出來ない事實――前夜のものの狂はしい昂奮ですつかり痛めつくされた私の心の前へ現れて來た。たが、今私の心に漲つてゐる絕望に較べれば、最近私が思ひ煩つた苦惱などは何でもない――私は生きなければならない！　それは誰かが私の前に深い洋盃を差出して、『若し汝が生きたいと思ふならば、汝

の心臓の血のありつたけを此の洋盃へ搾り入れよ、最後の一滴までも！』と、云ふやうに思はれた。

譯の分らない嫌厭や憎惡や、反感の念が、むら〳〵と心の奥底から湧いて來た。而かも私は生きて行かなければならないのだ、今朝でさへ生きると云ふ事實を認めなければならないのだ。何は扨置き、私はやらなければならぬ。

斯うした本當の眼覺めと、昨日ヴィルラリルラで夢想し希望した幸福とは何と云ふ矛盾であらう。私は其の矛盾で一層心を苦しめた。『出來ないことだ。』と、私は考へた。『こんな事情を平靜に承認するなんて。起きて、着物を着て、部屋を出て行つて、又ジュリアナに會つて話をするなんてことは迚も出來ない。母の前へ出て取りすました顏をしてゐるなんて、又ジュリアナだけに會へる都合のよい機會を待ち構へて、會つた上では將來の生活方針を斷然定めるなどといふことがどうして出來ようか――それぢや、如何する？――私の苦痛をすつかり卽座に押しつぶして仕舞ふんだ。私は凡ゆる苦痛から遁れなければならない――自由の身にならなければならぬ。たゞそれだけでいゝんだ。斯うしてそれが容易く出來ると思つたり、忽ち實行出來ると想像したり、銃聲や、直ぐに分る彈丸の利目（きゝめ）や續いて起る暗黑やを思ひ描いてゐると、身體が不思議にも引きしまるやうな氣がした。無論苦しいには相違なかつたが、何となく救はれたやうな、嬉しいと云つてもよい位の感じがした。たゞそれだけである。あ、これだけのことを知る快さ、心配も苦勞も一切消えて、萬事が終るといふこと！

誰か扉を叩く音がした。つゞいて弟の叫ぶ聲がした――

『ツルリオ、まだ起きないんですか？　九時ですよ。這入つても宜う御座いますか？』

『あゝ、お這入り、フェデリコ。』

『何時か知つてゐますか。』彼は這入りながら訊いた。『九時過ぎですよ。』

『昨夜晩くまで寢つかれなかつたので、ひどく疲れたよ。』

『今朝はどうですか？』

『大分快くなつた。』

『お母さんも起きてゐます。ジュリアナは可なり快いと言つて居ます。窓を開けませうか？素的な天氣ですよ。』

彼は窓を開け放した。新鮮な空氣がさあツと部屋の中へ流れ込んだ。そしてカアテンは、帆のやうに風を孕んで、其間から空が見えた。

『見えますか。』

屹度明るい日光が、昨夜の苦悶が顏の上に殘した痕を照らし出したのであらう。彼は『だ

が昨夜は隨分ひどかつたんですねー』と叫んだ。
『何うも熱が出たらしい、それで疲れたんだらう。』
フェデリコは朗かな正直な眼で私を瞶めた。すると私は其の瞬間、これから先嘘をつき、誤魔化しをして行かなければならない重苦しさをしみ〴〵と心に感ずるやうな氣がした。
ああ、若しも彼が知つてゐたならば！
だが、いつもさうであるが、彼が前にゐるので、私につきまとつてゐる惡魔は影を潜めて仕舞つた。興奮劑を飲んだ後のやうな一時的な精力を得て私は元氣になつた。『彼が若し私の地位にあつたら如何するだらう？』と、私は默想した。私の過去、私の教育、私の本性は素から違つてゐたが、尠くも次のやうなことだけは確かだ——今の場合と同じであらうが、又逢つてゐようが、そんなことはどうでもいゝ、兎に角不幸な事件に際したら、彼は勢力あり人格ある人として行動し、勇敢に苦難に面接し、そして又他人を犧牲にするよりも、先づ自己を必ず犧牲にするに相違ない。
『一寸。』と、彼は私の方へ近寄つて來て言つた。彼は私の額に掌をあてゝ見た。それから手頸に指を當てゝ見た。『こりや、脈が少しをかしい！』
『もう起きるよ、フェデリコ、遲いからね。』

『午後から河沿ひの森へ行く積りですが、若しおいでになれば、オルランドに馬の仕度をさせて置きますよ。あの森は憶えていらつしやるでせう。たゞ姉さんが快くないのは惜しい。一緒に連れて行つて上げたいんだが！　炭燒小屋で炭を燒いて居るのが見えますよ。』
ジュリアナの名を云つた時の彼の聲は、大變優しく、情が籠つてゐた、殆ど血を分つた同胞といつてもいゝ位の懷しさに充ちてゐた。あゝ、若しも彼が知つてゐたならば！
『ぢや、さよなら、兄さん。私は仕事にかゝりますよ。何時私の手傳ひをして下さる積りですかね。』
『今日でも——明日でも——お前の可い時に。』
彼は笑つた。『隨分御熱心なことですな！　まあ、どうなることでせうね！　ではさよなら。』
そして彼はしつかりした、飾氣のない歩調(あしどり)で歩んで、日時計の上に鐫られてゐる『時は恩寵なり。』と、いふ訓戒を實行しようと、一心になつて出て行つた。

（十四）

私が部屋を出たのは十時であつた。四月の日の光はラ・バディオラに溢るゝばかりに充ちてゐて、開いた窓からも露臺からも流れ込んで來るので、私は驚いた。こんな人の心を探るやうな光を受けてゐて何して假面など被つてゐられよう。

ジュリアナの部屋へ思ひ切つて入らうとしたが、それは後にして先づ母を捜しに行つた。

『遲くまで休んでゐたね、加減は何う？』と、彼女は云つた。

『宜いやうです。』

『顏が蒼いね。』

『昨夜熱が少し出たやうでしたが、もうすつかりなほりました。』

『ジュリアナにお會ひかえ。』

『未だです。』

『起きたがつてゐるんだよ——本當にお前、すつかり好くなつたと云つてね。だが顏を見ると——』

『これから行つて見ませう。』

『そしたら一時も早くお醫者へ手紙を出さなくちやいけないよ。ジュリアナが何と言はうと構はないから——今日はお出しよ。』

『貴方は仰しやいましたか——私も知つてゐるつて？』

『あゝ、お前さんも知つてゐると言ひましたよ。』

『ぢや行つて參ります、お母さん。』

私は香菖蒲の根のプン〳〵匂つてゐる大きな衣裳戸棚の前で、母と訣れた。女達が二人でカサ・エルミル家の誇りになつてゐる純白な亞麻布を積重ねてゐた。マリアは洋琴に向いてエディス嬢から教を受けてゐたので、半音階が順々に速く又一樣に續いた。召使の中でも一番忠實な——頭が禿げて、年のせゐか少し腰の曲つたピトロが行過ぎた。彼は洋盃の載つてゐる盆を持つてゐたが、手が顫へるのでガチヤ〳〵音がした。私の周圍では何も彼もが溢れるばかりの空氣や日光を受けて、靜かではあるが嬉しさうに見えた。何處にも云ひやうのない慈しみが、謂はば家の大神宮樣がニコ〳〵微笑んでゐるやうな喜びが擴つてゐた。

かういふ感じがこれほど深く私の心に滲み込んだことは未だないことだつた。ジュリアナと私とが用心して避けてゐる、而かも無くなりはしないあの卑しい祕密を取卷くのに、是れ程豐かな平和と是れ程多い慈しみとを以てするとは、まあ何と云ふことだらう！

『それから、次にはどうするのだ？』と、私は自分の脚が自分の思ふ通りにならないで、怖しい部屋の方へ歩みを向けることも出來ず、仕方なく途方に暮れたまゝ初めて來た人のやう

に廊下を彷徨ひながら、一人で考へた。『次は何んだ？　私が本當の事實を知つてゐることに彼女は氣がついてゐる。二人の間に伴りは最も無用だ。二人が面と向ひ合はなければならぬ時が來た。此の恐しい事柄を語らなければならぬ時が來た。然し他の決闘は今朝起つてはならぬ、又起る筈はない。どういふ結果になるか思ひも及ばぬことだ。今は以前にも增して二人の行動が、母や、弟や、又家内中の者に目立たぬように、又は不審を懷かせないやうにすることが肝心だ。昨夜の昂奮や、心配や、鬱憂は、みんなジュリアナの狀態が萬一危險に瀕しないとも限らないと考へた結果だといふことにするのだ。けれども、他人の眼から見れば私が考へたのだとすれば私は一層彼女に對して優しくし、一層氣をつけてやり、思ひ遣り深くしてやらなければならぬといふ事になる。今日は努めて愼重に態度を執るやうにしなければならない。何んな事があらうと、今日はジュリアナと言ひ爭ひなどしてはならない。どんな事があつても彼女と二人きりになる樣な場合は避けなければならぬ。それから又、私は直ぐに彼女に對する私自身の態度を示す感情や、私の行爲を規定する計畫やを彼女に知つて貰ふ樣な方法を講じなくてはならない。若しも彼女が自殺する決心を依然として翻さないならばどうしよう？　若し彼女が其の計畫を二三時間延ばしただけだとしたなら、どうしよう？』此處まで考へると私は急に躊躇などしてはゐられなくなつた。やる事をやらなければならな

かつた。私は謂はば拳骨を喰つて戰場へ逐ひやられる東方の兵士の樣なものであつた。

私は音樂室へ這入つた。マリアは私の姿が見えると、急に稽古を止めて、自由になれるのが嬉しくつて、悅び勇んで私の方へ駈けて來た。彼女は翼のある天使のやうな優雅（しとやか）さと、敏捷さと輕快さとを有つてゐた。私は兩腕に抱き上げて接吻した。

『何處かへ連れて行つて下さらない？』と、彼女は訊いた。『もうすつかり飽きちやつたわ。だつてエディスさんは長いこと此處に引止めて置くんですもの。私もう厭だわ、何處かへ連れて行つて頂戴な！　御飯（レット・アス・テーク・ア・ウオーク・ビフォア・ブレックファスト）は後にして散歩をしませうよ。』

『何處へ？』

『何處（ホヰヤー・ユー・プリーズ）でも父さんのいゝ處（テイス・ゼ・セーム・トウー・ミー）へ。私は構はないのよ。』

『だが、先へマ、の許へ行かうね。』

『さう〳〵、昨日パパはヴィルラリルラへいらつしやつたのね、私達に留守をさせて置いて。連れて行かないつて仰しやつたのは、父さんよ――マ、は好いと仰しやつたに、惡いパ、さん。私達も彼處（ウイ・シャル・ライク・トウ・ゴー・ゼア・テル・ミー！）へ行きたいわ。隨分面白かつたでせうね（ハウ・ユー・アミューズド・ユーアセルフス）。』

マリアが英語で小鳥のやうに囀るのを聞いてゐると何時も氣持がよかつた。この調子の好いお喋りは二人が一緒にジュリアナの部屋へ行く道すがら、小歇みない伴奏となつて、私の心

配に附纏つてゐた。私が躊躇して居ると、マリアは小さな拳で扉を敲いて、『お母さん！』と呼んだ。

ジュリアナは、私が居るとは知らないで、自分から扉を開けた。彼女は私を見ると、幽靈か、さもなくば何か不思議なものでも見たやうに吃驚した。

『貴方？』と、彼女は殆ど聞えないやうな低い聲で吃つた。そして見る間に脣は蒼ざめて來た。初めは恐しいので駭いたが後では彫像のやうに硬くなつた。

二人は闕越しに互ひに顏を見合つた――凝乎と瞶めた――そして一瞬間、互の魂の底に見入つた。周圍のものは皆んな消滅して、此の一刹那に、二人の間には何も彼もが言はれ、何も彼もが了解され、何もかもが決定された。

其後何んな事があつたか、私は正しくは知らない、明瞭と憶えてはゐない。何でも暫く周圍に起つてゐることに對する意識が中斷したことは知つてゐる。思ふに、それは或る病氣にかゝつてゐる患者にどうかした調子に起つて來る、無意識的な失神狀態に似た所があつた。私の能力は朦朧になつて、何事が起つてゐるのか、見ることも聞くことも出來なかつた、相手の云ふ意味を捉へることも出來なかつた。でも、暫くすると、感覺が元に戻つて來て、周圍の事物や人々に注意を專ら注ぐことも、又それ等をはつきりと理解し吟味することも出來るやうになつた。

ジュリアナは腰掛けて、ナタリアを抱いてゐた、私も腰を掛けてゐた。マリアは絶えず彼方此方へ動き廻つたり、息も繼かずにお饒舌をしたり、妹を戯弄つたり、點頭いてやる外には、誰も返辭をしないやうな色々な質問を發したりした。これは私の聞いた話の一節だが、マリアは妹にこんなことを云つてゐた――

『あゝ、お前は昨夜お母さんと一緒に寢たんだね？』

『えゝ、私は小さいんだからね。』と、ナタリアは答へた。

『あゝ、でも、今夜は私の番よ。ねえ、お母さま？　今夜はお母さまの寢床へ來ても好いでせう、ね？』

ジュリアナは返辭をしなかつた、微笑もしなかつた。何かに思ひ耽つてゐるやうであつた。彼女は兩腕でナタリアを抱いて、自分の胸に子供の肩をすりつけてゐたが、女の子の膝の間に組合せてゐる手は其の下になつてゐる上衣よりも白かつた。そしてすつかり痩せ細り、衰へ果てゝゐるので、もうそれだけでも悲哀と苦痛の世界を申分なく見せてゐた。ナタリアの頭は丁度母の頤に達いてゐた。そしてジュリアナは自分の脣を娘の梳つた髮の中に埋めてゐた。だからちらりと一目見た時には、彼女の顏の下半分も口の表情も分らなかつた。二人は

顔を見合はすことをしなかつた。私の方で見る度に、彼女は伏目になるので、稍々赤らんだ眼瞼だけしか見えなかつた。そして其の度毎にまるで蔽はれた眼の凝視が眼瞼越しに輝き出でもするやうに、私は彼女のさうした様子に酷く心を亂された。

彼女は私が物を言ひかけるのを待つてゐたのではなかつたらうか？　どうしても口にし得ない言葉が、隱れた脣に浮んで來てゐるのではなかつたらうか？

私はやつとのことで、明瞭とも朦朧とも譯の分らない無爲の狀態から旨く脫することが出來た。そして私は言つた。（恐らく私の言葉は前から始つてゐた對話の續きであるやうな、既に言つたことに對しての附加への言葉であるやうな印象を與へたであらう。）私は低い聲で云つた——

『お母さんはヴェベスチ博士に手紙を書けと仰有るんだ。で出す約束したがね。今日は書かう。』

彼女は見向きもしなければ、答もしなかつた。マリアは何處までも罪のない樣子で、驚いて母を見やつた。それから私を見た。

私は起つて行かうとした。

『正午から、フェデリコと一緒に河沿ひの森に行く積りだが、歸つて來たら今晩は又會へるだらうね？』

彼女は答へようともしなかつたので、私は口に出せないことを、すつかり低い聲で繰り返した。『歸つて來たら、今晩又會はうね？』

するとナタリアの辮髪の中からは脣が『えゝ。』と囁いた。

（十五）

私は色々な煩悶に苦しみ、初めてこんな悲しみに打たれ、今にも危險に襲はれるやうな感じを抱きながらも、尙ほ今一人のことを考へ續けぬ譯には行かなかつた。だが又、私は最初から、私の元からの疑念が正しいといふことに就いては露ほどの疑ひをも抱いてはゐなかつた。矢庭に、私の心の中には、今一人がフィリッポ・アルボリオの像となつて現はれた。そしてジュリアナの寢室で私は初めてむら〳〵と嫉妬の情を起したが、其の時彼の忌まはしい像は、ジュリアナの像と一緒に堪らなく嫌な繪卷物となつて擴がつた。今斯うしてフェデリコと一緒に、あの懶い土曜日の午後見續けて居た迂々（うね〳〵）してゐる河に沿つて森の方へ馬を走らせてゐると、今一人が何時も私達の後に隨いて來た。憎いと思へば、フィリッポ・アルボリオの姿

は一層生々として現はれるのであつた、そして私と弟との間に割込んで來るのであつた。だからそれを見ると、私は、たまらない嫌惡、決鬪する前に攻擊の合圖を待ちながら、私の敵手と相對して立つてゐる時に時折經驗するやうな、烈しい戰慄を實感として感じないではゐられなかつた。

弟が眼の前にゐることは、私の苦痛を一層烈しくした。フェデリコに較べると、今一人の姿は如何にも洒脫で、神經質で、女々しい所があつて、憐れな程みすぼらしくて、私の眼には厭はしい卑しいものに映つた。私をすつかり感心させた、弟が示してゐる力と男らしい單純さといふ新しい理想の囚になつたので、私は、彼が自分と同系統に屬してゐる人であり、又彼の文學上の作物を見ても明かであるやうに、二人は同等に有識者の特性を有つてゐるにも拘らず、此の變てこな曖昧な人間をひどく嫌つた、いや輕蔑した。私は彼を作中人物の一人のやうに想像した。最も痛ましい心の病氣にかゝつて、根性は僻み、虛僞を事とし、それで殘酷なほど穿鑿好きで、解剖癖と考へ出した末の皮肉癖でさん〴〵意地が惡くなつてゐる男、最も溫みのある、最も自由な魂の働きを冷酷な固着した概念に變ずることにのみ絕えず腐心し、あらゆる人間を單に心理的思索の題目とのみ見做して、愛することも出來なければ寬大な行爲に出ることも出來ないし、又自己を棄てることも、自己犧牲も爲し得ない、表裏反覆常ない、淫蕩で、皮肉な、陋劣な男と見るのを常とした。

此男の爲めにジュリアナは誘惑されたのだ——屹度愛されたのではないに相違ない。彼の用ひた策略は『祕密』の飛頁に書いてゐる題辭で明かだ。これこそ、私の知つてゐる限りでは、此の小說家と私の妻との間の過去の關係を示す唯一の證跡である。彼に取つては、彼女は只肉慾の相手に外ならなかつたのだ、それに相違ない。象牙の塔を包圍して取るといひ、なかなか手ごはいといふ評判を取つてゐる女を誘惑するといひ、それ程立派な女に誘惑の力を試して見るといひ、何れもなか〳〵骨の折れることではあるが、又何人によらず喜びさうな計畫である。そして又狡滑なあの藝術家から見ても、あの『加特力教』や『アンヂェリカ・ドニ』を書いた氣難しい心理學者から見ても確かに價値ある企圖であつた。

こんなことをそれからそれへと考へてゐればゐる程、現實は益々獸的な有りの儘の姿となつて現れて來た。『精神的』だなどと云はれたつて、永い間型のやうに顧みられないでゐれば、感傷的な憧憬にも、的も無い慾望にも、漠然した詩的情趣にも心を動かされて來る——丁度そんな時に、フィリッポ・アルボリオはジュリアナの胸の浮んだのであらう。斯ういふ憧憬や慾望や情趣は、皆んな更に卑しい動物慾を包む假面に過ぎないのだ。アルボリオは征服してやらうと思ふ相手の女の特殊な心理狀態を見拔くことに黑人であつたから、彼女に接する

に最も有効な確實な方法を採つた。さうだ、理想的なことや、氣高い精神的目的のことや、神秘的な親和力や結合力のことを話したり、又人の身體の神秘をあばくことに努めたりした。頭と手が一緒になつて此の微妙な錯綜した仕事を巧みに操ることになつたのだ。そして、ジュリアナは、――象牙の塔と云はれた、あのすなほな金と立派に鍛へ上げた鋼鐵で出來上つてゐる彼女は、完全唯一の者――すたれた道化芝居に關係したり、自ら許して舊い係蹄に懸つたり、女の脆さといふ陳腐な平凡な法則に從つたりした、斯うして感傷的な二人の奏曲は、恥づべき抱擁に終つたのだ。

私の魂には嫌はしい嘲弄が荒れ狂つた。或る毒草を喰ふと痙攣を起して齒を剝き出して死ぬさうだが、それと同じやうな痙攣が起るやうに思はれた。私は急いで馬に拍車を加へて、河堤に沿うて走らせた。

堤は大變危險であつた。甚く狹い處があつたり、ともすれば土崩れがしやしないかと思はれる處があつたり、又或處には大きな瘤だらけの樹木の枝が突き出てゐたり、地面からもち上つてゐる喬木があつたりした。私は若しかすると危い目に會ひさうだといふことは能く知つてゐたが、馬を留めようとはしないで、愈々烈しく驅り立てた。それは何も死にたいと思つたからではなかつた。たゞ此の危險に伴ふ昂奮狀態に身を置いて、堪へられない苦痛から

多少でも逃れたいと思つたからであつた。私は嘗てかういふ無鐵砲な仕方が利目のあるものであることを經驗した。十年前のこと、未だ若い盛りでコンスタンチノープルの大使館附の役人をしてゐた時であつた。月明の一夜、或る不幸な戀愛關係の惱ましい思ひ出から遁れようと思つて、私は馬に乘つて囚教徒の墓地に入つた。墓石は隙間もなく立つてゐて、幾度となく馬から落ちて身體がこつぱみぢんになつて仕舞ふやうな氣がしたが、それでも半分ほどは埋れてゐる墓石間を盛に駈け廻したことがある。

『ツルリオー　ツルリオー　止れ！』フェデリコが遠くから聲を掛けた。

私は心にも留めなかつた。不思議に一度も枝に頭を打突けるやうなことはなかつた。狹い小徑にかゝつて、幾度となく如何しても泡立つた河の中へ眞逆樣に落ちるに違ひないと思つたこともあつた。だが後に今一匹馬が荒息を立てゝ走つて來るのを聞き、フェデリコが全速力で私を追掛けて來るのに氣がついたので、私は氣になつて、直ぐと手綱を引緊めた。すると馬は今にも河の中へ飛び込みさうな恰好に、後脚で直立した。次には前脚を降して四脚を震はせながら凝乎と立つた。私は恥しくて、へどもどした。

『氣でも狂つたんですか？』フェデリコは死人のやうな蒼ざめた顏をして、私の傍へ寄つて叫んだ。

『驚いたかな？　御免。險呑な處とは少しも知らなかつたから。只一寸馬馴らしに走らせて見たんだ。所が如何しても停まらないでね。少し馭し難い奴だよ――』

『馭し難い――オルランドが？』

『お前はさう思はんかい？』

彼は不安らしい顏附でぎろツと私を見た。私は努めて微笑しようとした。彼の珍らしく蒼白い顏は私を悲しませ、私の心を動かした。

『如何して貴方はあの樹に頭を打突けずに濟んだか、又如何して河の中へ落ちなかつたのか、私には解りませんよ――』

『そしてお前は？』

彼は私に追ひ附かうとして、同じやうな危難、いやそれよりも一層酷い危難を冒した。それは馬が遲いのに、尙も早く追ひ附かねばならぬ爲めに、無理に全速力で駈けさせたからである。二人は通つて來た路を振返つて見た。

『不思議ですよ。』と、彼は言つた。『アッソロから無事に出て來られるなんて、まあ出來ないことなんですからね。さうとは知らなかつたんですか。』

二人は恐しい流を見下した。深い、滑かな、瀨の早い、渦卷や、思ひも寄らない暗流の到る所にあるアッソロの谿流は、花崗岩の兩岸の間を默々として流れてゐた。その靜けさは一層恐しさを增すばかりであつた。四邊の景色は人に向つたり人を脅したりするやうな凄味を帶びてゐた。晝下りの空は水蒸氣に蔽はれて、未だ春めいて來ない赤褐色の茂みの上に薄白い物憂げな光を投げてゐた。枯葉は若葉と、枯れた小枝は綠の小枝を參差して、枯れたのと新しい綠とは隙間もなく織り交ざつて一塊になつてゐた。緩やかに流れて行く河の上にも、又榮耀盛衰を物語る矮林の上にも、空は灰白く懶げに懸つてゐた。

『不意に飛び込めば、凡ゆる考も、凡ゆる苦しみも無くなつたであらう。私は最早此の上不幸な肉の重荷を持ち運ぶことはなくてすんだらう。だが、事によると弟も一緒に引き連れて破滅に到らしめたかも知れない――あの氣高い生命、人間を。私は彼が不思議に救はれたと同じやうに私も亦救はれた。私の愚な爲めに、彼の生命を賭するやうな危險なことをした。崇高な美しいもののある世界は彼と一緒に無くなつたかも知れない。どういふ因果で、私を愛する凡ゆる人の上に不幸が降りかゝるやうになつたことであらうか？』

私はフェデリコを見やつた。彼は物思ひに耽つてゐるのか酷くむつつりしてゐた。私は進んで彼に問を發する氣はなかつたが、彼を悲しませたのが殘念でならなかつた。あゝ何を考へてゐるのであらう？　何を考へて、苦痛の種子を增すのであらう？　或は私が告白し得ず

にゐる心の傷を隱してゐることや、又あの定つた一つの考へに驅り立てられてあんな危い疾走を續けたことを考へついたのではあるまいか？

二人は一列になつて、物も言はずに、河の堤を進んだ、それから路を變へて森の方へ辿つて行つた。可なり廣い路であつたから、二人は並んで馬を進めることにした。馬は鼻息を吐いたり、まるで內證話でも取交してゐるやうに頭を寄せ合つたり、馬銜にたまる泡を互になめ合つたりした。

折々私はフェデリコを見遣つたが、何時でも眞面目腐つた物々しい顏をしてゐた。『若し私が本當の事を明したとしても。』と、私は一人考へた。『彼は屹度私を信じないだらう。彼はジュリアナの——妹の——墮落を信ずるやうな氣にはなれないだらう。ジュリアナに對する彼の深切と私の母のそれとは果して何れが深いか、私には實際分らなかつた。彼は可憐なコスタンザの寫眞とジュリアナの寫眞とを寫眞挾にさして何時も卓の上に置いては、同じやうに愛する憧憬者としてゐるではないか？　今朝でさへ、彼女の名前を口にした時のあの聲の優しさと云つたら！　すると不意に、かう二人を對照したので此點が前よりも一層深く、一層忌しいものになつて來た。馬を走らせた私の狂氣染みた激奮はまだ血管の中にちく〳〵殘つてゐた。そこへ他人と無作法な接觸をするとよく心の中に眼覺めて來る遺傳的な殺伐な本能が頭を擡げて來たので、どんなことがあつたつて、フィリッポ・アルボリオに對抗するのをやめる氣にはなれなかつた。『俺は羅馬へ行つて、彼奴を搜し出さう、それから全力を竭して彼奴を殺すか、一生不具にするかだ。』私は彼を臆病者だと判斷した。私は彼が擊劍道場で師匠から胸をうんと衝かれてたわいなく倒れたことを憶えてゐる。私は又私のやつた決鬪に就いて彼の抱いた好奇心を想ひ出した。それは未だ曾て危險に面したことのない人にあり勝ちな吃驚した子供らしい好奇心であつた。私が擊劍の勝負をしてゐる間、彼が私から眼を放さなかつたことも憶ひ出した。私の方が強いといふ考へ、私が確かに克つといふ考へで、私は心が輕くなつた。あの蒼ざめた、嫌はしい肉體から血の滴り流れるのが幻となつて見えた。以前私が他の人々と對抗した時に經驗した實感の一つ〳〵は、私が喜んで作らうとする想像畫を綿密にする助けとなつた。遠くの牧場で血にまみれて身動きもせずに擔架に臥してゐる、二人の外科醫が妙に眉を顰めて彼の上に屈んでゐる光景がはつきり見えた。

幾度か、理想主義者で世紀末の詭辯家を以て任じてゐる私は、ゴレッタでチャールス五世の面前であの剛勇な兇猛な並優れた眞似をやつたペネドーのライモンド・ハルミルの子孫であることを悅んだか知れない！　智的方面が過度に發達してゐる私の性狀や、變通自在な私の感情も、私なるものゝ根本を、先祖から繼承してゐるいろ〳〵な犧牲を持つてゐる隱れた

土臺を變へることは出來なかつた。平衡の取れた私の弟の場合では、思想は常に行爲に伴つてゐた。私の場合では、思想の方が勝つてゐたが、それは實行能力を破壞するものではないから、時々恐しい力で現れて來た。實際、私は、極端に猛烈な情の强い男であつた。かういふ人は、きまつて平凡な心の活動を續けるになくてならない協同作用が、或る腦中樞が過度に發達してゐるので行はれなくなつてゐる。はつきりと自己解剖はやれるが、私は放恣な無紀律な衝動にばかり驅られてゐた。私は幾度もふつと犯罪行爲に誘惑されることがあつた。又幾度殘酷な本能の自らある謀反を起すか知れなかつた。

『炭燒男が居ますよ。』と、弟は馬に一擊を加へながら云つた。

森の中からは斧の音が聞え、木の間からは煙が渦を卷いて立ちのぼるのが見えた。炭燒男は丁寧にお辭儀をした。フェデリコは仕事の捗具合などを尋ねた。そして色々注意を加へたり、助言を與へたりした。通らしい眼附で竈の檢査もした。彼等はよく彼の云ふことを聞いた。仕事は急に樂になり、熱心も加はつて、樂しいものとなつて來た。火は見る間赫奕と燃え出した。彼等は彼方此方へ走り廻つて、煙の出過ぎる處へは土を投げ込んだり、燥きすぎて龜裂の出來た處へは芝土の塊をあてがつたりした。樵夫達の喉聲は、竈番達の粗暴(あらつぽ)い聲と交つてがやがや聞えた。森の奥からは樹の倒れる低い音が響いて來た。合間には鶇が啼いた。

そしてこの大森林は、自分で火種子をやつて燃やしてゐる此の火陷を默つて見下してゐた。

私は仕事の監督を續けてゐる弟と別れて、眼前に延びて居る幾條もの道を馬の赴く儘にさ迷つた。物音は次第に微かになつて、旋て谺も遠く消えて行つた。深い沈默が喬木の間に充ちた。

『決心を遂行するにはどうすればいゝか？』斯う私は考へた。『明日以後の自分の生活はどうなるだらう？　かうした祕密を抱いたまゝ母の家で暮し續けることが出來るだらうか？

私の生活とフェデリコの生活とを適合させて行くことが出來るだらうか？　此の廣い世界に、誰か又何物か能く私の魂に信仰の焰を再燃させ得るものがあらうか？』人の働いてゐる物音ももう全く絶えて、四邊は寂とした。『働け、善を爲せ、他人の爲めに生きろ――俺は今かういふ信條の中に生活の眞義を認めることが出來ようか？　何時か、弟がかういふ問題を話してゐた時には、俺にも其の意味が分つたやうだつた。眞理の教義が彼の口から私に啓示されたものと信じた。私に從へば、眞理の教義は、法則や箴言の中に存するのではない。單に又主として人間が自己の生活に與へる意義の中に存するものである。俺はそれを了解したやうに思つた。所が今や、忽ちにして私は暗黑の世界へ突き落されて仕舞つた。俺は又して も盲目になつた。何も彼もが今は解らなくなつて來た。此の廣い世界で何人が又何物が私の

やつたものを償つて呉れるだらう！』未來はぞつとするもの、希望のないものゝやうに思はれた。やがて生れて來るあの子供のぼつとした影像が、まるで夢に見る魔物のやうに漸々大きくなつて恐しいものになつて來た。そして私の幻影は、それだけで一杯になつて仕舞つた。もう悔恨も、消し難い記憶も、如何に重い精神上の重荷も、問題にはならなかつた。ただ生ける存在物のみが問題であつた。私の未來は、粘り強い惡性の生命の浸込んだ生物に結びつけられたのだ。他人に、侵入者に、憎むべき人間に繋がれたのだ。彼に對しては、ただ心ばかりではない、肉體も　血の一滴も、身體の纖維もが、振ひ立つて、烈しい猛烈な、宥め難い、死に至るまで、いや死んでも續けたいやうな憎みを感じた。

『心と肉體との二つに對する是れ以上の苦悶を想像することの出來るものがあるだらうか？　最も殘虐な暴君にだつて、運命のみが計畫し得る非人間的な皮肉を發明することは出來ないのだ。ジュリアナがあの羞づべき祕密を胸に藏してゐる時にあたつて、私は愚かにも、夢に生き、理想のなみ〳〵と注がれた盃を飲み乾してゐた。私は少年時代の純な感情に立返り、花を集めることばかりやつてゐたのであつた。（あゝ、あの幾輪かの花、如何にも子供らしい臆病さで獻げたあの惱ましげな花輪！）そして、感傷的な恍惚狀態に浸つてゐる一大場面が過ぎると、次に私は懷しい音信を受取る――誰から――私の母からだ？　そして其の後で大きに寛容な氣持になつて、誠心誠意、高尚な或る役割を引受ける。そしてオクターブ・フウリエーが扱つてゐる主人公の一人のやうに從容として自己を犧牲にする！　實にあつぱれな主人公だ！』私はそんな皮肉にすつかり魂を苦しめた。そして今一度遁げ出したいやうな無謀な慾望がむら〳〵と起つて來た。

私は顏を上げた。直ぐ前には、木の間に沙漠地方の蜃氣樓か何かのやうになつて、アソッロの流が輝いた。『素的だ！』と、私は妙に引きしめられるやうな氣持になつた。私は今始めて行く儘に任せて置いた自分の馬が、河に通ずる小徑へ足を向けてゐたのに氣がついた。まるでアッソロの流が私を其の方へ引戻さうとでもするやうに思はれた。

河の方へ行かうか、それとも歸らうかと暫く思ひ迷つて私は立止つた。然し私は水の誘惑や邪念を振り切つて、後へ引つ返した。

いろ〳〵に思ひ惱んだので私はぐつたり疲れて仕舞つた。私の魂は、急に慘めに押潰された凋びた、畏縮つた、情けないものになつて仕舞つたやうに思はれた。私は心にゆるみを覺えて自分をもジュリアナをも、悲しみをなめつくした凡ゆる人々をも、敗北者が勝利者の假借ない手に摑まれて顫へてゐるやうに、苦しい生活に浸つて顫へてゐる凡ゆる人をも憐憫に思つた。そして生活といふものは其の瞬間私にはまるで遠い〳〵、混雜した、漠然とした奇

怪な幻影のやうに思はれた。狂氣、精神虚弱、貧困、盲目、凡ゆる疾病、凡ゆる不幸、私達人間の最も深い底の底で、絶えず起る原始的な獸的な漠然とした譯の分らない力、或る特種な器具の作用を受けて、常に肉體的條件に俟つて起る、一時的な落着きのない、立派な心の働き、些細な、眼に見えないやうな原因で起る一時的な心の變化、此の上ない高尚な行爲の中にも入り込んで來る避け難い利己主義の分子、どんな結果になるか分らないのに費す多大の道德的精力。永久的のものと信じられてゐる果敢ない愛、完全無缺だと信じられてゐる脆い德、最も健全な意志にも附きまとふ弱點——人類の凡ゆる恥辱、あらゆる不幸が、其の瞬間、私の眼の前に現れた。『如何して私達は生きてなど行かれるのかしら？　如何して戀などが出來るのかしら？』

斧の響は森に反響した。その一つ〳〵の音に連れて短い、荒い聲も聞えた。空地の此處彼處には、大きな木材が平べつたい圓錐形や四角かピラミット型に積んであつた。そして其處からは煙が柱になつて眞直に濃く靜かな空氣の中へもく〳〵と立ち昇つてゐた。

私は馬を近くの積木の方へ向けた。そこにはフェデリコが見えた。

彼はとうに馬から下りて、顏を綺麗に剃つた背の高い老人と話してゐた。

『おゝ、やつとお歸りですね！』と、彼は私が乘つて近づくのを見て叫んだ。『道でも迷つたんぢやないかと心配しましたよ。』

『いや、遠くへ行つたんぢやないんだよ。』

『これはジオヴンニ・ディスコルヂョつて、なかなかの人物です。』彼は老人の肩に手を置いて云つた。

私は老人を眺めた。如何にも可愛げな微笑が皺の寄つた口許に現はれた。私はこれまでに人の額の下にこんな悲しい眼を見たことはなかつた。

『さよなら、ジオバンニ、しつかり賴むよ！』と弟は、時折、火酒か何かのやうに、活氣づける力の籠つた聲で、附け加へた。『もうラ・バディオラに歸らなくちやならない。ツルリオ。晩くなりましたね。家では皆んな待つてゐるでせうよ。』

彼は老人に訣れを告げると、又馬に乘つた。そして二人は並んで先づ籠の側を通つた。彼は夜の仕事に就いて男等に何か言ひつけた。

空が段々見えて來た。霧がふは〳〵と浮んだり消えたりするので、青空は絶えず薄曇りになつたりキラ〳〵輝いたりした。もう四時に近かつた。丁度昨日ヴィルラリルラで、ジュリアナと二人で理想の光明に浸つて庭園を眺めて居た時だ。森は黄金色に染まつて來た。梢の中では人知れず鳥が啼いてゐた。

『あの老人のジオバンニ・ディ・スコルヂョを好く御覽になりましたか？』間もなくフェデリコは斯う訊ねた。

『うん。』と、私は答へた。『あの微笑とあの眼はどうしても忘れられないね。』

『あの男は聖者ですよ！』とフェデリコは云ひ續けた。『あの男のやうに働いて苦しんだものは誰もありません。子供が十四人ありましたが、丁度木から果實が熟れて落ちるやうに一人宛死んで仕舞ひました。妻君といふのが又ひどいがみがみやでしたが、それも亡くなりました。今では全く獨身です。子供等は親爺を全くの裸にして仕舞つた揚句に死んで行つたのです。恩知らずの限りをやつて苦しめたんですね。それもあかの他人の不人情といふぢやなくつて、自分の血や肉を分けた子供の仕業でさ、それをこらへなければならなかつたのですよ。どうです。謂はは恩を仇で返されたやうなものですが、子供は矢張り可愛いものと見えて、何時も可愛がつていろ〳〵手をつくしてゐましたよ。今でも可愛がつて、呪つてやるなんてことは夢にも思つてゐません。又臨終の時には、よしやたつた一人で死ぬにしても屹度子供達を祝福するでせうよ。人にもあんなに生一本な善良さがあるなんて不思議ぢやありませんか。何だか本當のやうにも思はれませんね。そんなに苦しんでゐながら、尙ほ貴方が御覽なすつたやうな微笑を堪へてゐるなんて！　ツルリオ、屹度、貴方の爲めにもなりますよ、あの微笑を忘れずにゐるのは——』

（十六）

愈々と云ふ時が、あれほど待ち焦れてゐた、而かも怖れてゐた時が間近く迫つて來た。ジュリアナはもう覺悟を決めてゐた。彼女はきつぱりマリアの氣まぐれな願ひを卻けて、たつた一人自分の部屋で私を待つてゐた。

私は何と云つたものであらうか？　彼女は又何と云ふであらうか？　彼女に對してどんな態度を取つたらよからうか？　前から考へて置いた計畫や、思ひつきはすつかり消えて仕舞つて、ただ堪へ難い憂慮の念のみが殘つてゐた。誰が此の會合の結果を豫知することが出來ようか？　私は全く落膽して仕舞つた。自分で自分の行爲や自分の言葉が自由にならなかつた。私はたゞ一寸と觸つてもむら〳〵と起き上つて來るやうな曖昧な矛盾した感情の荒立つてゐるのに氣附いてゐるだけであつた。此時位私は自分の魂を寸斷する不調和、絶えず爭つてゐて、どう支配しようとしてもきかずに、荒れ狂つてゐる、矛盾したいろ〳〵な性情をはつきり認めて、落膽したことはなかつた。

斯ういふ魂の混亂に持つて來て、更に、あの日小止みなく私を苦しめた殘酷な影像の爲めにどうやら五官にも狂ひが出來て來た。そして今斯うしてジュリアナと面を向けるやうになつて見ると、私には大切な、又私の思ひついた行動の計畫を實行するには無くてならない同情や、憐憫や、勇氣と云ふやうな感情は微かに心の何處かで動いてゐるだけで、恰かも陰氣な行潦や人を欺し易い陷穽を蔽ふ、ぼつとした靄のやうな力しかなかつた。

私が部屋を出てジュリアナの處へ行かうとしたのは、もう夜半に間も無い頃であつた。物音はすつかり絶えた。ラ・バディオラは深い沈默に蔽はれてゐた。私は耳を傾けた。靜寂の底からは私の母や、弟や、小さい娘達の如何にも苦勞のない、純潔な靜かな寢息までが聞えるやうであつた。私は前夜と同じやうに又もやマリアの寢顏を眺めた。他の人達の顏にも眼をやつたが、誰の顏にも平和や深切や安靜の表情が漂つてゐた。私の心は急に優しくなつて來た。昨日私が消えない先にちらつと見たあの幸福が再び幻影となつて明るく輝いて來た。若し何の事もなく、私が何も知らないで、何處までも騙されてゐたならば、今宵はどんなであつたらう！　何か神聖な悅びのある處へ行くやうな氣持でジュリアナの許へ行つたに相違ない。さうすると私の烈しい愛を取卷く此の沈默よりも又と樂しいものが他にあるであらうか？

私は昨夕母の脣から思ひがけない事實をきゝ取つた部屋を通つた。私は時を知らせて呉れる柱時計の音も聞いた。振子が規則正しく搖れるのは、ただ私の苦痛を增すばかりであつた。どういふものか私は自分の心の動きとジュリアナのそれとが一致するやうに思つた。私は二人の間を隔てゝゐる空地を、次第に胸の皷動を高めながら通つた。

私は合圖をしないで直ぐに扉を開けて這入つた。ジュリアナは、目の前に片手を卓子の隅に置いたまゝ、身動きもせず、まるで石像のやうに眞直に立つてゐた。

私は今もその時の光景をはつきり思ひ浮べることが出來る。其の時から今日まで何一つ私の記憶から消え去つたものはない、又何一つ薄れたものもない。現實の世界はすつかり消え去つて、二人の人間のみが殘つてゐた。心は壓しつけられて、一言も發することは出來なかつた。それでも私だけは、まるで芝居でも見てゐるやうに、心だけは不思議に澄んでゐた。舞臺上の効果に今一段强めるとでも云つたやうに、蠟燭が一本卓子の上には燃えてゐた。ゆら〳〵と燃えてゐる焰は、劇中人物の一人が、愁嘆場とか、たんかきりとかの身振をやつて、四邊に恐怖を傳はせると、それを一層擴げるやうに思はれた。

私は到頭、かういふ沈默やジュリアナの石像のやうな不動の姿に堪へられなくなつて、此方から言葉をかけた。初めて此の場の不思議な光景は薄らいだ。私の聲は思つたよりも變つてゐた。なぜか低くなつて顫へを帶び、おづおづした調子さへ現はれた。

『私を待つてゐたんだらう？』
『えゝ。』と彼女は伏目になつたまゝ答へた。
彼女の腕も、卓子に凭れてゐる手も、木像のやうに硬くなつてゐた。私は彼女が全身の重みを寄せかけてゐる脆い柱が刻一刻としなつて、遂には彼女が床の上に倒れてこつぱみぢんになりはしないかと氣遣つた。
『私の來た譯は分つてゐるだらう。』と、私は胸の中から一語一語引出し乍ら、緩かに話した。
彼女は答へなかつた。
『本當かえ。』と、私は尙も續けた。『本當だね——私がお母さんから聞いたことは。』
答は無い。彼女は元氣を集めてゐるらしかつた。其の間に私は彼女が、『いゝえ。』と答へないとも限らないと考へたのは、如何にも不思議であつた。
間もなく『本當です。』といふ返辭があつた。聞いたといふよりも、却つて色の失せた脣にさういふ言葉の浮んだのを見たと云つた方がいゝかも知れなかつた。
母から受けたのよりも一層烈しい打擊に私は襲はれた。私は何も彼もちやんと知つてゐた。私は二十四時間の間それを確知することに努めてゐたのであつた。それだのに、此の明白な精確な事實は、まるで動かし憎い眞理が始めて顯はれでもしたかのやうに私の心を動か

した。
『本當だと！』と私は思はず繰返した。自分に向つて聲高に話したやうなものだつた。そして私は、生きながら意識を有つて地獄の底に行つたら恐らく感ぜられるかも知れないやうな感じに打たれずには居られなかつた。
ジュリアナは顏を上げて、必死になつて私の眼を瞶めた。『ツルリオ、聽いて下さい。』と、彼女は云つた。
彼女は呼吸をはずました、聲は咽喉で塞つたらしかつた。
『聽いて下さい——私は自分の爲すべきことは知つてゐます。私は今貴方にこんな思ひをさせまい爲めに、どんなことでもする決心でした。だが、どうしたものか私は今まで生き延びて、又とない恐しいこと、私が狂氣のやうに恐れてゐることを堪へ忍ばなくつちやならないやうになりました——あゝ、お察し下さい——死ぬよりも幾層倍恐しいか知れません。ツルリオ、ツルリオ、どうぞ——』
彼女は息の根が塞つた、何だかそのまゝ窒息でもするのぢやないかと思はれた。彼女の聲は大變高くなつたので、私は、彼女の一番奥底く潛んでゐる纖維がはちつきれるやうな印象を受けずにはゐられなかつた。私は卓子の傍の椅子に腰を下して、兩手で頭を抱へながら、

彼の云ひ續けるのを待つてゐた。

『こんなことにならない間に當然死んでゐなきやならないのです。ずつと前に死んでゐる筈なんです！　どんなことがあつても、此處へ來なかつた方が好う御座いました——貴方がメニスからお歸りになつた時にはもう私はゐなかつた方が——。私が死んぢやつてさへゐれば、こんな恥かしいことは知らせずに濟んだのです。貴方は屹度私のことを歎いて下さつたでせう、そして始終私を慕つて下さいましたらう。昨日仰しやいましたやうに、恐らく私は何時も貴方の心を奪ふ、立派なたつた一人の戀人で居られましたらう。私は死ぬのが怖かつたんではありません——御存知の通り——今だつて怖くはありません、たゞ子供のことやお母さんのことが氣になつて、一日一日延びて來たんです。ツルリオ、それは酷い苦しみでした。長い、烈しい苦しみでした、一つや二つの命ぢやありません、無數の生命を粉みぢんにして仕舞ひました。でもまだかうやつて生きてゐます！』

彼女は一寸言葉を切つたが又續けた。『私のやうなこんなに弱蟲に、どうして斯ういふ苦しみに堪へられる力があるのでせうか？　私の不幸は、其處までも追つかけて來るのです。ねえ、貴方と一緒に此處へ來るのを承諾した時にも私は思ひました。「病氣は屹度段々惡くなるに相違ない。彼處へ行つたら直ぐ寢床に就いて、二度と起き上れますまい。さうすると自然

に病氣で死んだやうに見える。ツルリオは何も知らないし、何一つ怪しむこともあるまい。すつかりそれで片がつく——」つて。だがそんなことどころか、私は今もかうして立つてゐます。そして貴方はすつかりお知りになり、何も彼も駄目になり、取返しのつかないことになつて仕舞ひました！』

彼女の聲は大變低く而かも吃り勝ちだつた。でも鋭い聲で話されるよりも、私の耳には一層强く響いて來た。思はず自分の顳顬に手を當てゝ見ると、動悸が烈しく打つてゐるので、まるで露出しになつた動脈が掌に觸つてゐるやうな氣がしてぞつとした。

『私のたゞ一つの願ひは貴方に本當のことを知らせたくないといふことでした、それも私の爲めではなく、貴方の爲めに、貴方の心を靜かにして置きたい爲めでした。私が恐しいことに出會つてぞつとしたことや、私のどんな苦悶を嘗めたかといふ事などは御存じないでせう。二人が此處へ來てから昨日まで、貴方には希望がお有りなすつた、貴方は夢想していらつしやつた。割合に幸福でいらつしやつた。ですが、かういふ祕密を胸に懷いて、懷しい平和な家の中で、始終お母さんの傍にゐて、私が何んな生活をして來たか、それを想ひ遣つて下さいまし！　昨日ヴィルラリルラで、貴方は心をかきむしるやうな優しいことを云つて下さつた、その中で「お前は何も知らず、何も氣附かずにゐた。」と仰有いましたね。あゝ、あれは嘘で

す！　私は皆んな存じてゐました、すつかり察してゐました。そして貴方が優しい眼附をなさるのに氣がつく度に、私は落膽するやうな心持になりました。ね、聽いて下さい。私は本當のことを申上げてゐるのです、本當のことばかりを。私は貴方の前に斯うして立つてゐます、死にかけてゐる女です——虚僞なぞ如何して申せませう。どうぞ私の言ふことを信じて下さい——私辯解しようなどとは少しも思つてゐません。もう何も彼もお終ひです。でも、ただ一事だけ申し上げたいのです、本當のことを。貴方にお逢ひしましたその日から私がどんなに貴方を愛してゐたかは御存じですね。幾年も幾年も私は夢中で貴方に身を捧げてゐました。私が幸福だつた年月は言ふに及ばず、貴方の愛が冷めて、私が不幸に暮らすやうになつてからも私は矢張りさうでした。ね、御存じでせう。貴方は何時も自分のお好きなやうに私に振舞ひました。私は貴方のお友達にもなり、妹にもなり、妻にもなり、戀人にもなつて、何時も柔順でした。貴方のお望み次第で私は何んな犧牲をも拂ふ覺悟をしてゐました。でも、ツルリオ、私は決して貴方を責めようと思つて、長い間お仕へ申してゐたことを想ひ出して貰はうなどとは思つて居りません、どうぞそんな風には思つて下さいますな。決して咎め立てをするのではないのです、ないのです。私の胸には貴方に逆ふやうな苦い雫などは一滴も御座いません、分りまして？　一滴だつてあるもんですか。たゞ〳〵私の心盡しと愛情のこと

を言はせて下さいまし。決して途切れたことのない、決して止んだことのない私の愛のことを。解りまして？——決して、決して止んだことのない愛のことを。そして貴方此の二三週間位、貴方に對する愛情の高まつたことは御座いません。貴方は昨日あんなに話をして下さつた。あゝ若し此の數日間に私が送つた生活を話すことが出來ればいゝのに！　私は何も彼も知つてゐました、何も彼も察してゐました——それだのに私はわざと冷淡にしてゐなければなりませんでした。貴方の胸に凭り懸つて、眼を閉つたまゝ、貴方の爲される儘にしようと思つたことも、一度や二度ではありませんでした。それほど私はさういふ氣持を抑へるのに疲れて弱くなつてゐました。何日かの朝、さう土曜日の朝でしたね、貴方が花を持つて私の部屋へおいで下さつた時、私は貴方を眺めました。お顏は元のまゝのお顏でした——生々して居つて、にこ〳〵していらつしやる、眼は晴々してゐましたつけ。そして搔痕のある手をお見せ下すつた時は、私もうたまらなくなつて、其の手に接吻したくなりました。ですが、さうするのをとめた力は一體何んでしたらう？　私はさういふことをする價値のないことをつく〳〵感じたのでした。そして私は直ぐに、花に添へて私に捧げてくれた喜悅と幸福とをすつかり見とりました——それだのに私は永久に、其の幸福や喜悅を拒まなければならなかつたのです。あゝ、ツルリオ、さういふことにも堪へて、別に破れもしないとすれば、私の

心臓は何んな辛いことにもめげないんですねー　私は餘程執拗く生命の綱を引きしめてゐるんでせうね。』

彼女は、皮肉とも憤怒ともつかない妙な口調で後の一句を云つた。私は顏を上げて彼女を見ようとはしなかつた。其の言葉を聽いてゐると私は氣持が惡くなつて、酷く苦しくなつた。それでも言ひ終つた時には、私は身顫をした。私は急に力ぬけがして、後が話せなくなりはしないかと氣遣つた。そして、彼女の口から、もつと別の告白や、彼女の魂のもつと深い囁きやを待ち望んでゐた。

『大間違ひでした。』と、彼女は續けた。『貴方がエニスからお歸りにならない內に死んで仕舞はなかつたのは大間違ひでした。ですが、あの可哀さうな娘等、あれをどうして殘して置かれませう？』

彼女は一寸躊躇した。

『それに貴方を殘して置くのもつらかつたのです――屹度貴方に迷惑がかゝるだらうと思ひます、貴方は後悔なさいますでせう、世間の人は貴方を責めませう。お母さんにはどうしたつて隱すことは出來ませんでせう。お母さんは如何いふ譯で私が死ぬやうになつたか、貴方に屹度お訊ねになります、ですから今まで隱して祕密にして置いたことも、すつかりお分

りになりませう。あの人の好いお母さん！』

彼女の聲は、こらへかねてゐる涙に咽んで、段々微かになつて、顫へさへ帶びて來た。私も何だか悲しくなつた。

『私はそのことを考へました。又貴方が此處へ來ようと仰有つた時には、私はお母樣をお母樣と呼ぶ價値のない女、お母樣に接吻される價値のない女、妹と呼ばれる値値のない女になつたことを深く考へましたの。ですが私が心が弱くて、すぐに周圍の壓迫に感じ易いので、それは御存じの通りです。私はもう何の希望もなくなりました。死より外に遁れる道はないと知りました。私は一日々々と頸に卷いてある紐が段々堅くなつて行くのを知つてゐました。それなのに、私は一日々々と無駄に時を過して、手近に死ぬる確かな手段があつたのに、いざ決心も出來ないのでした。』

彼女は言葉を切つた。不圖何を思つたのか、私は顏を上げて凝つと彼女を瞶めた。ジュリアナは酷く身顫をしてゐた。私に凝視められたので、苦しんでゐることが分つたから、私は又頭を垂れて元の姿勢に返つた。

彼女は其時まで立ち通しであつたが、やつと腰を下した。

沈默が暫く續いた。

『魂が同意しない場合でも。』と、彼女はやつと大變おづ〳〵しながら訊ねた。『過失は矢張り過失だとお考へになつて、さう思つて。』

過失といふ言葉を云はれたゞけで、靜まり返つてゐたあの暗い仰々しい深淵が再び私の心に浮き上つて來た。苦い唾液のやうなものが急に口中へこみ上げて來た。思はず私は嫌味を云つた。

『情けない魂だね！』と、半ば冷かすやうな微笑を湛へて私は云つた。

ジュリアナの顏には、劇しい苦痛の色が浮んだ。私は直ぐさまあゝ惡いことを云つたなと思つた。此の上殘酷な眞似は迚も出來なかつた。そしてかういふ場合に、あの溫しいすなほな女に皮肉などといふ武器を用ゐたのは、返す〳〵も卑劣な所業だつたといふことに氣がついた。

『赦して下さい。』と、死ぬほど打たれたやうな顏附をして彼女は云つた。(實際に彼女の眼には、時折傷ついた獸に現はれるやうな優しい、悲しさうな、まるで子供のやうな表情が浮んだやうに思はれた。)——『赦して下さい。貴方は昨日も魂のことを話して下さつたのね……慥かに今は「こんなことは女が自分の罪を赦して貰はうと思つて云ふことだ。」とお考へになるでせう。ですが、私は決して自分の罪を赦して頂かうとしてゐるのでは御座いません。貴

方が私を赦すことも忘れることも出來ないといふことは存じてゐます。どうしたつてそれから逃れる道のないことは知つてゐます——好う御座んすか？　私は只だ お母様から接吻を受けましたが、それを赦して頂かうと思つただけですわ……』

彼女の聲は、低くて微かであつた。それでも、鋭い、耳を劈くやうな聲よりも、一層私の心を傷ました。

『私の頭には、重い〳〵悲しみが載つてゐました。ですから、自分の爲めではなくたゞその悲しみの爲めに、お母様から額に接吻して貰ひました。私は無論接吻を受け價値はないのですが、悲しみはそれを受ける價値があつたのです——どうぞ赦して下さい。』

深切と憐憫の心が動いて來たが、私はそれを出さなかつた。私は彼女の顏を見ないやうにした。だが私の眼は怖しい事實の證據でも見つけようとでもするやうに、我知らず彼女の身體を見廻した。そして私は狂氣染みた動作を出さないようにと一生懸命努めなければならなかつた。

『今日明日と云つて私は計畫を果すのを延ばして來ました。さうしたら此家の人々がどういふことになるかそれを考へると、私は元氣はなくなりました。斯うしてぐず〳〵してゐる內に事實が隱せるものなら隱して置きたい希望、貴方にも知らせずに置きたいといふ希望も無

くなりました。此處へ來てから二三日も經たない間に、もうお母さんは私の樣子に感づいたんです。憶えていらつしやるでせう。あの日開放した窓に凭つてヒヤシンスの香にすつかり醉つてゐた時のことを！　お母樣が始めてそれに氣づいたのは其の時でした。私はどんなに恐しかつたか知れません！　私が今死ねば、貴方はお母樣から事實をお聽きになるでせう、斯う私は思ひましたの。犯した罪の償ひは何處まで行くのでせうか！　夜も晝も私は貴方の氣を損じないやうにする手段を何かとひどく頭腦を絞りました。土曜日に、來週の火曜日にヴィルラリルラへ行きたくはないかとお訊ねになつた時、私は考へても見ないで、なるやうになるのだと思ひ、機會を信賴して承諾致しましたの。私はこれが一生の御名殘りだと思ひました、で妙に昂奮して、狂氣のやうな眞似をやつたんです。あゝ、ツルリオ、貴方が昨日何と仰有つて、それから私の苦しみがどんなだつたかお解りになれば話して頂戴——ねえ？』

彼女は斯う話しながら、まるで答へるにも困るやうな質問を發して私の心を苦しめでもするやうに、前の方へのり出して來た。

『貴方があんなに優しく仰有つたことは今までに御座いませんでしたわ。』と、彼女は組合せた手を握り絞りながら續けた。『あゝいふ調子の聲を私これまで聞いたことが御座いませんでした。あの古い腰掛に腰を卸して「もう晩過ぎるかえ？」と、お尋ねになつた時のお顏を見て、私はすつかり驚きました。ええ、もう晩過ぎますわなんてどうして答へられませう？一擊で貴方を押潰すなんてことがどうして出來ませう？　そしたら二人はどうなることでしたでせう？　それに、私は何も彼も投げ出して恍惚醉つてそれで死んで仕舞ひたいと思ひました。本當に發狂者でした。死ぬといふことと烈しい愛といふものの外は何も分りませんでした。』

彼女の聲は妙に嗄れて來た。今見ると、彼女は見違へるほど、すつかり變つて仕舞つた。顏はひきつつて、下脣は烈しく顫へた。眼は熱病のやうにきら〳〵輝いてゐた。

『私を責めなさるの。』と、彼女はかすれた然し鋭い口調で訊ねた。『昨日あんなことをしたので侮蔑みなさいますの？』

彼女は兩手で口を蔽うた。それから暫く默つてゐたが、旋て、疲れてゐるやうな、情に燃えてゐるやうな、又恐れてゐるやうなはつきりしない口調で——どんなに深い胸の奥底から出て來るのかも分らない口調で！——彼女は附け足した。『昨夜毒を服まなかつたのはたゞその爲めばかりでした。』

彼女は兩手を膝に下した。思ひきり弱い心を振り棄てゝ、再び聲にも力を入れて、云ひ出した。『今日まで生き延びてお逢ひするのも運命ですわ。お母樣、貴方のお母樣からお聞き

になつたやうな事實が起つたのも運命ですわ！　昨夜此處へいらしつた時、もう御存じでだつたんでせう。たゞ默つてらつしやつただけの事でせう。そしてお母様の前では、私の差出した頬に接吻して下すつたわね。何卒死ぬ前に貴方の手に接吻させて下さい――それだけがお願ひです。貴方をお待ちしてゐたのも、今貴方の云ふなりになりたいからです。貴方の仰有ることなら何でも悅んでします、さあ仰有つて下さい。』

『お前は生きてなければならないのだよ。』これが私の答へであつた。

『いゝえ、それは駄目です、ツルリオ、それは駄目です！』と、彼女は叫んだ。『私が生きてゐれば、何んな事になるか、お考へにならなかつたんですの。』

『いや、考へたよ、だが、お前は生きなければならないのだ。』

『おゝ、怖いこと！』

彼女は屹度お腹にゐる今一人の人が譯もなく酷く厭になつたのであらう、烈しく身顫ひした。

『ねえ、ツルリオ、貴方は一番酷いことを知つてゐなさる、さうですわ、私は今死んだつて自分の恥をもう隱して置くことは駄目です、貴方は何も彼も御存じ。そして私はかうやつて貴方の前にゐます、お互に未だ顏を見合はすことも出來ます、それに話をすることも出來ます！　今はもうすつかり問題が違ひます。私は貴方の眼を忍んで自殺しようなぞとは夢にも思ひません。それ所か、お手を借りて一番自然な方法でそれを仕遂げて、誰からも疑はれないようにしたいのです。毒藥が二品あります、モルヒネと昇汞です。だけどそれぢや駄目だと思ひます。毒藥で死んだのはなか〳〵隱せないでせう。それに思ひ懸けないことで、ふつと死んだんだつて云ふ風に見せなくつちやありませんわ。分つて？　それが出來れば二人の目的は達せられます。祕密は二人の外には洩れないことになりますわ。』

彼女ははき〳〵と口早で話してゐた。そして恰も死なして呉れといふのでもなく、馬鹿氣た計畫を實行する其の仲間になつてくれといふのでもなく、ある關係の出來るいゝ思ひつきがあるから承諾してくれと賴むやうな態度であつた。私は構はず彼女に話し續けさせた。あんなにか弱い、蒼ざめた、病的な、それでゐて烈しい道義心に深く心を動かされてゐる彼女を瞶めて、其の言葉をきいてゐると、私は何となく或魔力に蠱惑されないではゐられなかつた。

『お聽き下さい、ツルリオ。一つ思ひついたことが御座います。フェデリコは今日の貴方の無鐵砲を、河の堤を疾走したとかいふ冒險を、すつかり話して呉れました。そして悲しさまぎれにそんな眞似をして、生命を犧牲にするやうな振舞ひに出たんぢやないかと一人思つて、ぞつとして身顫ひしました。よく考へて見ると分るやうな氣がしました――明瞭と何も

彼もが眼前に見えて來ました。これから先のお苦しみ、どうしても遁れられない苦しみ、日に日に烈しくなつて、癒すことも出來ない、迚も堪へられないほど重い苦しみもすつかり分りました。あゝ、ツルリオ、貴方は屹度其の苦しみを豫想なすつて、迚も堪へられないと思つたんでせう。貴方と私と二人の魂、あの二人の愛を救ふ道がたゞ一つあります——それは二人の愛とかう言はせて下さい。今も昨日云つた貴方のお言葉を信じさせて下さい、そしてこれまでになく貴方を愛すると繰り返し言はせて下さい。だけど、お互に愛してゐればこそ、私は死なゝければならないのです、貴方は二度と私に會つてはならないのです。』

さういふ聲の中に響く烈しい道義の念は、其の時はまるで彼女の全身から射し輝くやうで並大抵のものではなかつた。烈しい戰慄が全身を傳はつた。私の魂は一時的な幻影に襲はれた。暫く、私は實際、私の愛も此の女の愛も量り知れない崇高な理想に達して、人の禍患を絶し、罪に汚れず、原始の儘の強さに返つたものと空想した。然し云ふまでもなく、其の反動が起つて來てどうすることも出來なかつた。さういふ意識は何處かへ行つて終つて、もう譯が分らなくなつて仕舞つた。

『私の言ふことを聽いて下さい。』と、彼女は他に話が洩れるのを氣にでもするやうに、聲を低めて云つた。『私フェデリコに、森だの、炭燒男だの、其の他あの方のお話しになつた處が是非見たいと話して置きました。明日の朝あの方は又カサル・カルドーレへ行くんでせう。ですから、私達と一緒には行けませんから、二人だけで參りませうよ。フェデリコはファヴィラに乘つて行つてもよいと仰有いました。河の堤へ出れば、私は今朝貴方がなすつたやうにしますわ。すると思ひがけない事が起ります、屹度。フェデリコの話では、アッソロ河へ落ちたら助かりつこはないさうです。どうか賛成して下さいね。』

さういふ言葉は條理がはつきりしてゐたが、彼女は何だか錯覺のまに〳〵なつてゐるやうであつた。頰は猖紅熱にかゝつてゐるやうに眞赤で、双眸は異樣な光を放つてゐた。

緣起でもない河の幻影が眼の前を急いで過ぎた。

彼女は又しても私の方へ乘出して、『どうか賛成して下さいね。』と、繰り返した。

私は起つて、彼女の兩手を把つた。私は彼女の烈しい昂奮を鎭めてやりたかつた。苦しみや烈しい憐憫の情が洪水のやうに私の胸へ押寄せて來た。私は優しい聲で、穩かに、感情を籠めて云つた。

『ね、ジュリアナ！　そんなに昂奮しちやいけないよ。苦しみ方が少し烈しい。悲しみ惱みの爲めに、お前は心を搔き亂してゐるのだよ。ねえ！　元氣を出して、氣をしつかり持たなくつちやいけない。もうこんなことは何も考へないことにしよう。そしてたゞ子供のことだ

けを考へるやうにおし。此の罰は私が受けた。お前を始終苦しめてばかりゐたんだから私が受けるのが當然だ。私が引受けたよ。その罪は私が負ふ覺悟だ。だがお前は生きなければならない。ジュリアナ、さあ約束をしな、マリアやナタリアの爲めだよ、お母さんに對する——お前の愛の爲めだよ、昨日私がお前に云つたあのことの爲めだよ。さあ何んなことがあつても死ぬやうなことは謀らないといふ約束をしておくれ。』

彼女は頭垂れた。旋て急いで手を振り放つて、今度は私の手を掴んで強く接吻した。私は彼女の熱い脣、熱い涙を感じた。私は手を引かうとしたが、彼女は私の手に縋り附いたまま、啜り泣いて、涙に濡れた顏を上げて私を見た。口の邊りには痙攣的な皺が刻まれたが、それには彼女の魂が惱んでゐる何とも言へない苦痛が現はれてゐた。彼女は椅子から滑り落ちて、私の前に跪いた。私は彼女を立たせることも、物を云ふことも出來なかつた。いろいろな感情が躍り上つて來て息が塞るやうだつた。女の痛ましい痙攣を引起した口邊の恰好を見て私はすつかり膽をつぶした。憤恚も矜持もすべて無くなつた。たゞ生の盲目的な恐しさが感ぜられるばかりであつた。倒れてゐる女や自分から氣づいたものは、たゞ苦痛や、人類永遠の不幸や、避け難い罪惡に對する呪詛や肉の重荷や、私達の存立の根柢に深く鐫られた宿命的恐怖や、私達の愛の肉體的悲哀だけであつた。そこで私は苦しんでゐる、私まで泣かせるやうにした此の不幸な女と同じ位置につきたい本能慾に襲はれて、わさと倒れた。私も亦啜り泣きを始めた。そして私達は久し振りで、再び涙を交へるやうになつた。それは燒けつくやうに熱かつたが、二人の運命を變へるには何の役にも立たなかつた。

（十七）

徒らに泣き悲しんだり、無駄な絶望に沈んだりした後に直ぐ續いて來る樣な淋しさ儚さの感じは、迚も言葉などで云へたものではない。涙は悲しみを現はす一時のしるしに過ぎない。ものの峠は一時だけのことである、過度も必ず一時的のものである。その後ではすぐ、ぐつたりして、謂はゞ枯れつくしたやうな氣がして、今までよりも自分の無能なことがよく分つて及びもつかないことを前に控へて、ただあつけにとられて落膽してゐるだけである。

私は先づ涙を拂つて、ジュリアナや自分との態度や、二人の身邊やを再び意識するやうになつた。二人は未だ跪いてゐた、ジュリアナは未だ啜り泣いて、顎へがとまらなかつた。卓子の上には蠟燭が點つてゐて、焰は微かな音を立てて時折搖めいた。部屋の何處かで靜けさを破つて時計がチクタクと鳴る音が微かに聞えた。生命は流れて行つた、時は飛んで行つた。

私の魂は空虛であり孤獨であつた。

激しい感情が過ぎ去り、夢我夢中の悲哀が一度過ぎて行くと、もう二人の斯うしてゐる樣子は無意味な、をかしなものであつた。私は起ち上らなければならない、ジュリアナを立たせなくちやならない、何とか彼女に言はなければならない、此の現狀に確然と結びをつけなければならない。だが手始めするのが妙に厭であつた。肉體的にも精神的にも、極めて僅かな努力さへ出來ないやう氣がした。こんな狀態にゐて、こんな難局に立つてゐて、その自由になつてゐなければならないのが、私には何よりもつらかつた。そしてジュリアナに對して輕い怨のやうな考へがむら〳〵と起つて來た。

私は立ち上つた。そして彼女にも手を貸して同じく立たせてやつた。時折彼女は啜り泣きをもらしたが、其の度に私のこの奇妙な怨の念は募つて行つた。

して見ると、二人の人を結び附ける愛情には極く僅かではあるが憎惡の感情が混つてゐるといふことは、此のどうにもならない憎惡の念が私達の一番樂しい恍惚狀態や、一番優れた衝動やを穢すといふことは、本當なのであらうか？　魂の美はしい性質も其の中に見えない腐敗の芽を包藏してゐて、それを腐らせるといふのは本當であらうか。

『ジュリアナ、落著いてくれ。』と私は云つた。(そして私は自分の聲が荒過ぎはしなかつたか

と痛く氣遣つた。)『今は力のありつたけを出さなくつちやいけない。さあ此處へお坐り。水でも上げようか。嗅鹽でも持つて來ようか？　何が可いのかえ。』

『ぢや、水を少し下さいまし。凹間の中の小卓子の上に御座いますから。』

彼女の聲は未だ涙含んでゐてきれ〴〵であつた。彼女は大きな姿見鏡の前にある低い長椅子に腰を掛けると、手巾で顏を拭いた。啜り泣きは未だすつかりやまなかつた。

私は水を取りに凹間に這入つて行つた。寢床の用意は既に出來てゐて、蒲團の隅が裏返りかへつてゐた。私のよく知つてゐる菫や香菖蒲の根の微かな香りが鼻を打つた。そして深く私の心を動かした。急いで水を容れて、ジュリアナの許へ歸つて來た。

彼女はゆつくりと一口、二口飲んだ。其の間私は彼女の前に立つて、脣の動き具合を瞶めてゐた。

『有難う、ツルリオ。』と彼女は云つて、半ば飲みかけの洋盃を私に渡した。私も咽喉が渴いてゐたから、殘りを飲んで仕舞つた。此の一寸とした思ひがけない行爲は少からず私の心を攪亂した。私は彼女から少し離れて長椅子に坐つた。二人とも自分自分の思ひに耽つて、默つてゐた。

長椅子と二人の姿は正面の姿見鏡に映つた。互に顏を見合せないでも、二人は顏が見えた、

然し灯が細くてチラ〳〵してゐたので、ぼんやりしてゐた。私は穴の開くほど姿見鏡のほつとした奥底を見入るやうにしてジュリアナの姿をぢつと瞶めた。すると次第にそれは神祕的な俤になり、時が經つて薄くなつた女の寫眞像についてゐる妙に心をそゝる魅力が湧き、幻覺から生ずる強い假りの生命を具へた姿となつた。そして段々此のぼつとした影像は實際の人間よりも生々した所のあるものに思はれて來た。私は其の影像の中に、私の抱愛の女や、情熱の女や、不貞の女やを見るやうになつた。

私は眼を閉ぢた。今一人の男が急に眼の前に現れた。

『今まで。』と、私は考へ出した。『彼女は未だ一度も直接に自分の墮落、墮落の事情に關しては言ふ所がなかつた。たゞ一事意味ありさうな口吻を洩したのは、魂が承知しない場合でも過失は同じやうに過失だとお考へになるのと云つただけだ。だがそれはほんの言葉に過ぎない！　そして彼女はさう云つて私に何を祭して貰ひたいと思つたのだらうか？　それは單に罪を犯したり破廉恥な行爲をやつたりして、それを辯護し若しくは酌量して貰はうとする場合に、何時も用ゐられて來た微妙な區別に過ぎぬではないか。だが、一體彼女とフィリッポ・アルボリオとの間には、あの否定し得ない肉の關係以外に何んな關係が存するのであらうか？　どんな事情で彼女は身を任せたのであらうか。』私は烈しい好奇心に責まれた。私自身の經驗に徴していろ〳〵な暗示が浮んで來た。影像ははつきり形が出來ると又變つたりして、後から後からと矢繼早に又明瞭に浮んで來た。私はずつと以前に見たことのあるやうなジュリアナの姿を見た。彼女は朝顔形の窓に腰掛けて、たゞ一人、膝の上に本を載せたまま、懶げな蒼白い顔をして、今にも氣でも遠くなりさうな姿をしてゐた。でも見開いた眼には手荒く押へつけられた物から起るやうな、何とも云へない不安が浮んでゐた。こんな風にぐつたりとしてゐた時に、私の家の内で、あの男に不意を擊たれたのではなからうか、無意識の間に犯されたのではなからうか、そして醒めて見て、彼女は恐怖と嫌惡とに堪へられなくなつたのではあるまいか。そこであの男を逐ひ遣つて二度と逢はないといふことにしたのではなからうか？　私は又十一月の朝、彼女が姿見鏡の前に立つてゐる姿を見た、ヴェールを纏うた時の婀娜な姿を見た。裝ひの色合を見た、そして日の射してゐる街の鋪石道を輕く歩んで行く足音を聞いた。彼女はあの朝、男と媾曳しようとして出かけたのではないか？

私は云ふに云はれない苦悶に惱んだ。的確に知りたいと云ふ狂的な慾望が、私の魂を責んだ。私の具體的な想像は益々深くなつて、極まる處を知らなかつた。ジュリアナに對する憎憤は益々烈しくなつて行つた。嫉妬の焔も熾んに燃え出した。或る忌はしい衝動から逃れる道はたゞ遁げ出すより外はないとさへ感じた。而かも私の意志は、痲痺してゐるやうであつ

た。私は自分を自由に支配することが出來なかつた。私は二つの相反する力、肉體の仕業では反撥と索引とに引きとめられて、其處に坐つてゐた。

今一人の男は現れたあの刹那から、執拗く私の眼の前に殘つてゐた。それはフィリッポ・アルボリオであつたか？　私の推量は正しかつたのだ？　間違つてはゐないだらうか？

私は不意にジュリアナの方へ振向いた。彼女は私を瞶めてゐた。私は彼女に問ひ質してみようと思つたが、咽喉が塞つて駄目だつた。私は視線を床の上に投げて頭垂れた。それから私は、まるで自分の身體から肉の塊を引きちぎりでもするやうな力を振ひ起して、私は訊ねた——

『其の男の名前は？』

私の聲は顫へて嗄れてゐたので、氣持が惡かつた。

不意に斯う訊かれたので、ジュリアナは吃驚した。それでも何とも答へなかつた。

『返辭をしないのかえ？』と、私はむらむらと湧き上つて來る憤怒の念を抑へ附けながら、かたくなに訊いた。前の晩、凹間の中で、荒れ狂ふ一陣の風のやうに私の魂を荒して行つたのも此の憤怒の情であつた。

『おゝ、神様。』と、彼女は狂氣の如くに呻いた。そして、椅褥に顔を埋めながら長椅子の上に身を投げ出した。『おゝ、神様！　神様！』

然し私はどうしても知らうと思つた。萬難を排しても彼女に告白させようと決心した。

『憶えてゐるね、十一月のあの朝早く、私が不意にお前の部屋へ這入つて行つたのを？　左様だらう？　何故行つたか分らない——大方お前が歌を唄つてゐたからだらうよ。オルフュースの一節を唄つてゐたね。お前は丁度出かけようとしてゐた時だ。私は寫字臺の上に本を見附けた。それを開いて飛頁の獻本の辭を讀んだ。小説だつたね。「祕密」——覺えてゐるね？』

彼女は椅褥の中に身動きもしないで臥つてゐた。物も言はなかつた。私は彼女に倚りかゝた。私は熱病の發作に襲はれた時のやうに顫へてゐた。

『あの男かえ？』と私は囁いた。

彼女は答へなかつた、が、不意にやけ力を出して起き上つた。まるで氣が狂つたやうであつた。そして私に身を投げ懸けるやうにしたが、又身體を引いて仕舞つた。

『赦して下さい！　赦して！』と彼女は叫んだ。『死にたい！　さうやつて責められるのは死ぬよりも辛う御座います。私は何でも堪へて來ました、これからもさうしますわ。ですが、それだけは、それだけは。私が生きてゐれば、何時までも二人は殉教者のやうな苦しみを嘗

めなければなりません。一日一日と段々怖しくなつて行きます。さうして貴方は私が憎くなつて來ます、憎しみといふ憎しみはみんな私に集まつて來ます。さうです。さうです。もう貴方のお聲に現れてゐます。どうか不憫だと思つて下さい！　さうならない内に死にたう御座います！』

彼女はすつかり精神が錯亂してゐるやうであつた。彼女は私にしつかり縋りつきたいやうな烈しい衝動に驅られたが、無理にさうもしなかつた、で如何にも情なささうに、兩手を握つたり、開けたりして私に手を觸れまいとした。そして彼女は頭の頂から足の先まで烈しく顫へた。

私は其の兩手を把つて引き寄せた。『では僕は何にも知らないでゐるんだね？』と、私は喰ひしばつた齒の間から云つた。私は相手と同じやうに狂氣の如くなつて、殘忍な本能に驅られて、彼女の腕を摑まへてゐた拳をギュッと握り緊めた。

『私は貴方を愛してゐます。私は貴方を始終愛して來ました。貴方の所有でした、貴方お一人の所有でした。たゞ一度心の弱くなつたあの恐しい一刹那だけは別ですが、お分りですの。心の弱かつたあの一刹那だけは。それは本當です。本當の事をお話し申上げるのです。信じて下さいませうね。』

彼女は椅褥の上に倒れた。彼女は泣き立てたが私の接吻で默つて仕舞つた。

（十八）

あゝ私が始めてあの罪を犯さうと思つたのは、確かにあの時ではなかつたらうか。

『私はしつこく嚙りついてゐるんですわ。』と云つたジュリアナの手痛い言葉を私は思ひ出した。だが私の考へてゐたのは、生命に對する彼女の執着さではなくて、彼女の胎内に宿つてゐた今一つの生命の執着さであつた。そして、私はそれに對して烈しい憤怒を感じた。始めて私は何とかしてそれを無くして仕舞ひたいと企らんだ。

私の敵意は段々激しくなつて來た。私は自分達の未來を描いて見た。千里眼でそれを見拔いた。ジュリアナは吾が由緒ある舊家の世嗣となる男の子を生むかも知れない。自分のでもない其の兒は無事に生長するだらう。私の母や弟の愛を一身に集めて、私の血を分けたマリアやナタリアにも勝つて可愛がられ、大事がられるだらう。ジュリアナは惰性で悔恨の念を段々失つて行つて、大びらに母としての感情を擅にするだらう。そして私のでもない其の兒は、彼女やその油斷の無い心遣ひに護られて生長して行くだらう。そして小暴君になりすま

して氣儘に振舞つて、我が家に君臨するだらう。その幻影は段々特色を帶びて來た。或る奇怪な光景が現れて、實人生の活動そつくりになつた。子供の姿はいろ〳〵に變化した。其の行動も其の身振も絶えず變つて行つた。時には、孱弱で、顏が蒼白くて、無口で大きな重げな頭を胸の上に俛れてゐる子供を想像することもあつた。又時には、圓々と肥えて、薔薇色で、快活で、お喋りで、可愛らしい惡作やお機嫌取りの好きな、取分け私によく懷いて、云ふことをよくきく善い子供を想像することもあつた。それは又全く反對に、酷く神經質な、癇癪持ちの、少し猫つかぶりで頓智もいゝが、惡賢くつて、姉達に辛くあたり、動物にも殘酷で、愛情の少しもない、しつけのきかない子供である場合もあつた。段々に此の一番お仕舞ひの想像が其の他の想像をすつかり抑へて永久にそれを抹殺してしまふやうになつた。で到頭さういふきまつた人物の典型が其處へ出來上つて、それには想像の上とは云へ恐しい生命力が加はつた。そして終には前から世嗣が生れたらつける名前と云つて決めて置いたライモンドといふ私の父の名前をさへ聾ふやうになつた。

憎いと思ふ心は直ぐ樣斯ういふ小さな幽靈を作り出した。私は幽靈を自分の敵手と心得て憎んでゐたが、相手の方でも亦私に對して敵意を有つてゐた。彼は私の犧牲であつた。私は彼の犧牲であつた。私は彼から逭れることが出來なかつた。彼も亦私から逭れることが出來なかつた。私達二人は鐵の檻へ這入つてゐる囚虜であつた。

彼の眼はフィリッポ・アルボリオの眼と同じ灰色であつた。いろ〳〵な表情を浮べて物を見たが、中でも一つだけは時々繰り返された想想の光景に現はれて强く私の心を動かした。それはかうであつた——私は思ひも寄らぬに、闇に包まれた不思議な沈默に滿ちた部屋へ入つた。そこには誰もゐないと想つて居た。不圖後を振り返つて見ると、ライモンドが灰色の、意地惡い眼附で私をぢつと瞶めて居るのではないか、其の刹那、私の胸には、罪惡に對する烈しい誘惑の念が湧いて來た。其處で此の忌はしい小さな者の上に打つて懸かりでもすると大變だと思つて、私は急いで其の室を逃出した。

（十九）

其處で私とジュリアナとの間には彼女は決して死なぬといふ約束が結ばれた。二人は共に虛僞の生活を續けた。それは醉漢のやうに、私達は二重の生活を送つた。つまり平穩無事な優しさや親孝行や、淸らかな愛情や深切な行爲やの寄り集つた生活と、動搖常ない熱狂的な、混亂した、變り易い、望みの無いある固定觀念に支配された。何時までも脅迫しつゞけ

てゐるやうな災殃に追求され、未知の大團圓に向つて進んで行くやうな生活とであつた。

私の魂は、時にかうした不吉なものゝ攻撃を遁れ、私を摑まへようとして幾千となく差し伸ばされる惡魔の手から免れ、折々垣間見たことのある一方の氣高い理想の巔へ昇つたことは無いではなかつた。私はアッソロ河畔の森の中で、弟がジオバンニ・ディ・スコルヂョのことを話した序に、妙なことを言つたのを想ひ出した。『ツルリオ、あの微笑を忘れないでゐるのは、いゝことですよ。』と云つた。あの老人の皺の寄つた脣に浮んだ微笑は深い意味を有つてゐるやうに思はれ、異常に光り輝くやうに思はれた。まるで神の眞理の啓示ででもあるやうに、私の心を引き立てゝ呉れた。

扨て、たまにさういふ時があるかと思ふと、其の時には、又もう一つの微笑が眼の前によく現れて來た。それはもう遠い〳〵昔のこと、何でも靜かな午後私が如何にも嬉しさうに取り繕つて、グッタリと仰向けに寢て、恢復期に向つてゐる病人を喜ばせると、思はず女の顏には微笑が浮んだ、その微笑である。アンドレー・ボルコンスキーがリザ公女の死顏を見て讀んだといふ從順な而かも怖しい質問を、私は絶えず妻の生顏の上に讀んだ。『貴方は私を如何して下さつたのですか。』彼女の口からは非難らしい言葉は一つも出なかつた。彼女は自分の罪を輕くしようと思つて、私の數多い醜行の一つだつて責めたことはない。彼女は拷問者の前で首を屈めて、一滴の苦味だつて自分の言葉には交へなかつた。だが、それにも拘らず彼女の双眸は『貴方は私を如何して下さつたのですか？』といふ質問を私に繰返し云つてゐた。

すると不思議にも犧牲的熱情が燃え上つて來て私はどんな苦難にも甘んじたいと思つた。これだけ大きな贖罪なら勇氣を出す張合ひがあるやうに思はれた。私は有り餘る力と、英雄的な精神と、悟りすました心とを有つてゐるやうな氣がした。私は悲歎に暮れてゐる妹の許へ行く途中でよく一人で考へた。『彼女を慰めてやる優しい深切な言葉をかけてやらう、彼女の不幸を和げる懷しい同情の言葉を掛けて遣らう、さうすりや、彼女も元氣附くだらう。』と。だが、實際彼女の前に行くと、私は何も云へなかつた。私の脣は開けることの出來ないように固く閉ぢて、心はすつかり惡魔に魅せられて仕舞つた。心の底に在る光明は、みんな、何處から來るやら分らない冷い微風に消されて仕舞ふやうに消え失せた。そして暗の中には、よく分つてはゐるが抑へ切ることも出來ない懶い憤怒の念がぼんやりと動き出した。それは確かに私の激情の發作の一つであつた。亂暴な辯解の言葉を口籠つてから私はジュリアナの眼を避けるやうにして、そこを逃げ出した。

（二十）

彼女が他人の前を取りつくらふことは、殆ど信じられないほど上手であつた。彼女は實に微笑するのが甘かつた！　私が彼女の健康を氣遣つてゐることは誰にも分つた。その爲めどうしても隱すことの出來ない憂鬱の發作にとき〴〵罹つても、別に不思議には思はれなかつた。私の心遣ひが母や弟にも知れたので、仕舞ひには、ジュリアナの病氣を今までのやうに輕くは見ないで、病氣に關する話さへ避けるといふ風になつた。それは實に有難いことであつた！

間もなくヴェベスチ博士がラ・バディオラへ來た。彼が來て呉れたのでみんなは安心した。其の診察に依ると、ジュリアナは健康を甚しく害して居り、神經系統が錯亂して、甚く貧血し、消化器管が全般に障害を受けてゐるといふことであつた。然し其の他の點では、何處にも別狀はなかつた。だから病人の健康狀態が其の間に良くなつて行けば、別に心配するやうな危險はなからうと云ふことであつた。其の他の點では、彼は過去の場合で異常な抵抗力の實を示した彼女の格別の體質を非常に信頼した。彼は彼女を强壯にする衞生的な治療法と養生法とを書きしたゝめて、田舍へ轉地することに贊成し、早寢早起と、適度の運動と、精神の安靜とに特別重きを置いた。

『特に貴方に御依頼申します。』と彼は本氣で私に云つた。

心の中で私は失望した。私は救ひの希望を醫者に求めるより外にはないと思つたが、今となつてはそれも駄目になつて仕舞つた。醫者の未だ來ない間のことであるが私は母親の生命を救ふには子供を犧牲にしなければならない、かう醫者が言つて呉れゝば可いと望んだ。さうすればジュリアナも救はれるし、そして病氣も恢復する。私も亦救はれる、私は壽命を延ばしたやうな氣がする、私は何も彼もすつかり忘れることが出來るかも知れない、尠くとも諦められるやうになるかも知れない。時はいろ〳〵の傷を癒し、いろ〳〵の悲しみを慰めて呉れる。其の内に私は又心が穩かになり、生活方針も改まり、弟に倣つて、人間と成り、他人の爲めに生き、新しい信仰を懷くことが出來る。私は苦しみの中から失はれた自尊心を恢復することが出來る。他人よりも勝つて苦しみを與へられる人は、又他人よりも勝つて苦しむだけの價値がある。これは私の弟の福音書中にある本文の一節ではないか？　だから、悲哀の中には向上の階段がある。譬へば、ジオバンニ・ディ・スコルヂョの如きは選ばれた一人である。斯樣な微笑を有つてゐる者は、神の賜物を有つてゐる。私には斯ういふ賜物を受くべき

價値が無いのだらうか？　斯様に私は望みもし考へもしてみた。私は贖罪する熱心があるにも拘はらず、私は苦痛の輕くなることを望まずにはゐられなかつた！

實際、私は苦しむことに依つて自分を更新することを望んでゐたが、他方では又それを恐れてゐた、さうだ現實の苦痛に面接することを無暗に恐れてゐた。私は救濟の正しい道を垣間見た、基督教的抱負で感激もした。それなのに今は又確かに破滅を導く道へ外れて行つた。私は醫者に向つて、人を安心させるやうな豫測に對して不信を抱き、自分の懸念してゐることを告白して、自分の提案を暗示するやうにした。私は何んな事をしても、ジュリアナの身を安全にすることを願ひ、そして、若し必要があれば、少しも悔いないで三人目の子供の生れる希望を棄てるといふことを醫者に知らせるようにした。私は何事によらず決して隱すには及ばないと彼に賴んだ。

彼は心から私を元氣づけた。そして更に附け加へて云ふには假令、重態になつても、決して手術なぞはしない、ジュリアナの現在の衰弱では、そんな事をすれば直ぐに生命に關はるやうな結果に到るかも知れないからといふことであつた。そして一番肝要なことは、身體の健康を恢復して置いて、愈々といふ時には盛り返した元氣と自信とを以てそれに接し得るといふことであると繰返した。

『奥様には特に氣苦勞が多過ぎるやうに思ひますが。私は古い馴染で、非常に氣を使つて來られたことも承知してゐます。どうか貴方から氣の引立つやうにしてお上げなさい。』

（二十一）

私の母は醫者の診斷でほつと胸を撫で下して、それからはジュリアナに對して一きは情深い心遣ひを見せるやうになつた、そして自分の優しい夢想や蟲の知らせを少しも隱さなかつた。彼女は孫の、小さなライモンドの生れるのを待ち設けてゐた。今度こそは確かに男だと思つた。

弟も亦ライモンドを待ち設けてゐた。マリアとナタリアとは、未來の遊び仲間のことを色色と無邪氣に問ひかけては、私や、彼等の母親や、彼等の祖母やを困らせた。

かうして、みんなの者は心優しい豫知や、吉兆や、美しい希望やを懷いて、未だ分らない、今迄の所では形の分らない人の生れて來るのを先觸れした。

或る日、ジュリアナと私とは二人きりで楡の樹蔭に坐つてゐた。母が丁度今彼方へ行つたばかりであつた。母は情愛の籠つた談話の中に、ライモンドのことに言ひ及んだり、私の亡

くなつた父の遠い昔の記憶を想ひ出しながらモンディノーと略して親しく呼んだりしたことさへあつた。ジュリアナと私とは努めて微笑するやうにした。母は自分の夢想や希望は同時に私達二人の夢想であり、希望であると想像した。そこで私達に其の夢を續けさせようとでも思つたのか、二人の側を離れて行つた。

日は沒したばかりであつた。空氣は爽やかで其の靜けさと言つたらなかつた。木の葉はそよとも動かなかつた。時々燕の群は、ヴィルラリルラでもさうだつたが、翼を羽搏かせながら鋭い啼聲を立てゝ空中を切るやうにして翔んで行つた。

二人は母の姿を見えなくなるまで見送つた。それから振返つて、互に物も言はず、きまり惡さうに顏を見合せた。二人は限りない不幸に押へつけられて、暫くは無言であつた。私はまるで人の世界からすつかり孤立して、私達たゞ二人だけで住んでゐるやうな氣がした。それは決して夢ではなくて、實際の深刻極まりないものであつた。私は身顫ひしながら、再び女の顏を見上げた。すると彼女の顏には、私の懊惱がそのまゝ映つてゐた。私は自分の顏にも彼女から見れば同じやうな懊惱の影が映つて居るに相違ないと推測した。

暫くはお互に不幸の底を探らうとしたが果てしのないのに氣がつくと、先づ彼女の方から低い聲で云ひ出した——

『こんなことが一生涯續いて行くものでせうか。』

私は口にこそ出さなかつたが、心の底では『いや、續きはしない。』とはつきり答へた。

『あのね、貴方さへ一言仰有つて下されば何事も片が附くのです。さうすれば貴方もお樂になれます。私は何時でも覺悟してゐますのよ憶えてゐて下さい。』と彼女は續けた。

私は矢張り口を開かなかつたが、心の底では『死なねばならぬのはお前ではない。』と考へた。

彼女は再び優しく聲を顫はして續けた。『貴方をお慰め申すことは出來ませんわ！　貴方にも私にも慰めといふものがないので御座います——何時まで經つてもありません。私達二人の間に出來て來る者は、これから先どうなることかお考へになつて？　お母様のお祈禱をお聞きになつたら考へて下さい！　考へて下さい！』

だが私の魂は、ある憂鬱な考に鞭うたれて顫へてゐた。

『みんなが今から可愛がつてゐるよ。』と私は云つた。

私はおづ〳〵しながらジュリアナの顏をちらりと見た。そして再び眼を閉ぢて、頭垂れたまま、脣の處でもう消えてしまふかと思はれるやうな幽かな聲で、『お前は可愛がるかえ。』と訊ねた。

『まあ、どうしてそんなことをお聽きになるの？』

が、私は何處までも訊かずにはゐられなかつた。まるで傷口を開けてそれへ指を差込むやうな苦しさを感ずるには感じたが。

『お前は可愛がるかえ。』

『いゝえ、いゝえ。嫌ひます！』

私は、此の告白を聞いて、まるで自分の祕密の考を彼女が承諾して呉れて、共謀になつて呉れるやうに感じて、私は思はず喜び顫へた。だが彼女は本當のことを答へたのだらうか？それとも私を氣の毒に思つて嘘を吐いたのではあるまいか？

私にはもつと突込んで、強ひて眞底を告白させたいといふ殘酷な慾望が起つて來た。だが相手の顏を見ると、それは出來なかつた。それに、彼女のお蔭で心を落着けることが出來たやうに思はれて感謝しても宜いとまで考へた。彼女が身顫ひして告白したあの嫌惡の情は、彼女の胎内にゐる者から彼女を遠ざけて、一層私の方へ近寄らせて呉れたやうにも思はれた。そして私はかういふことをすつかり解つて貰ひたい、私達二人にとつては和解し難い敵に對するやうに、其の兒に對する彼女の憎惡の念を增させたいといふ心が起つて來た。

私は彼女の手を執つた。『それで幾分か私の心も安堵した。』と私は云つた。『有難い、あのことは――』と云ひかけて、私は基督教の希望と云ふ假面で自分の犯罪の意思を隱さうとした。『天の恩惠は廣大だ――あゝ。二人は未だ救はれるかも知れない。言ふことは解るね。もう何も云ふまい！　神樣にお祈りするだけだよ。』

それは小兒が死ねばいゝといふ祈禱であつた。呪ひも同じであつた。私は、ジュリアナにもすゝめて、それを叫んで呉れるように祈らせた。そして私は怖しい事件を彼女に承諾させ、そして彼女を精神上の共犯者ともいふべきものにして仕舞つた。私は次のやうなことを考へた。『かう言つて置けば、どうすればいゝかと云ふことが段々彼女の心の中へ強く入つて行つて、仕舞ひにはそれを實行するやうになるだらう。彼女は現在の恥辱と、恐怖から私を救ひたいといふ考へで胸一杯になつて、わけもなく其の怖しいことをどうしてもやりとげなければならぬといふことに直ぐ氣がつくだらう。そして烈しい力を出して極端な犧牲を敢爲するだらう。彼女は死なうと覺悟してゐると繰返し斷言したではないか？　彼女が死ねば勿論、其の子も死ぬ。だからそれを思ひ止まつたのは宗教上の偏見や、罪惡の恐怖に依つたのではない。いや自分の生存が此世に有用であり、自分を愛して呉れる人々又自分が愛してゐる人人にとつて無くてはならない者であるのを知つたからである。彼女は又自分の子でもない男の兒の生存は、二人の生活を堪へ難いものにするといふことを知つてゐる。彼女は二人の間

に闖入者が現れないですめば、お互に結び附くことも、寛恕と大赦との中に慰藉を得ることも、二人の創傷も時過ぎれば癒える、それを樂しみに俟つことも出來るといふことを知つてゐる。かういふ問題を彼女が深く考へて見れば、無用な誓も、驗無き祈禱も直ぐに決心と行爲とに變へることが出來る。』私はかうして考へ耽つた。彼女も默つて坐つたまゝ何か考へ込んでゐた、私の手を握つたまゝ、うなだれて。すると、大きな楡の樹影が二人の上へ落ちて來た。

彼女は何を考へてゐるんだらう？　夕暮の影とは違つた何かの影が彼女の上に落ちでもしたのかしら？

私の前にはライモンドの姿が現はれた。それは灰色の眼をした、意地惡い狡猾さうな小兒ではなかつた。いや一寸と抑へてもすぐに息の根が止まりさうな小つぽけな、ぶよ〳〵した赤ん坊であつた。

アンヂェラスの音が一つ靜寂な空氣を破つて響き亘つた。ジュリアナは私の手を放し、胸に十字を切つた。

（二十二）

四ケ月は過ぎた、それから五ケ月目も過ぎた、ジュリアナの樣子は急に變つて來た。私の前へ出ると、まるで不具者にでもなつたやうに辱かしさうな風をした。

私は精も魂もつき果てゝ、もうかういふ慘めな生活を續けて行くことも出來ないやうに感じた。毎朝、氣持の惡い睡眠から眼を覺ますと、誰かがゐて、深い盃を差出して、『飲まうと思ふならば、今日生きよう思ふならば、此の盃の中へお前の心臟の血を注ぎ込まなくつちやならない、最後の一滴までも。』と云つてゐるやうな氣がした。嫌惡の名狀し難い身顫ひが、目の覺める毎に、私の全身に傳はつた。それでも私は生きなければならなかつたのだ！

月日は情けないほど遲々と過ぎた。時はもう流れなくて、重々しく滴つてゐるやうにも思はれた。

私はまだ夏一杯を過さなければ、秋を少し過さなければ、いや永却の時を過さなければならなかつた。私は弟の堅い信仰の熱で、私の弱い信仰を燃やさうと思つて、彼と伴れ立つては大計畫の農業を手傳ふやうにした。毎日朝から晩まで私は手引か何かのやうに馬にのみ乘

つてゐた。私は手仕事や、容易い單調な仕事に從事して身體を疲らすやうにした。私は土の子である、單純な正直な人々と毎日接觸して、私の心の鋭い刄を鈍くしようとして見た。斯ういふ人々は代々親讓りの道義觀をまるで身體の機能と同じやうに自然に働かしてゐた。私はあの孤獨な聖者ジョバンニ・ディ・スコルデョの聲を聞いたり、彼の不幸な生活をいろ〳〵訊ねて見たり、今一度あの悲しげな眼や優しげな微笑を見たりしたかつたので、幾度か彼を訪れた。然し彼は無口で、私には稍々遠慮を見せて、一語か二語曖昧な返辭をするだけであつた。自分のことを話すのも厭なら、不平をこぼすのも好まないし、自分の仕掛かつてゐる仕事を途中でやめるのも面白くないと云つたやうな樣子であつた。痩せた骨ばつた、日に燒けた手は、決して仕事を罷めなかつた、まるで疲れを知らぬもののやうであつた。

或る日私は、『だがお前は其の手を少しも休めないのかえ。』と思はず叫んだ。

苦しい境を通つて來た彼は微笑みながら自分の手を見た、日のあたるやうにひつくり返しなから、初めは手の甲を、次には掌を見た。その物を考へてゐるやうな凝視、その微笑、その身振などは、あの働き疲れた手の上に王者のやうな威嚴をそへた。此の手は、田畑の勞働で鍛へられた手だ、自ら播いた善と、自ら携つた大事業で淨められた手だ、だから今となつては立派に棕櫚の葉で飾られる價値があるのだ。

老人は何時もの通り胸に十字を切つて答へた。

『旦那樣、神樣の思召しがあれば、直ぐで御座います。此の手が棺の中でこんな風になりませば、その時にはこれも休むことが出來るんでさ。』

（二十三）

だがどんな回復策を取つて見ても無効であつた。仕事は私の氣を引き立てゝもくれなければ、慰めてもくれなかつた。それも其の筈、その仕事は多過ぎることもあれば、むらであつたり、だらしがなかつたりした。妙に夢中になるかと思へば、時々はどうにも仕樣のないほど無精な時があつたり、氣がめいつたりして、まるで仕事に手を出さないこともあつた。

『だが、それぢや私の生活の法則は實行されてはゐませんね。』と弟は諭してくれた。『貴方は一週間で七ヶ月の精力をつぶしてお仕舞ひになる、次には全くの惰け者になる、それが何の爲めかと云へばたゞ又しても狂氣のやうに働き出すといふだけのこと、それは決して生きる道ぢやありません。私達の仕事は落着いて、むらのないやうに、調和的に遣らないと駄目です。でないと有効ではありません。お分りですか？　私達は順序立つた一定の規則を作る

必要があります。だが、物に熱中する、これは初心者には有り勝ちの缺點です。今に落着きも出來て來ませうよ。』

彼は何時かも私に云つた。『貴方のすることには未だむらがありますね。末だしつかり地に足がつかないのです。だが心配するには及びません。何日か、生活を支配する眞の法則がお解りになりますよ。其の時が來れば、貴方の眼はありありと開けて不意に思ひ懸けないやうにそれが分つて來ます。』

彼は又斯んなことも云つた。『今度は、嫂さんは屹度男の子を產みますよ。ライモンドをね。もう私は名附親のことを考へてゐるんですよ。ジョバンニ・ディ・スコルヂョさんから洗禮を受けるのが宜う御座います。あの老人が一番いゝ名附親です。ジョバンニ爺は善良といふこと意力といふことを懇々と敎へるでせう。ライモンドが物心つくやうになつたら、直ぐにあの立派な老人のことを言つて聞かせませう。さうすると其の兒を私達では出來なかつた者にして呉れます、まあと思ひがけない者にして呉れます。』

彼は何時でも此の問題に行かずにはゐられなかつた。ライモンドの名は絶えず彼の口に上つた。彼は、其兒が大きくなれば、長い間私が夢想してゐた理想的人物の典型、さうだ模範が出來るだらうとまで豫言した。さういふことを口にする一言一句は私の胸には劍を刺されるやうな苦しみを投げつけるのであつたが、そんなこととは知らないで、益々私の憎惡の念を強め、又私の絶望を益々烈しくした。

家內中の者は、何も知らないから、私に云はせれば、競つて私をいぢめることに力を合せた。私は誰かの側に近寄る度に、きまつて恐しい兇器を手にしてゐながら、其の恐しい力に氣づかない人も一緒にでもゐるやうな恐怖を覺えて、思はず身顫ひした。私はその兇器で衝かれはしないかと絶えず恐れた。從つて出來るだけ他の者と遠ざかつて、一人で少しでも安心がしたいと思つた。然し一人でゐる時でも、私は一番いけない敵、さうだ私自身といふものと顏を向け合はせてゐるのであつた。

私は密かに少し宛死に近づいて行くやうな氣がした。生命が身體中の毛孔から穩やかに蒸發して行くとでも云つたらよからうか、遠く過ぎ去つた一番暗黑だつた時代に嘗めたと同じやうな苦しみが時々還つて來た。時としては、自分が地獄の幻像の中に一人取り殘された、空な生存者に過ぎないことを意識した。

その後からはきまつて、自分に對する皮肉や嘲笑がついて出た。身邊にあるものを手當り次第破壞したい、引つくり返したいといふ烈しい慾望が湧いた、高きに在ます天帝を馬鹿にするやうな嘲笑も起つた、私の性質の中でも一番汚れてゐる渣滓のみが放縱に煮えくりかへ

つた。もう寛恕が何だか、憐憫が何だか愛情が何だか深切がどんなものなのかさつぱり分らないやうになつた。私の心の中に宿つてゐる善良を湛へてゐる泉は、みんな害悪の蠱惑に逢つて道を塞がれて、から〳〵になつて仕舞つた。ジュリアナと云へばあの獣的な事實、不貞の結果のみが目についた。私はと云へば單に瞞された一人の良人に過ぎなかつた。馬鹿げて感傷的な小説に現はれる物笑ひの主人公に過ぎなかつた。かうした私の毒々しい嘲笑は、私の行爲も、又ジュリアナの行爲をも決して容赦しなかつた。悲劇はやがて退屈な、平凡な喜劇になつた。もう私を引き留めるものは何も無かつた。鎖はすつかり解けた。そして私は心の中で考へた。『何故斯んな處に停まつてゐて、こんなに哀れつぽい役を演じてゐるのか？行かう――世の中へ歸つて行かう。元の自由な放恣な生活へ。俺は此の悲しみを歡樂の中に忘れることも出來る、勝手に惡魔に赴くことも出來る。さうしたからつて何が惡い？　俺は有るが儘の自分になるんだ。泥濘の中にのたくり廻る獣に。チュツ！』

（二十四）

こんな風にどうでもなれと考へてゐる時であつた。私は、氣晴しがしたいと思つて、ラ・ベ

ディオラを捨てて、ローマへ行くつもりにした。

口實は容易く見つかつた。といふのは、元々私達はさう長く留守にするつもりはなかつたから、屋敷の方は好い加減にして放つて置いたのである、だから何時までも滯在してゐようといふには、どうしても色々片附けて來る必要があつた。

其處で、私は出立を思ひ立つたことを知らせ、且つ其の必要を、私の母や、弟や、ジュリアナによく説明した。それから數日中に用事の片附次第歸つて來ることも約束した。

出發の前夜、夜遲く私が荷造りを終つて、丁度手提鞄の蓋をしようとしてゐると、計らずも扉を敲く音がした。

『お這入り！』斯う私は叫んだ。

ジュリアナが這入つて來た。『お前かえ。』と私は驚いて叫び、急いで彼女の方へ行つた。

私女は梯子段を上つて來たので少し息切れがした。私は彼女を坐らして、私の爲めに置いて貰つてある、レモンの薄い片の這入つてゐる冷いお茶、さう〳〵彼女の大好物である其の飲料を薦めた。彼女はそれを脣につけるかつけない位で、やがて私に返して寄越した。眼色で明かに神經の昂奮してゐることが分つた。

彼女は到頭こは〳〵云ひ出した。『いよ〳〵お出掛けなさるんですね。』

『あゝ。』と私は答へた。『明日の朝立つよ。』

長い沈默が續いた。心地よく爽やかな風が窓から這入つて來た。滿月の光は窓敷居を越して流れ込んだ。蟋蟀の合奏は、恰も酷く耳障りのする笛の音か何ぞのやうに遠くの方から聞えて來た。

『何時お歸りですか。本當のことを仰有つて下さいね。』と彼女は急に昂奮した聲で私に尋ねた。

『そりや分らないよ。』かう私は答へた。

又沈默が續いた。輕い微風は時折カアテンを搖つた。室へ這入つて來る風といふ風は、其の兩の翼に夏の夜の魔力を載せて來た。

『ぢやもう私を捨てるんでせう。』

さう云つた調子は如何にも沈んでゐた。一時は流石に硬ばつてゐた私の心も和いだ。たまらなく彼女が可哀さうで不憫でならなかつた。

『そんなことがあるものか。ジュリアナ。』と私は答へた。『心配しないがいゝ。だが僕も少しは休息しなくつちやならないからね。こんな風ではとても堪らない。僕はゆつたりと呼吸をしなくつちやならないんだよ。』

『それは御尤もですわ。』これが彼女の答へであつた。

『約束通り、直ぐに歸つて來るつもりだよ。手紙は寄越す。そしてお前もね――多分私の苦しんでゐるのを見ないだけでもお前はほつと一安心するだらう。』

『私に安心なんぞさせて呉れるものはついぞ何もありませんわ。』と彼女は涙聲で云つた。急に彼女は私の方へ振向いて、ひどく苦しさうな調子で、『ツルリオ、ツルリオ。』と叫び出した。『本當のことを云つて下さい、貴方は私が憎いんでせう。どうか本當のことを云つて下さいまし！』

彼女の眼は、言葉にも增して心配さうに私に問ふのであつた。暫くの間は彼女の魂までが私を嚙めてゐるやうに思はれた。そして、其の瞳いた眼や、蒼白い額や、顫へてゐる口や、痩せた苦々しい顏と見苦しい不具の姿との對照や、手、何かを願ひ求めるやうに私の方へ差出した、あの細い弱々しい手などは、前よりも烈しく私の心を動かした。私は優しい憐れみの心を抱かずにはゐられなかつた。

『信じておくれ、ジュリアナ。何時も信じてくれ。僕はお前に對して露程の憎みだつて持つてはゐない。これからだつて勿論持つやうなことはないよ。僕はお前に負債があるのを決して忘れはしない。何だつて憶えてゐる。僕は其の證據を見せなかつたがね。しつかりしなく

つちやいけないよ。今はただ〳〵どうしたら一番巧くお前自身を解放することが出來るかといふことを考へさへすればいゝんだよ。其の後のことは――誰にだつて分りやしない！　だがどんなことがあらうとも、僕は決してお前を捨てはしない。ジュリアナ。今度は僕を行かしてお呉れ。二三日出てゐれば吃度具合はよくなるんだ。ずつとせい〳〵した氣持で歸れるよ、吃度。是れから先、私達は勇氣のありつたけを絞り出さなきやならない場合が來る、つまりね、お前は僕から出來るだけの助けを借りなけりやならないやうな場合が吃度來るんだよ。』

『有難う。』と彼女は云つた。『どうにでもお好きなやうに取計つて下さいまし。』

人の歌聲が田舍笛の荒い音を搔消すやうにして、夜を破つて聞えて來た。大方月光に照された遠い小屋の中で麥打の者でも吹いてゐるのであらう。

『お聽き！』と私は云つた。

二人は耳を傾けた。微風はそよ〳〵と私達の圍りを吹いてゐた。夏の夜のありとあらゆる魔力が流れ込んで來て、私達の胸を搔き亂さずにはゐなかつた。

『露臺へ出て腰を卸して見ようぢやないかね。』と私は優しく彼女に尋ねた。

彼女は同意して立上つた。其處で私達は次の室へ這入つた。其處には滿月の光は一杯に射

込んでゐた。白銀をのべたやうに光の洪水は床の上に流れてゐた。此の光の中を通つて、彼女は露臺へ行く爲め、私の前になつて歩いた。私は明るい床上に描き出された不恰好な彼女の影法師を見た。

あゝ、私が好んで幾度か抱いたあの纖細い美しい姿は何處へ行つたんだらう。四月の朝、ライラックの花の中で再び出會つたあの愛しい女は今は何處へ行つたらう。一時に、いろ〳〵の悔恨や、慾望や、絶望が私の胸に迫つて來た。

ジュリアナは腰を卸して、鐵の欄干に頭を凭せた。月の光にはつきり照らし出された彼女の顏は、私達の周圍にある何物よりも白かつた。いや白い壁よりも白かつた。彼女は半ば眼を閉ぢてゐた。そして長い睫毛はほんのり薄い頰に影を染めてゐた。これがひどく氣になつて私は幾度か眼を見張つた。

私は何も云ふことがなかつた。

私は欄干に凭れながら、谷の方へ向いた。下の方には、廣い陰影の塊が見えるだけで、アッロ河の光だけがそれと氣づくだけであつた。暫く經つと、又蟋蟀の鋭い荒い合奏が聞えて來た。今までに是れほど樂しい又恐しい夜は決してなかつたやうに思はれた。そして私の魂のどん底からは、突きさすやうな、けれども聞き取りかねるやうな叫び聲が、過去になつた幸

福を慕ひ叫ぶ聲が起つて來た。

（二十五）

ローマへ來たかと思ふ間もなく、私はもうやつて來たことを後悔した。市中は息苦しいほど暑くつて、乾燥しきつてゐた。私は其の爲めに恐怖を感じ、とまどひした。私の家は墓場のやうに靜かであつた。其の中にあるものは見馴れてよく知つてゐるのに、どうしたのか不思議な全く別のもののやうに思はれた。私は恐しい孤獨の中にゐて全くの一人ぼつちのやうな氣がした。それでも友達を求めようとはしなかつた。誰を思ひ出さうともしなければ、又誰に思ひ出して貰はうともしなかつた。私は執念深い憎惡に驅られて、ただ〳〵一人の人だけを追ふことに心を碎いてゐた。それはフィリッポ・アルボリオであつた。

私は何處か公開の場所で出會ひたいと思つてゐた。そして彼が折々出掛けると聞いてゐる料理屋へ行つた。私はどんな風にして侮辱してやらうかなどと思ひながら、其處に腰を据ゑて一晩中彼の來るのを待つてゐた。新顏の客が這入つて來る度に、私は胸騷ぎを覺えたが、待つ人は現はれなかつた。私は給仕に尋ねて見た。何でも長い間見えないと云ふことだつ

た。

今度は擊劍の道場を訪問した。道場は空虛として、鎧戸が締めてあるので、薄綠の影に包まれてゐた。四邊には何だか木の床に撒いた水の變な臭氣が漂つてゐた。誰一人相手の無い道場の師範は何や彼やと云つて私を歡迎した。私は最近の勝負で弟子達が勝利を得たといふ精しい話を注意して聞いた。それから私は道場へ出入りしたいろ〳〵な友達の近情なども尋ねて見た。一番後になつて、フィリッポ・アルボリオのことを云ひ出した。

『もう四五ケ月ローマを空けてゐますよ。』これが答であつた。『何でもひどい神經病にかゝつてゐるといふ話です。で恐らく恢復の見込みはあるまいつて云ひます。これはガリッファ伯の話ですが、其の他のことは何も存じません。』

『元々どちらかと云ふと餘り丈夫な方ぢやありませんでしたな。』と師範は續けた。『此處へもほんの少し稽古に來ただけでした——劍刀を恐がりましてな、其の先を見るにさへ恐しいでんですからな。』

『ガリッファはまだローマにゐますか。』と私は尋ねた。

『いゝや、リミニです。』

それから二三分過ぎて私は彼の許を辭した。

此の全く思ひ掛けない知らせは私を驚かした。『若しそれが本當だつたら！』と私は心の中で考へた。そしてどうかして其の病氣が、人を此の上なく不幸にし、白痴にし、同じ狂氣といふ中でも一番慘めな發狂者にし、どどのつまりは死に連れて行くやうな、あの恐しい脊髓病か腦病かの一つであつてくれゝばよいと思ふことを禁じ得なかつた。色々な科學者から蒐めた思想や、嘗つて狂人を訪ねた時の思出や、わけてもあの可憐さうなスピネリといふ狂人を尋ねた、あの特別な場合から受けた印象が、私の胸でぐる〳〵と廻轉した。私は憐れな友のスピネリが赤い鞣皮の大きな安樂椅子に坐つてゐる所をまざ〳〵と眼に浮べた。顏は土色を帶び、筋といふ筋は悉く弛み、口はあんぐり開き、涎を垂らしながら何だか譯の分らないことをもご〳〵云つてゐた。私は又始終口の隅から流れ出る水を拭き取つてゐた看護婦の身振りや、頸の周圍に手拭を卷いてやつたり、子供使ひにして物を食べさせてやつたりした看護婦の痩せた辛抱强い顏を見た。

『さうなれば俺にとつては全く都合が好くなるだらう。』斯う私は考へを續けて行つた。『若し俺があんな有名な相手と決鬪でもするとすれば、そして彼に手酷い傷を負はせるか、又は彼を殺しでもするとすれば、其の事實は必ず祕密の裡にはすまされまい。あらゆる人々の口にのぼり、あらゆる新聞はいろ〳〵の說明を加へるだらう。從つて決鬪の本當の原因が或は漏れるかも知れない。天が降したと云つてもいゝやうなあの男の病氣は、あらゆる面倒や世間の取沙汰から私を救つて呉れる。俺の敵が天の配劑で痲痺して、無能力になつてゐることを知れば、其の時には、俺は自分の殘忍な計畫や自ら手を下す處罰（さういふ結果がどうなるかは私にも分らない。）やを延ばしても決して心苦しくない。だかそれは本當なのかしら——若しかしたら一時的の病氣に過ぎないのぢやないかしら。』私は好いことを思ひついた。私は馬車に跳び乘つて、あの男のものを出版してゐる書肆へ行つた。

最初這入つて行つた時には、何も見分けることが出來なかつた。私の眼は外の光に眩惑を感じてゐたのであつた。でも誰かが聞きなれない調子の鼻聲で話しかけた。

『旦那樣何を差上げませうか——』

帳場臺の後には、幾歲だかはつきり分らない、白粉のやうな顏をした、痩せた、汚ない、白子とでも云つたやうな男が立つてゐた。私は或る書物の名前を擧げて、其の中から一二冊買取つた。それからアルボリオの最近の小說は何か尋ねて見た。例の白子は私に『祕密』といふのを渡して呉れた。彼は其の時如何にも其の小說家の熱心な崇拜者である振を見せた。

『これが最近のかへ。』

『さやうです。尙ほ數ケ月前に新作の廣告をしました——「象牙の塔」といふので。』

『何、「象牙の塔」だ。』私の胸は動悸が高まつて來た。
『ですがどうも出來兼ねやしないかと思つてゐるんですよ。』
『どうしてだえ。』
『作者は酷い病氣なんですからね。』
『成るほどね。何處だえ。』
『漫性の脊髄痲痺ですよ。』と白子は科學的知識でも誇るつもりなのか、斯う云ふ恐しい言葉に一つ〳〵句切りをつけて答へた。
『へえ、それぢやヂュリヨ・スピネリの病氣と同じだ。で酷く惡いのかえ。』
『大變惡いんですよ。』と白子は宣言でもするやうに云つた。『云ふまでもなく、御承知のことでせうが、あゝいふ種類の痲痺症は病勢を止めることが出來ないんですからね。』
『だがそりやほんの近頃のことだらう。ね、さうだらう。』
『さうに違ひありませんがね、もう病氣の質に就いては何等疑ふ餘地がありません。最後に店へお見えになつた時、私は話をするのをきいてゐましたが、もう其の時でさへ、言葉を確かに發音するに大變骨が折れるやうでしたよ。』
『さう、君は聞いたんだね。』

『えゝ、聞きましたよ。あの方の話は其の時から不確かでした。或る言葉なんかは顫へてゐました！』
私が極端な、驚異に近い注意を彼の云ふ言葉に拂つたので、白子は大變上氣嫌になつた。彼はこの有名な小說家の舌がもれつて、はつきり言へなかつた音などを擧げようとさへした。
『で今は何處にゐますか。』
『ナポリにゐますよ。醫者は電氣療法をやらしてゐます。』
『へえ、なるほどね——電氣療法！』私は白子の虛榮心に媚びて、彼からもつと精しいことをきゝたがつて、巧みに無智と驚異とを裝ひながら答へた。
爽やかな風が一吹、長い、狹い、廊下造りのやうな店へ吹いて來た。光線も柔らいで來た。一人の店員が地球儀の影に隱れて、椅子に凭れたまゝ、頤を胸に埋めながら、靜かに眠つてゐた。誰一人店へ來るものはなかつた。斯うした靜けさの行き亘つてゐる中にゐて、私の憎み嫌つてゐる人が不治の病に苦しんでゐるといふことを露ほども疑はずに聞くことが出來るといふのは何たる愉快であるか知れなかつた。
『すると醫者の方にはまだ助かる見込でもあるんですか。』私は白子から話を引出さうとし

て續けた。
『駄目ですよ。』
『文壇の光榮の爲めにもさうあらしたいもんですね――』
『駄目ですよ。』
『だが、漫性の痲痺症で癒つた例はあるやうに思ふね。』
『いや、旦那、そんな例はありませんよ。二年、三年、四年は生きませうが、とても全快しません。』
『だが、私にはどうしてもさうは思へないね――』
私はどうして此の男を相手にお喋りをするほど輕い氣持になれたのか、自分ながら想像することが出來ない。どうして自分の殘忍な感情を味つて斯くも不思議な快感を得ることが出來たのか分らない。私は自己享樂に耽つてゐたのだ――それだけは否定する事が出來ない。白子は私があべこべのことばかり云ふので、心を苛々させて何も云はなかつた。そして其の場を外して高い本棚に立て掛けてある梯子へ上つた。身輕く敏捷に攀ぢ上つて行くのを見ながら、私は不圖夜になると、庇のあたりをこそ〳〵歩いてゐる疥癬かきの牡猫を思ひ出した。上つて行く途中で彼は蠅を止まらせるつもりで店の隅から引張つてある糸に頭を打つ突

けた。直ぐに一群の蠅がヴーンと唸り聲を立てゝ彼を取卷いた。彼は一冊の書物を手にして降りて來た。それは實に彼の確かに判斷を證據立てる爲めに引用される典據であつた。
彼は私に其の表題を見せた。それは或る特殊病理學に關する論文だつた。
『まあこれをお聽きなさい。』
彼は頁を繰つて行つた。まだこの本は折が切れてゐなかつたので、頁と頁との間へ指を入れた。そして鈍い眼で其の中を覗きながら、冒頭を通讀した。『漫性痲痺は不幸にして恢復の見込なし。』『これで納得が行きませうね。』と附け加へた。
『えゝ分りました。だが氣の毒だね！　あゝいふ稀有の天才が！』
蠅は再び元の處へ落着かうとはしないで、絶えずブン〳〵騷々しい聲を立てゝ、私や白子や眠つてゐる店員を襲ふのであつた。
『一體幾歳だつたね。』私はわざつと死んだ人の噂でもするやうに、過去形を使つて尋ねた。
『どなたがですか。』
『フィリッポ・アルボリオさ。』
『確か三十五だと思ひますよ。』
『まだそれ位かね。』

私は不思議にも笑ひたいやうな氣持、白子の前で笑ひ崩れて、此の男をあきれ返らせてやりたいやうな子供らしい衝動を感ぜずにはゐられなかつた。それは不思議な昂奮であつた。稍々ヒステリカルなものであつた。それは、嘗て今迄に一度も經驗したことのないものであつた。無論はつきり說明することは出來ない——無理に云つて見れば、つながりのない荒唐無稽な夢の場面と場面との間に、時々襲つて來るどうすることも出來ない喜びにでも譬へようか。例の本は帳場臺の上に開いたまま載つてゐた。私は其上へこゞんで、或る頁の挿繪を見た。それは奇妙な見るも恐しい蹙面になつた人の顏であつた。それには『左顏不隨』といふ說明がついてゐた。しつつこい蠅は小歇みなくブン〳〵唸つてゐた。

私の胸には別の考へが湧いて來た。『「象牙の塔」の原稿はもう出版者の方で受取つたのかね。』と私は尋ねた。

『いゝえ、まだですよ。廣告はしましたがね、まだ表題の外は何も出來てゐないんです。』

『表題だけ。』

『えゝ、實の所、廣告も引込ませたやうな譯です。』

『有難う。此の本は今日中に屆けて呉れ給へね。』

私は宛名を置いて、其處を立去つた。

外へ出ると、不思議に胸がわく〳〵した。私は後へ何だか技巧的で、假空的で、虛僞である生活の斷片を殘して來たやうな氣がした。私の云つたこと、やつたこと、感じたことは、あの白子の姿といひ、聲といひ、身振りといひ、總ては、夢で、本當でない、實質のないもののやうに思はれた。又最近自分が書物の中で讀んだ事のやうにも思はれた。

私は家へ歸つた。其の時にはもうぼんやりした感覺は跡方もなく消えてゐた。私は腰を卸して考を纏めようとした。先刻のことは何も彼も本當で、疑ふことの出來ないものであることを確めようとした。私はスピネリの思出を辿つて、容易く現在病んでゐる人のことを胸に思ひ浮べることが出來た。私は新たに或る好奇心に襲はれた——若しナポリに行つて遇つたらどうだらう？　そして私はさういふ英才が病氣の爲めにすつかり氣が狂つて、まるで白痴のやうにぶつ〳〵何か言つてゐるのを想像した。けれどもそれは少しも私に滿足を與へなかつた。憎惡の焰は盡きて仕舞つた。私は悲しみに重く押しつぶされた。さうだ、此の人の破滅は私の狀態をどうする譯でもない、又私の破滅がそれで償つて貰へるといふ譯のものでもない。それは私の現在の生活を少しも變へもしなければ、又未來の豫想を一つでも變へはしなかつた。

私はフィリッポ・アルボリオの新作の表題——『象牙の塔』——のことを考へた。すると色々

の古い疑惑が戻つて來て私の氣を狂はせんばかりにした。それは『祕密』といふ書物の獻本の辭と一致してゐるが、これがどうして偶然の符合であるなどと云へようか。それとも又著者は作中の人物を描くのに、ジュリアナ・エルミルに似せようとしたのではなかつたか。そして小說に事寄せて彼女と彼との最近の交涉を物語らうとしたのではなかつたか。こゝまで考へて來ると、又しても煩はしい問題――つまりさういふ交涉は始めから終りまでどんな道程を取つて發展したのかといふ問題が新たに起つて來た。

私は又もあの忘れることの出來ない夜、ジュリアナに迫つて云はせた言葉を耳にした。『貴方を愛します。これまでも常に愛してゐました。私は何時でも貴方のものでした。貴方一人のものでした。あの厭な過失の瞬間を除けば何時だつて――さうです――たゞ一瞬間の過失なのです。これだけは本當です。私本當の事を云つてゐるのだとは思へませんかしら。』

だがまあ、私達は嘘を云つてゐる聲から、本當のことを聞かうと幾度考へるか知れない。私達はどうしたつて欺かれることを免れない。けれども若しジュリアナの聲から聞き取つたことが本當に眞實であるとすれば、けだるい氣分でゐる時に、男から不意打を喰つて吃驚し、無意識でゐる間に暴行を働かれ、眼が醒めて意識がはつきりすると、取返しのつかない行爲に氣がついて驚き且つ嫌忌を感じ、男をすぐさま追ひやつて、二度と再び會はなかつたといふことには少しの疑ひもない。

表面上の出來事は悉く斯ういふ假定を本當らしくするやうに出來てゐた。そしてジュリアナとあの男との關係は、もう長い前から斷れてゐるのだといふことを推測させずには置かなかつた。

『私の家で――』と私は心の中で考へた。そして墓場のやうなその家の中で、人氣のない、風通しの惡い室の中で、私は自分の想像から湧く避け難い苛責に追はれてゐた。

（二十六）

私はどうすればよかつたのか。この乾いた熱帶の空の下に、暑さに包まれて氣を狂はせるやうな危險を冒してまでローマに留まつてゐなければならないのかしら。海か山へ行つて、何處か好ましい避暑地の美しい旅客の間に交つて氣晴しでもしようか。私の中に潜んでゐる古い遊蕩兒に眼を覺まして、又も新しいテレザ・ラフオか、あれに似寄つた戀を求めにでも行かうか。

私は一二度あの金髮の戀人の思出にも耽つて見た。尤も其の女はすつかり私の心を去つて

ゐて、長い間記憶にさへのぼらなかつた。今は何處にゐるだらうか。まだエガノーを戀人にしてゐるだらうか。若し再び彼女に會ふやうなことがあつたら、私はどんな感じを抱くだらうか。さういふ私の好奇心も極めて弱かつた。私にはたゞ其處へ――悲しみのあるあの家へ、私の苦悶へ戻りたいといふたつた一つの深い、一途の慾望があるだけだといふことを自分でよく承知してゐた。

私は整理すべきことは悉皆整理して、ヴェベスチ博士を訪問したり、ラ・バディオラに電報を打つて、すぐ樣歸途についた。

私は待遠しくていろ〳〵に心を苦しめた。たとひ何か新しい吃驚するやうなことへ向つて行くにしても、恐らく私は是れほど烈しい神經の昂奮を感ずるやうなことはあるまい。今度の旅は際限のないもののやうに思はれた。私は、息苦しい車内でクッションの上に長々と身體を伸ばして、熱に苦しめられたり、隙間から這入つて來た砂塵にむせんだり、蟋蟀の單調な聲を交へた列車の單調な音に惱まされたりしながら、近づいて來る出來事を思ひめぐらした、未來がどうなるかと考へた。まだ分らない世界の大きな影を透視しようとした。

父は死ぬほどの苦しみを嘗めてゐた。子供にはどんな運命が待つてゐることか。

（二十七）

僅かな留守の間には、ラ・バディオラには何も變つたことも起らなかつた。私の歸宅はまるで大きなお祭か何かのやうな取扱ひを受けた。ジュリアナが始めて此方をちらッと見た其の眼には盡きない感謝の意が現はれてゐた。

『よくこんなに早く歸つて來ておくれだつたね。』と私の母は微笑みながら云つた。『ジュリアナは一寸だつて落着いてゐなかつたんだよ。もう二度と他處へなど行つてお呉れでないよ。お願ひだから。それはさうとレースを憶えてゐたかえ。いえだつて、まあ何て憶えが悪いんだらうね。』

こんな風で、もうまた始めつから、苦痛は現はれて來た。

ジュリアナと二人つきりになつたかと思ふ間もなく、直ぐに彼女は私に云ひ出した。『こんなに早く歸つて來て下さるとは夢にも思つてゐませんでした。本當に何と云つてお禮を述べていゝか分りませんわ。』

彼女は態度も聲も、臆病で、謙遜で、慘めであつた。私には、彼女の顏に、自分の醜さを

何時も厭がつてゐることを示すやうな、妙に苦しさうな表情の現はれるのが絶えず見えた。かうした表情は決して彼女から無くならなかつた。彼女の顔には色々な變つた表情が現はれたが、例の表情を打消すだけの力のあるものはなかつたので、其の表情だけは絶えず見えてゐた。それは、へばりついてはなれることがなかつた。私は憐れみを催しない譯には行かなかつた。怨恨といふ怨恨を拭ひ去らずにはゐられなかつた。何もかもがはつきり分つてゐる時に口から出る露骨な皮肉をも和らげずにはゐられなかつた。

『留守の間お前は何をしてゐたえ。』と私は彼女に尋ねて見た。

『貴方を待つてゐましたわ。で貴方は。』

『何もしなかつたよ。たゞ家へ歸りたい一心だつたよ。』

『私の處へ？』と彼女は臆病さうに、如何にも謙遜して尋ねた。

『お前の處へさ。』

彼女は眼を閉ぢた。すると妙な薄笑ひが彼女の顔に現れた。私は其の時ほど深く愛されたと感じたことはなかつた。

暫く經つと、彼女は涙に濡れた眼で私を瞶めながら、『有難う、ツルリオ。』と云つた。

其の時現はした調子と感情とは、もう一つの別の『有難う。』を私に想ひ起させた。それはずつと前に病氣の恢復した朝、つまり私が始めて罪を許した朝彼女が發した言葉であつた。

（二十八）

かうして私は又もラ・バディオラに於ける退屈な生活に返つた。それは別に取り立てて云ふほどのエピソードもなく續いた。時は日時計の上を匍ふやうにして過ぎた。蟋蟀は楡の木の下で單調に鳴き立てた。時は恩惠深いものだ！

私の心は絶えず動搖してゐた。そして何時も無氣力な時期や、無駄な抱負や、過剰と不足と云つたやうな矛盾した境やの爲めに苦しんでゐた。そして時々は、所謂生活といふ、灰色の、中性の、凡庸な、それでゐて無限の力を持つてゐるものに思ひを廻らしては、獨りで次のやうな考へに耽つて見た——『人は、結局、順應的動物である。如何なる苦痛にも、如何なる汚穢にも人は順應することが出來る。私は或は境遇に自分を順應させて終るのかも知れない。分らないことだ！』

或る事柄を無闇に冷評して見たくなつた。

『フィリッポ・アルボリオの子供が、俺に、世間の言草ではないが生寫しでないとはどうして

云へようか。して見ると自分を順應させて行く道は一層容易いものぢやないか。』それから又私は、ある子供のことを(其の子供が實際は私生兒であつたのを私は知つてゐた。)法律上の兩親がゐる前で『お母さんに瓜二つだね。』と云つてるのを聞いた時に、忽ち私を襲つて來た笑ひたいといふ妙な慾望を思ひ出した。實際又其の子供は人相學者の所謂遺傳的影響といふ不思議な法則に依つたものが其の父親によく似てゐたのである。

だから、ライモンドが私に似てゐて、正統なエルミル家の一人と見えるのは何でもないことか知れない。私は又嗣子(ちよとり)の上にかうまではつきりと此の一家の封印を押しつけたといふので特別に祝つて貰ふといふやうなことがあるかも知れない。

そして若しも私の母や弟の期待が空しくなつたとしたら、どうだらう。ジュリアナが若し第三番目の女の子を生んだらどうだらう。若しやといふこの考が私の心を大變輕くしてくれた。女の子に對してはさう敵意は持たないだらうと思つた。又女の子なら我慢が出來るかも知れないとも思つた。女の子なら、やがて時が來ると、私の家を去つて、別の名を襲ひ、別の家庭に這入つて暮すであらう。

所でいよ〳〵といふ時が近づくに從つて、私の懸念や性急(せつかち)やは段々烈しくなつた。私は何の効果もない一人問答や、何時も同じ處を行つたり來たりしてゐる、つまり同じ恐怖、同じ當惑を經驗してゐることは倦きて來た。私はどうかして事件を早めたかつた。かうときまつたことが、假令大破綻でも構はないから直ぐに起つて來てくれゝばいゝと思つた。どんなことだつて此の長い〳〵苦痛に比べれば何程ましだか知れなかつた。

もう九月であつた。夏も去らうとして、秋の彼岸もそろ〳〵間のない時であつた。一年のうちでも一番氣持のいゝ季節で、熟した葡萄からは空中に擴がつてたまらなく人を醉はすやうな香氣が香つて來る。この季節の魅力が少し宛私の魂の中に這入つて來るので、私は落着くことが出來た。それは又時には愛情に對する烈しい慾望を湧き立たせても呉れた。マリヤやナタリヤは私と一緒に、時には私の室で、時には廣々とした戸外で、長い時を過した。私は未だ嘗つてこれほど深く彼等を愛したことはなかつたし、又彼等がそんなに愛嬌深く振舞ふのを見たことがなかつた。まだ思想といふものの眼醒めないあの眼からは、如何にも平和な光が、暴風雨のやうにあれてゐる私の魂に射して來た。

(二十九)

或る日、正午(ひる)過ぎに、私はジュリアナを探しに行つた。彼女の部屋にはゐなかつたので、

私は母の部屋へ行つて見た。扉は開けてあつた。人聲も聞えなければ、其の他の音も聞えなかつた。窓の輕いカアテンは靜かに微風を受けて搖れてゐた。窓越しには綠の深い並木が見えた。其の並木の間には心地よい冷氣と安靜とがたゆたつてゐた。

若しや母は眠つてゐるのぢやないかと思つて、母一人の居間へそろと這入つて行つた。そして眼を覺ましてはいけないと思つて靜かに歩いた。私は入口の幕を開けたまゝ、暫く闕の上にたぢろいでゐた。誰かが眠つてでもゐるやうな穩かな呼吸が聞えて來た。私の母は窓の側の安樂椅子に眠つてゐた。そして其の向う側にはジュリアナが今一つの安樂椅子に席を占めてゐた。私は室の中へ這入つて行つた。

二人の間には低いテーブルが置いてあつて、其の上には小さい帽子の一杯這入つてゐる籠があつた。私の母は、まだ針のさゝつたまゝの帽子を一つ手に持つてゐた。彼女は仕事半ばにして睡眠に襲はれたものらしい。頤を胸に埋めて、穩かに眠つてゐた——多分夢でも見てゐるのであらう。白い糸が半ば通しかけてあつたが、屹度今は夢の中でもつと美しい糸を紡いでゐるのであらう。

ジュリアナも同じやうに眠つてゐた。頭を椅子の背に凭せ、手を腕木にのせてゐた。彼女の容貌は睡魔の手で撫でられてゐるやうで、ゆるんでゐた。たゞ口許だけに慘ましい皺、あの苦惱の影が殘つてゐた。眉と眉との間には、大きな悲しみで深く刻まれた小さな溝があつた。額には汗がうつすり滲んでゐた。汗の玉は靜かに一方の頬顎を流れ落ちた。そして手は纏つてゐるモスリンよりも白くて、其の恰好を一寸見ただけでも、もう彼女の苦しんでゐる盡きない疲憊を物語つてゐるやうに見えた。

私は四邊を見廻した——私の母の手にある小さな帽子を見た、薄いレースの盛つてある籠を見た、靜かな風に搖れてゐる紅や青のリボンを見た。私の心臟は何だかきゆつと引きしめられて、悶絶しさうな氣がした。あゝ、この美しい白い布片、私の子供でもない子供の頭に被せるものと決めてあるこの布片の上に夢を結んでゐる母の、愛らしい手に現はれてゐる優しさ！

私は一二分間同じ處に立つてゐた。實際これが家の聖殿であつた、聖の聖なるものであつたのだ。一方の壁には父の肖像が掛つてゐた。それはフェデリコに大變よく似てゐるのであつた。今一方にはコスタンザの肖像が掛けてあつた。これは稍マリヤに似てゐた。絶えない記憶がある爲めに此の世を去つた親しい人に對しても何時も超然的活氣が湧くが、丁度その活氣で生々としてゐる此の二人の姿は、何時も力强い、何も彼も見極めるやうな眼附で私を見下してゐた。其の他の死者の遺品もあつて此の室はいかにも神聖であつた。隅の臺の上に

は、硝子の蓋に蔽はれて、黑いヴェールをつけた死面が、死よりも强い愛で母が愛してゐた夫の死面があつた。それでもこの部屋には陰氣らしい所は少しもなかつた。こゝには王者のやうな平和が君臨して、その平和が、丁度心臟が調和よく生命を傳播するやうに、一家の中に自然と傳播するのであつた。

（三十）

私は或る霞の深い秋の朝、マリヤとナタリヤとそれからエディス孃と三人でヴィルラリルラへ散歩に出掛けたことを思ひ出した。其の思出は丁度夢のやうにぼんやりして、不明瞭で、ぢた〳〵してゐて、妙に胸に痛みを與へるやうな、それでも氣持のよいものであつた。

庭園にはもう紫や白の花を取交ぜた枝は少しも見えなかつた。それから又丁度樂の音のやうに三拍子揃つた香氣を持つてゐる美しい花もなかつた。樂しさうな春の笑聲も沈默し、燕の絶えない鳴聲も靜まつてゐた。中で聞える陽氣な聲と云つては、今ではたゞ二人の無邪氣な子供達の快活な聲と、飛ぶやうなばた〳〵といふ足音ばかりであつた。燕ももう大抵は他處へ行つて仕舞つて、殘つてゐるのも今にも旅立たうとする所であつた。私達は丁度そのお仕舞ひの一群に別れの挨拶をかはしにやつて來たやうなものであつた。

どの巢も皆んなひつそりしてゐて、空虛で、死物のやうであつた。其の中の幾つかはもう壞れて、其處此處のぼろ〳〵になつた土塊からは美しい羽毛が垂れ下つてひら〳〵と搖れてゐた。お名殘りの一群は、缺ける者があつてはいけないと云つたやうに、幾羽かのぐづ〳〵してゐる仲間を待合はせながら、簷に沿つて屋根の上に集つてゐた。彼等は長い列を作つて或るものは背中を前にし或る者は嘴を前にして休んでゐた。だから二侯の尻尾も見えれば、白い胸も見えた。彼等は斯うして待合はせながら、鋭い鳴聲を立てゝ靜かな空氣を搖がした。二三羽づつ遲れた者が仲間へ加はつて來た。出發の時が近づいた。疲れたやうな日光が、戸の締つてゐる家や、淋しい巢を照してゐた。ぼろ〳〵な土塊の處々にくつついて、微かに搖れてゐる小さな脆い萎れた羽毛位淋しい感じのするものはなかつた。

急に一陣の風が吹いて來た。すると燕の一群は、大きな羽搏きをしながら、空中に舞上つた。そしてしばし家の上に浮上つてゐたが、やがて少しもたぢろがずに、まるで前の方に道でも開けて來たやうに、愈々旅路に上つた。そして次第に小さくなつて遠くの方へ進んで行つた——到頭見えなくなつた。

マリヤとナタリヤの二人は、飛行者の飛ぶのをよく見たいと云つて、腰掛に上つてゐたが、

腕を擡げながら、

『さよなら、さよなら、燕さん。』と叫んだ。

其の他のことはまるで夢のやうで、はつきりした思出はない。

マリヤは家へ這入りたがつた。私は自分で戸を開けた。三つの階段の此處だつた、ジュリアナがまるで影法師のやうにこつそりついて來て、私に腕を卷きつけながら、『お這入りなさい、なお這入りなさい。』と囁いたのは。巣はまだ廣間の天井の隅から垂れ下つてゐた。此處で彼女は『私貴方のものよ、貴方の、貴方のものよ。』と囁いたつけ。そして彼女は私の頸にまきつけた腕をゆるめようとはしないで、脣と脣とを合はせる爲めに、くるりと私の胸の方へ廻つたつけ。其の廣間も今は靜かだ、梯子段も靜かだ。沈默、墓のやうな沈默が家中に行亘つてゐる。

二人の娘達はひつきりなしに喋りつゞけた、私にそれからそれと色々なことを尋ねた。それから戸棚をあけるやら、抽斗をあけるやら、實に賑かだつた。エディス嬢は一生懸命になつて、彼等を制してゐた。

『こら、こら、私こんなものを見附けてよ。』とマリヤは私の方へ駈けて來ながら叫んだ。抽斗の底の拉芬花の重ねてある中から、彼女は手袋を一つ見つけて來たのであつた。それはジュリアナのであつた。指先は汚れて黑くなつてゐた。そして掌の口の近くには何か書いてあるのが未だ見えてゐた。『桑の實。一八八一年、八月二十七日、記念！』桑の實に關するエピソードが急にはつきりと頭に浮んで來た。それは私達の初めの頃の幸福に滿ちた一番樂しいエピソードであつた、田園詩の一篇でもあつた。

『お母さんの手袋ぢやなくつて。』と小娘が尋ねた。『私に返して頂戴、返して頂戴よ。私お母さんにやりたいわ——』

カリストは私にいろんなことを話した。けれども一言も私の耳には這入らなかつた。彼は幾度も幸福な豫言めいたことを繰返した——

『男の子ですよ、それは綺麗な男の子ですよ——神樣其の兒に祝福を垂れて下さい！　本當に綺麗な男の子ですよ。』

もう歸らうと思つた。カリストは再び家に鍵をかけ終ると、美しい白髮頭を振り立てゝ尋ねた——『この巣はどうしませうかな。』

『其の儘にして置くがいゝ、カリスト。』

其の巣は住むものがなく、空虛で、死物のやうであつた。一番後まで殘つてゐた居住者も飛び去つて仕舞つた。疲れたやうな太陽の光は相變らず寂然した家と、ぼろ〳〵になつた土

塊についてゐる小さな萎れた羽毛の處々にある淋しい巣の上を照らしてゐた。

（三十一）

十月ももう半ばを過ぎて、いよ〳〵といふ時期が近づいて來た。ヴェベスチ博士へも知らせが行つた。もう何時、ジュリアナの苦しみが始まるか知れなかつた。

私の心配は刻一刻と増して行つて、殆ど堪へ難いやうになつて來た。私は何時かあの河岸で襲はれたやうな狂氣的な衝動に時々驅られた。私は又ラ・バディオラから遠く離れて遊んだこともあつた。長い間オルランドの背中に跨つて、生垣も溝も跳越えたり、亂暴にも危險な道を走つたりした。かうして私達、私と憐れな獸とは、何時も家へ歸つた。汗にびつしより濡れて、へト〳〵になつて、でもけがなどは少しもしないで歸るのであつた。

醫者が着いた。ラ・バディオラの家では誰も彼も救はれたやうな氣になつて、再び元氣づき、且つ好い結果の來るのを待ち受けた。ただ一人ジュアリアナだけは晴々しなかつた。一度ならず私は彼女の眼に妙な考への通るのを見て驚いた。暗い豫感の恐怖に打たれないではゐなかつた。

もう夕暮であつた。私の母と、エディス嬢と醫者の三人は食堂へ降りて行つた。後にはジュリアナと私とだけが殘つた。燈明はまだ運ばれてゐなかつた。十月らしい紫色の夕影が靜かに室の中へ這入つて來た。風は絶えず窓硝子を搖がしてゐた。

『どうぞ助けて下さい、ツルリオ、助けて下さい！』と彼女は苦しみに我を忘れて、急に叫び出した、私の方へ腕を差出し、眼を大きく見開いてぢつと此方を瞶めながら。その白眼は半ば暗闇の中にあつて、鉛色した顏から異樣に輝いてゐた。

『助けて呉れつてどうしたらいゝんだえ、話しておくれ、どうしたら好いの。』私はすつかり當惑して仕舞つて、出來る事なら一種超自然的な力をも籠めたい程の身振りで彼女の髪の毛を撫でてやる外には何の術をも知らないで、口籠つた。『話しておくれ。話しておくれ。』

彼女は悲歎に暮れるのをやめた。それでもたゞ私を瞶めて、まるで自分の苦痛を忘れでもしたやうに耳を傾けてゐるだけだつた。多分私の聲の調子や、當惑と煩悶との表情や、彼女の髪の毛を撫でてゐる私の手の戰慄や、何の甲斐もない身振りの恐しく優しいのに吃驚したのであらう。

『貴方は私を愛してゐて下さるわね。』と彼女は尙も私の感情の小さな片影をさへ見失ふのを恐れてゐると云つた樣に私を瞶め乍ら尋ねた。『本當に貴方は私を許して下さるの。』

それから彼女は又も昂奮狀態に陷つて、泣き出した。『貴方は私を愛さなくつちやなりません。今は出來るだけ私を愛さなくつちやなりません。なぜつて明日になれば私はもう此處にはゐなくなるかも知れませんもの。私は今夜死んぢまふかも分りません。多分今宵の中に死ぬでせうよ。さうすれば貴方は私を愛しなかつたことを後悔なさるでせう。私を許さなかつたことを後悔なさるでせう。あゝ、貴方は其の時になつて屹度悲しみに沈みなさるに相違ない——』

彼女は自分の死ぬことを如何にも本當らしく信じてゐるやうに見えた。其の爲め私は思はず恐怖に打たれてぞつとした。

『さうよ、貴方は私を愛さなければなりません。まあお聞きなさい。多分貴方は私があの晩云つたことをお信じにならなかつたでせう。今も私の云ふことを信じては呉れないでせう。でも私が死んで仕舞へば直ぐに屹度信ずるに相違ありませんわ。その時になつて始めて貴方はお分りになるでせう。本當のことがお分りになりませうよ。そして私を十分に愛さなかつたことを、私を許さなかつたことをお悔みになることでせう——。』涙の爲めに暫く聲がつかへた。『貴方はなぜ私が死にたがらないのか知つてゐて？　それは私がどんなに貴方を愛して來たか、——わけてもあの時からどんなに私が貴方を愛して來たかを知つて貰へないからですわ。あゝ何といふ罰だらう？　私はこんな終りを遂げなけりやならないのでせうか。』

彼女は兩手に顏を埋めた。けれども次の瞬間には、もう其の手を放して、眞蒼になつて私を睨めた。更にもつと恐しい考が電光のやうに彼女を打つたらしかつた。

『そして若し私が死んだら。』と彼女は口籠つた。『若し私が死んで、あの子だけ生き殘つたら？』

『お默り、ねえ。』

『分つて——』

『靜かにおし、ジュリアナ。』

彼女よりも私の方がよつぽど吃驚した。私は恐怖にすつかり襲はれて仕舞つて、慰めの言葉を一言云つてや　力も、死の幻影を追ひ拂つてやる生きた言葉を一言考へ出す力もなかつた。私も矢張り其の恐しい結末がどうなるかとそれのみに氣を引かれてゐたのであつた。私はたゞ刻々に迫つて來る紫色の暮色を通して彼女を見ることが出來るだけであつた。彼女も矢張り私を見返してゐた。何だか其の疲れ果てた顏にははつきりと最後の苦しみの徵候が、すばやい、止めることの出來ない分解作用の徵候が現はれてゐるやうに思はれた。彼女は私の腕に縋りついて、人間らしい所の少しもない、長く引きずるやうな呻き聲を發した。

『助けて下さい、ツルリオ、助けて下さい。』

彼女はしつかりと私をつかまへた。けれども彼女の烈しい苦痛が少しでも減ぜられるものなら、私の肉に彼女の心が喰込む位は何でもないと思つた私にとつては、まだその摑まへ方が足りないやうに思はれた。彼女は私の肩に額を押しつけた。そして絶えず呻いた。それは苦痛が烈しいので人間の聲とも思へない叫び聲であつた。又苦しんでゐる人を苦しみ藻掻く獸同様なものにする聲であり、人であり獸であることを問はずあらゆる苦痛に惱まされた肉體の本能的な慟哭であつた。

時々彼女は助けを求める叫び聲を發するだけの聲を取戻した。

『おゝ、ツルリオ、咽喉をしめて下さい。殺して下さい。どうにも我慢が出來ません、我慢が出來ません。聞えますか。私もうこれ以上苦しみたくはありません。』

彼女はまるで私に出來ない助けを與へて呉れる何物か又誰かを探しでもするやうに狂人のやうな眼附で四邊を見廻しながら、この最後の言葉を殆ど叫ぶやうにして云つた。

『氣を靜めておくれ、氣を靜めておくれ、ジュリアナ。屹度產期が來たんだよ。しつかりしておくれ！　こゝにお坐り。さあ、しつかりするのだよ。もう少しだから我慢おし。私は此處にゐるよ――お前の側にゐるよ――一寸もこはくはないからね。』

私は呼鈴のある處へ駈けつけて、それを烈しく鳴らした。

『醫者だ！　直ぐにお醫者に來て貰ふやうに云つて呉れ。』

ジュリアナは呻くのをやめた。彼女はもう苦しがつてゐるやうではなかつた。尠くともその瞬間は苦痛を忘れて、何か別の考に思ひ耽つてゐるやうに思はれた。

私がこの急激な變化に思ひつく間もなく、彼女は次のやうなことを云ひ出した。

『ねえ、ツルリオ。若し私昏睡狀態に陷つたら――』

『何を云つてゐるんだえ。』

『このの若し熱に浮かされて、囈言でも云ふやうになつたら――若し囈言を云つて死んだら。』

『それで？』

彼女の聲には大變悲しい調子を帶びてゐたし、又彼女の躊躇してゐるのが妙に恐しかつたので、私は彼女が何を云はうとしてゐるのかは知らなかつたが、頭から足の先まで身顫ひを感じないではゐられなかつた。

『それで？』

『皆んなが其處にゐるでせう――あの私の周圍に。若し囈言で云つて仕舞つたら、本當のこ

とを云つて仕舞つたら――私の云ふことが分つて。たつた一言でもう駄目ですわ――囈言ですもの、何を云ふか分りませんわ。貴方はあれをしなくつちやなりませんよ。』

母や、醫者や看護婦が室へ這入つて來た。

『あゝ、先生。』とジュリアナは呻いた。『私はもう死ぬかと思ひました。』

『しつかりなさい、しつかりなさい。』と醫者は深切な聲で云つた。『何も心配することはありません。今にすつかりよくなりますからね。』

醫者は私の方を見た。『どうも貴方の御良人の方が貴方より惡いやうですね。』と彼はにこにこしながら附け加へた。彼は私に扉の方へ行けといふ身振りをした。『あつちへ行つて下さい、あつちへ。こゝには別に用事はありませんから。』

私は心配さうな憐れみ深い眼に出會つた。

『さうだよ、ツルリオ、お前さんは矢張りゐない方がいゝよ。』

私はジュリアナの方を見た。他の人には少しも構はないで、彼女は不思議な光で輝いてゐる眼でしつかりと私だけを瞶めて居た。其の眼の中には彼女の絶望に陷つてゐる魂のあらゆる力が集められてゐるやうに思はれた。

私は室を立ち去る時、ジュリアナの方を見返りながら、『次の室からは一歩も動かないからね。』とはつきり云つた。

（三十二）

クリスチナが這入つて來て、ジュリアナが會ひたがつてゐる旨を告げて私の眼を覺ましたのは、朝の四時から五時の間であつた。私は次の間で待つてゐながら、長椅子に腰掛けたまま三時頃にうと〳〵眠り出したものと見える。

私はまだぼんやりして眼も重たいまゝ飛び起きた。『どうしたんだえ。俺は眠つてゐたかね。ジュリアナが――』

『吃驚なさるには及びません――何も變つたことがあるんぢやありませんから。奥樣は今落着いてゐらつしやいます。行つて見てあげて下さい。』

私は室へ這入つて、直ぐにジュリアナの方を見やつた。

彼女は仰向けに寢てゐたが、敷布よりも白くて、まるで死人のやうであつた。彼女の眼は私が來るかと思つて、戸口の方にばかり注がれてゐたものと見えて、直ぐに其の眼に出會つた。それは今までよりも大きく、深く、落窪んだやうで、其の周圍には廣い隈取りが出來て

ゐるやうに思はれた。
『此の通りよ。』と彼女は息をきらして囁いた。『別に變つたことはありませんわ。』
彼女は私から少しも眼を離さなかつた。其の眼はまるで公女リザの眼のやうに、『私は貴方から助けを得たいと思つてゐましたが、貴方は何ひとつ與へてくださらない——貴方さへも！』
『醫者は何處に居りますか。』と私は如何にも元氣の無ささうな樣子をして近くに立つてゐる母に尋ねて見た。
彼女は扉の一つを指差した。私は其の方へ行つて、別室へ這入つた。其處には醫者がテーブルを前にして色々と醫療機械を準備したり、クリスチナに小聲で何か云ひ附けたりしてゐた。
『あの、どうしたんですか。』と私は早口に叫んだ。
『今の所は別に御心配なことはありません。』
『ぢやこんな準備は何の爲めなんですか。』
『たゞ用心の爲めにしてるだけのことです。』
『だが何時になつたらあの苦しみは止まるんですか。』

『もう直きで御座いますよ。』
『どうか、何も隱さずにおつしやつて下さい。危險なことでもありませうか。包み隱しなくおつしやつて下さい。』
『今の所ぢやまだ危險の徵候はありません。今はたゞ出血の場合の準備をやつてゐるだけのことです。私の云ふことを信用なすつて、氣を落着けて下さい。先刻も云ひました通り、貴方がお見えになつてゐると却つて奧樣は大變昂奮なさるやうです。今此の短い時間の間こそ奧樣は出來るだけの元氣を出さなけりやならんのです。どうしてもお離れになつてゐて貰はなくつちやなりません。約束には叛かないとおつしやつて下さい。私が呼びましたら何時なん時なりと這入つて來て構ひませんから。』
隣の室からは叫び聲が聞えて來た。
『あゝ、到頭いよ〳〵といふ時が來ました。さあどうぞ靜かにしてゐた下さい。』と彼は叫んだ。
彼は扉の方へ進んで行つた。私も其の後から隨いて行つた。二人はジュリアナの側へ近寄つた。彼女は私の腕を摑んで、力强くぎゆつと締めつけた。どうしてまあ彼女にはそんな强い力があつたのであらう！

『しつかりおし、しつかりおし！』と私は吃つた。『甘い具合に行くでせうね。先生。』
『えゝ、そりやもう。さあぐづ〳〵しちやゐられません。奥さん、御良人に出て貰つて下さい。』
彼女はパツチリと眼を見開いて、醫者と私とを等分に瞶めた。やがて彼女は私の腕を緩めてくれた。
『しつかりおし。』斯う私は息詰まるやうな聲で繰返した。
私は苦しさのあまりに出た汗で濕つてゐる彼女の額に接吻して、振りかへりながら行きかけた。
『あゝ、ツルリオー』と彼女は私の後から叫んだ。それは、『もうこれつきりお目にはかゝれません。』と云つてゐるやうな樣子であつた。
私は彼女の方へ戻るやうな風をした。
『出て下さい、出て下さい。』と醫者は命令するやうな身振りで云つた。
誰かしら私が出ると直ぐ戸を閉めた。私は中の樣子を聞きながら、暫く外に立つてゐた。けれども足は顫へ、心臟は烈しく鼓動して、何も聞えなかつた。私はハンケチを口に咬へて長椅子に身を投げて、座褥に頭を埋めて仕舞つた。何だか手足をブツ〳〵と無器用に切斷されてでもゐるやうな肉體の苦しみを嘗めてゐた。隣室で憐れな女の苦悶してゐる聲が壁越しに聞えて來た。一度聞えて來る毎に私は『愈々來たな。』と思つた。其の合間々々には囁くやうな低い女の聲が聞えた。屹度私の母か乳母が撫めてゐる聲に相違なかつた。今までとは異つて一きは鋭い、人業（ひとわざ）とは思へない叫聲が聞えた。『愈々さうだ！』私は恐怖に打たれて飛び上つた。

私は一歩も踏出すことが出來なかつた。幾分かが過ぎた。其の間の長いつたら無かつた。いろ〳〵の考が眼に見えるやうに心に浮んだ——『生れたんだな、若しジュリアナが死んだら——若し二人とも死んだら——親子が。いや〳〵そんなことはない。ジュリアナは屹度死んだに相違ないが、あれは生きてゐる。だが赤ん坊の泣聲が聞えないのはどうしたんだらう。』其の時私は不意に出血で、ジュリアナが息を引きとりかゝつてゐる處をあり〳〵と幻に描いた……私は扉の方へ飛んで行つて、次の室へ這入つた。直ぐに醫者が、『近寄つちやいけません、奥さんに觸つちやいけません。奥さんを殺すつもりですか。』と叫ぶのを聞いた。

ジュリアナは枕の布よりも白くなつて、まるで死んだやうにぢつとしてゐた。私の母は彼女の上へ伸しかゝつて、混布をあてがつてゐた。アンモニヤの臭氣が空氣の中にプン〳〵してゐた。

私は待ち設けてゐた物音が聞えないので、四邊を見廻した。誰かが一人此處には足らなかつたのだ。

『で赤ん坊は？』と私は顫へ聲で尋ねた。

『其處（そこ）――あの次の室にゐますよ。行つて御覽なさい。』と醫者は答へた。『そして其處にゐて下さいよ。』

私はジュリアナの方へ絶望したやうな身振を見せた。

『一寸も心配にはなりません。――えゝと其のお湯を、クリスチナさん。』

私は別の室へ行つた。微かな、聞えるか聞えない位の泣聲が私の耳に傳はつた。厚い毛布の上には處々に紫色の斑點のある小さな赤味ばしつた肉塊が見えた。看護婦は背中や臨を撫でてゐた。

『さあ、旦那様おいでて御覽なさいまし。本當に綺麗な赤ちやんですよ。』と看護婦は尙ほ撫でてやりながら云つた。『最初は一寸息をしなかつたんですよ。でももう大丈夫です。本當にまあ立派な赤ちやんですこと！』

彼女は赤ん坊を仰向けにして私に見せた。それから又抱き上げて靜かに左右に搖つたりした。泣聲はいくらか大きくなつて來た。

けれども私はどうしたのか眩しくつてはつきりと赤ん坊を見ることが出來なかつた。私の心は不思議にもすつかり痲痺してゐた。だから現在眼の前にある此の恐しいものの印象がはつきり得られなかつたのである。

『まあ御覽なさいまし。』と乳母は、泣いてゐる赤ん坊を丁寧に毛布の上へのせながら云つた。

赤ん坊は元氣よく泣いてゐた――呼吸を續けた――助かつたのだ、――私は喘ぐやうにして泣いてゐる小さな姿を覗いて、努めて忌はしいあの似寄を見つけようと思ひながら、ちつと檢（あらた）めて見た。けれども小さな顏はまだ膨れてゐて、鉛色を帶び、眼球が飛び出て、脣は腫れ、頤はこけて、ぽつとしたまゝで、奇怪な、殆ど人間とは思れないやうであつた。私はただ憎惡を感ずるばかりだつた。

『最初生れたばかりの時には、息をしなかつたのかえ。』と私は吃つた。

『えゝ、少し中風の氣味で――』

彼女は話しながらも赤ん坊に始終注意を拂つてゐた。私は赤ん坊を蘇生（よみがへ）らした其の骨張つた手を瞶めないではゐられなかつた。

『もう大丈夫で御座います、氣嫌もよささうです。どうかお丈夫で！』

泣聲は段々烈しくなつて來た。赤ん坊は、手足をピク〳〵させて、尙ほ何處となく中風らしく面影や、紫がかつた色や、無愛相な容貌を見せて、憤つてでもゐるやうに泣き立てた。彼は段々烈しく泣いた、まるで私に活力を增す確かな證據を見せでもするやうに、又は私を憤らせでもするやうに。

赤ん坊は助つた、さうだ助つたのだ――が、母親はどうした？

私は狂人のやうになつて別室へ走り込んだ。

『ツルリオ！』

それはジュリアナの聲であつたが、死にかけてゐる人のやうに弱かつた。

（三十三）

熱い湯を絶えず使つて、彼是十分間ばかりで出血を喰止めた。もう患者は靜かに横になつてゐた。外はすつかり明るかつた。

私は患者の枕元に腰掛けて、默つて悲しさうにジュリアナを瞶めた。彼女は眠つてゐるのではないか知れないが、すつかり弱りきつて仕舞つたのか、身動きもしなければ、生きてゐる風さへ見せなかつた。何だか氷みたいに冷たくなつてゐるやうに思はれたから、私は思はず觸つて見ようとしたが、彼女の心を亂してはいけないと思つて差控へることにした。私は長く見守つてゐる間に、突然恐怖に襲はれて、幾度醫者を呼びに立上つたか知れなかつた。私は腰掛けてゐる間に、思はず繃帶の布を指先で引出して、すつかりほごして仕舞つた。そして何だか心配でたまらなかつたから、それを時々こつそりとジュリアナの脣の前へ差出して見た。細い糸が搖れるのをたよりにして、彼女の呼吸の力を知りたかつたのである。

彼女は枕に頭を低く埋めて仰向けになつてゐた。栗毛の髮の毛は解けたまゝ顏の廻りに波打つてゐた。それが又彼女の顏立を今までになく細く見せ、蒼白く思はせた。寢卷は咽喉や肘の廻りにかためてあつた。寢床の外へ平に投出されてゐる手は、如何にも眞白で、蒼い靜脈でもなかつたら、とても敷布と見分けがつかない位であつた。この憐れな血の氣のない、ぢつとしてゐる身體からは、神の御心にも等しい仁慈の吐息が湧き出て、私の身體中に滲み渡り、おまけに私の胸底までも切り責むやうに思はれた。烈しい叫聲を發せずにはゐられなかつたほどの苦痛ですつかり歪んで仕舞つた、いかにも疲勞の色のはつきり見える、あの力なく垂下つてゐる口は、絶えず、『貴方、私をどうして下さつたんです。』と繰返してゐるやうであつた。

身體はすつかり痩せてゐるので、掛蒲團は敷物よりは幾らも高くはなつてゐなかつた。事件が一先づ片附いて、彼女は到頭恐しい重荷を卸すことが出來、別の生命が到頭彼女の生命から離れて仕舞つたせゐか、あの本能的な憎しみの情や、あの急に襲つて來る憤怒の雲が湧き上つて來て私の愛着や憐れみを曇らすやうなことはもうなかつた。私はまるで今の世のゐるものの中で一番愛らしい一番不幸な女にでも對するやうな、優しい愛情と優しい憐れみを彼女に對して感ずるより外には何の意識もなかつた。私は魂をすつかりあの憐れな脣、今にも息を引き取りはしないかと思はれるあの脣に打込んでゐた。私は彼女の蒼ざめた顏色を見ながら、『私の血を半分ほどあの血管へ移してやれたらどんなに嬉しいだらう。』と心の底から眞面目になつて考へた。

かうして物思ひに耽つてゐると、寢床の側のテーブルに載つてゐる置時計の幽かに時を刻む音が聞えて來た。私は時が刻一刻とあの平らな調子で刻まれながら過ぎて行くことをはつきりと意識した。

『彼の兒は生きてゐる。』と私は獨り考に耽つた。『彼の生命はしぶといのだ。生れた時には息をしなかつたぢやないか。それに俺が見た時にはまだ窒息の徵候があり〳〵と見えてゐた。若し看護婦が手を盡して救はなかつたら、今頃は、ただ一箇の小さな死骸になつてゐただらう。見えない處へ片附けられ、屹度忘れられるやうな、無害な物になつてゐたであらう。俺はジュリアナの恢復のことばかり考へなくつちやならないのだ。病床は少しも離れまい、看護婦中の最も優しい最も忠實な看護婦になつてやらう。奇蹟を遂げてやらう。たゞ〳〵愛の力に依つてのみ彼女を蘇生らせてやらう。恢復しないなどといふことがあるものか。彼女は再生して、血を新にして、深淵から浮上つて來るだらう。汚れてゐたものをすつかり洗ひ落して、新しい人になつたやうに思はれるだらう。大變長い大變憂鬱な時が過ぎた後なのだから、二人は屹度清い身になつて、お互ひに尊敬し合ふやうになるだらう。彼女が病氣になつたこと、其の病氣が恢復することは、あの恐しい過去を遠い〳〵昔のことにして仕舞ふだらう。そして私は心の中からすつかり其の思出を拭ひ取つて仕舞つて、私の愛で彼女にもすつかり過去のことは忘れさせて仕舞はう。あらゆる他の人の愛はこんな大きな試練を經た後の私達の愛に比べれば、全く取るに足らないやうに見えるぢやないか。』私の魂はこの神祕的な空想の未來を見て浮立つて來た。でも私がぢつと瞶めてゐると、ジュリアナの顏は、もうまるで他界の者ででもあるかのやうに靈魂の相を帶びて來た。暗默の裡の質問ももう悔恨の念で私を苦しめはしなかつた、恐しいとも思はれなかつた。で私は答へた。『お前は私の行爲で「悲哀の妹」とはならなかつたか。お前の魂は苦しみを通りぬけて、下界を見下すことが出

來、而かも新らしい光でそれを眺めることの出來る眩惑のするやうな高い處へ昇りはしなかつたか。お前は私から立派な眞理の啓示を受取りはしなかつたか。若し俺達が眼前にある暗闇の幕をうまく切落せるならば、そして若し足桎を拂つて、私達の慘めな人間性の中にある尊いものを自由にしてやることが出來るならば、私達が罪を犯したの、又墮落したのといふことは何でもないではないか。地上で選ばれた人々のみが求めて得ることの出來る一番光明のある喜び――意識的に再生したといふ喜びを私達は授かるだらう。』

斯うして私は有頂天になつた。凹間(アルコヴ)の中は寂然としてゐた。神祕的な影が閉ざしてジュリアナの顏は物凄かつた。私の彼女に對する思ひ遣りは、見えない死が其處にゐるやうに思はれたので、如何にも嚴肅なやうであつた。私の魂はすつかり今にも息を引取るかと思はれる蒼ざめた脣に氣を取られてゐた。

やがて其の脣が縮まつたかと思ふと、其の間から呻聲がもれて來た。額の凹みは段々深くなつた。眼瞼が微かに搖れたやうだつた。睫毛の間には白い線が現はれた。

私は病人を覗いて見た。彼女は眼を開けたが直ぐに又閉ぢて仕舞つた、私に氣がつかなかつたやうに。其の眼はまるで急に盲目にでもなつたやうに視力がなささうであつた。一體そんなことがあるだらうか。

私は室の方で足音を聞いた。で凹間から出て見ると、醫者と私の母と看護婦の三人が靜かに此方へ來る所であつた。

『お寢(ね)みになつてゐますか。』と醫者は囁いた。

『丁度今呻りましたよ。苦しいんでせうね。』

『何か云ひましたか。』

『いゝえ。』

『どんなことがあつても昂奮させちやなりません――それだけはお含み置き下さい。』

『眼を一寸開けましたか、何も見なかつたやうです。』

醫者は私の外にゐる方がよいといふ意味のことを知らせて、凹間(アルコヴ)へ這入つて行つた。

『此方へ來なさいよ。』と母は云つた。『これから新たに又療治をしなくちやならないのだよ。さあ、行つてモンディノを見て上げませう。あの兒の側にはフェデリコがゐますよ。』

母は私の手を取つた。私は彼女に連れて行つて貰ふやうにした。

『あの兒は眠つてゐたよ。』と彼女は言葉を續けた。『それは穩かに眠つてゐるよ。午後からは看護婦さんが此處にゐてくれるだらうよ。』

私の母はジュリアナのことを大變氣にして沈んでゐたが、それでも赤ん坊の話になると、

眼を輝かせないではゐなかつた。顏には優しさが溢れ輝いた。

醫者の云ひつけで、遠く離れた室が子供部屋にあてがはれてゐた。それは大きな風通しの好い部屋で、私達の子供時代の記憶が澤山殘つてゐる處だつた。搖籃の廻りには、眠つてゐる赤ん坊の方に皆んな氣を取られながら、フェデリコ、マリヤ、ナタリヤが集つてゐた。私が這入るなり、フェデリコは急いで、ジュリアナの容態を尋ねた。

『大變惡い。』

『落着きませんか。』

『酷く苦しがつてゐるよ。』

私は殆ど我を忘れてぞんざいに答へた。私はたゞ〳〵闖入者に對する喰止めることの出來ない、蔽うて置くことの出來ない憎惡と、其處にゐる人達が無意識の間に私へ押しつけて呉れた苦しみに對する煩はしさと悶々しさとを感ずることが出來るだけであつた。仕たいと思ふことをすれば、私はそれを隱すことが出來なかつた。母と私とは搖籃の廻りにゐる仲間に加はつて、眠つてゐるライモンドを瞶めた。

彼はもうすつかり着物を着せられて、頭にはレースやリボンの飾のついた小さい帽子を被つてゐた。顏の脹みは大變引いたやうだが、まだ充血してゐた。頰はまるでほんの近頃癒えたばかりの傷の上に出來た皮膚のやうにピカ〳〵光つてゐた。口の隅からは水が少し宛流れた。睫毛がなくて端の爛れてゐる眼瞼は眼球をすつかり包んでゐた。鉛色をした部分はまだはつきりは出來てゐないが、小さな鼻が其處へ出來ることが分つた。

『まあどつちへ似てるんでせうね。』と私の母は云つた。『まだ私には分らないんだよ——』

『まだ生れたばかりぢやありませんか。』とフェデリコが云つた。『一日二日待たなくつちや駄目ですよ。』

私の母は私と赤ん坊とを見較べて、容貌を比べてゐた。

『何ね。』と彼女は云つた。『さつと見た所、ジュリアナの方によく似てゐるよ。』

『今の所ぢやどつちにも似てゐませんよ。』と私は口を挾んだ。『たゞ厭な奴です。』

『厭な奴？　だつて本當に綺麗ぢやないかね。まあ髮の毛の多いことー』彼女は斯う云ひながら、靜かに指で帽子を背中の方へ押しやつて、處々に鳶色の髮の毛の生えてゐる小さな柔かなピク〳〵顫へてゐる頭を裸にした。それは丁度熱を受けて少し熔け出した蠟の細工物のやうに、暗黑くつて、すべ〳〵してゐた。一寸觸つても跡がつきさうに思はれた。

『祖母ちやん、私に觸らして頂戴。』とマリヤは赤ん坊の方へ手を差しのべながら、賴むやうに云つた。

『いけないよ、いけないよ。赤ん坊が眠を覺ましますよ。』と云つて、彼女は帽子を元の位置になほし、彼の上にこゞみかゝつて、如何にも用心深く其の額に接吻した。

『祖母ちやん、私にも。』とマリヤはねだつた。

『そつとだよ、いゝかえ。』

搖籃は彼女には少し高過ぎた。『持上げてね。』と彼女はフェデリコに云つた。弟は云はれるまゝにした。私はまだ彼女が赤ん坊の額に口を觸れない裡に、まるで接吻する爲めに出來てゐるやうな私の小さな娘の美しい薔薇の葉のやうな脣や、白い蒲團の上に垂れ下つてゐる長い捲毛やを見た。

フェデリコが今度は赤ん坊に接吻した。それから私の方を見た。私は微笑みもしなかつた。

『私にも、私にも。』とナタリヤが搖籃の端に掴まりながら叫んだ。

『靜かに、靜かに。』

フェデリコは彼女を持上げてやつた。私は又しても小さな可愛らしい姿が覗き込むと同時に、捲毛がさつと白い蒲團の廻りに落ちるのを見た。私は化石したものゝやうになつて立つてゐた。顏には屹度其の時私を襲つてゐた厭な感情が現はれてゐたに相違なかつた。可愛くて堪らないあの脣からの接吻も決してあの闖入者の容貌に對する私の嫌惡を緩めはしなかつた。それどころか却つて私には前よりは一層忌はしいもののやうに思はれた。私は自分に關係のない肉塊に觸はることは出來ない、又此方からわざ〳〵父親らしい愛情を示すことも出來ないやうに感ぜられた。私の母は吃驚して心配さうに私の方を眺めた。

『接吻してやらないのかえ。』と彼女は尋ねた。

『えゝ、お母さん、出來るもんですか――此の兒はジュリアナを大變苦しめたんですもの。どうしても許すことが出來ない――』と云ひかけて、私は何とも云へない厭な思ひに、思はずぞつとして言葉を切つた。母はあつけに取られて暫らく突立つてゐた。

『でも何とお云ひだね。ツルリオ。あの兒が何を惡いことをしてゐるのだえ。本氣になつてお呉れよ。』

私の母は確かに私の厭がつてゐる本當に就いては少しも疑はなかつた。私は自分を制することが出來なかつた。神經が一時にかつと昂奮して來たのであつた。

『でも出來ません――出來ません――どうか放つて置いて下さい。お母さん――今によくなりますから。』

私の聲は荒々しくて如何にもきつぱりしてゐた。何だか胸が一杯になつて、顏中の筋肉が苦しさうに引きつつた。幾時間も酷く苦しんだ後で、私は心から或る救ひを願ひ求めずには

ゐられなかつた。思ふさま泣きでもしたら樂になれるかも知れなかつたが、胸は少しもすつきりしなかつた。

『酷く私に氣を揉ませるんだね、ツルリオ。』と彼女は云つた。

『無理にも接吻しろと云ふんですか。』と私は荒々しく叫んだ。そして搖籃の方へ進み寄つて赤ん坊の上にのしかゝつて、それに接吻した。

彼は直ぐに眼を覺ました。そして初めの間は微かであつたが、仕舞には怒つてでもゐるやうに泣き立てた。顏はずん〳〵紫色に變つて、力一杯に引きつつた。小さい白い舌はわんぐり開いた口の中でぶる〳〵顫へた。私は絶望の極殆ど氣が狂はんばかりになつてゐたが、それでも自分の犯した過失を認めることだけは出來たのであつた。私は家の者が吃驚したまゝあつけに取られてぢつと私を認めてゐるのに氣がついた。

『どうか許して下さい、お母さん。』と私は口籠つた。『何をしてゐるんだか自分でも分らないんですもの——半分氣が狂つてゐるんですから——どうか許して下さい。』

母親は赤ん坊を搖籃から連れ出して、抱いてだまさうとした。けれども赤ん坊はどうしても云ふことをきかないで、泣きやまなかつた。其の泣聲は酷く私の神經に應へて、まるでそれを引きちぎるのではないかと思はれた。

『彼方へ行かう、フェデリコ。』

私は急いで室を出た。フェデリコは後から隨いて來た。

『ジュリアナは酷く悪いんだよ。かういふ際なのに、そのことを考へないなんて、私にはさつぱり分らない。』私は自分の行爲を是認しようと思つて斯う云つた。『まだお前は姉さんを見なかつたね。そりやまるで死人のやうだよ。』

（三十四）

數日間、ジュリアナは生死の間を彷徨した。ほんの輕く力を出しただけども直ぐ眩暈がする位彼女は弱つたゐた。一寸身體を起さうとしても、直ぐ瞳貧血の徵候が現はれるので、彼女は全く安靜に横臥してゐなければならなかつた。

日夜私は彼女の傍を離れないで、看護をつづけ、自分でも吃驚する位、精力を出して倦む事がなかつた。私は一生懸命になつて、刻々に消えて行かうとする危機にある焰に生命を與へることに腐心した。丁度病褥の向う側に、死が、自分の餌食に摑みかゝらうとする最初の機會を捉へようとして手ぐすね引いて待つてゐるやうであつた。その時私は實に、彼女の弱

り切つた肉體に私の血を移し、私の力の幾分を彼女に分ち、弱々しい脈搏を打つてゐる彼女の心臟に、新たな衝動を與へてゐるやうな氣がした。病室のどんな厭はしい小面倒な事も私に反感や嫌惡を毛程も起させなかつた。私の五官はすつかり緊張して、たゞ〳〵に微かな變化でもありはせぬかと氣づかつた。彼女が一言も言はぬ先に、彼女が眼配せもしない先に、私は彼女の願ひや、苦しみを見拔いた。私はたゞ推察だけで、別に醫者からは何の暗示も受けずに、彼女の苦痛を軟げてやつたり、彼女の不安を慰めてやつたりする巧妙な新方法をうまく發見した。私丈けが營養分を取ることや、幾分の睡眠をすることを彼女に勸める事が出來た。私は、いろ〳〵宥めたり、賺したりして、藥を飲ませた。此方から執拗く勸めるものだから、彼女は仕舞ひには逆らふ事が出來なくなつて、やつと元氣を取りなほして、さし寄せて來る嘔氣にも打克つのであつた。彼女が私の云ひつけを一寸でも守つてくれるだけで、私の心はもうどん底まで動いた。彼女が弱々しい聲で、微かな微笑を洩らしながら、『そんなにしていいの？　私、少しはよくなつたのか知ら！』と云ふと、私の咽喉は物が支へた樣で、眼には涙が滲んだ。

彼女はよく顎顎がづき〳〵して、少しも落着けないと呟いた。さういふ時には私は其の苦痛を吸ひ取るやうに、指で彼女の額を撫でてやつた。私はそつと髪を撫でてやつては、彼女を眠らせた。彼女の息使ひで安眠したことが分ると、私はまるで此の惠み深い睡りで、自分まで氣がせい〳〵させられるやうな感を抱くことがあつた。斯ういふ睡眠に對すると、はつきりとはしないが一種の宗教的な熱情で心が一杯になつた、わが誓ひを捧ぐべき或る優越者、全知、全能の存在を信ずる必要が感ぜられた。クリスト教徒の樣々な形式の祈願が、私の胸の底から湧き出て來た。此の心内の雄辯が、時に私を、眞實なる歸依の頂上に私を連れ上げることもあつた。數多くのカトリック教徒の教父等が長い間かゝつて傳へた神祕な傾向が、私の中に眼醒めて來た。

斯うして默禱を捧げてゐる間も、私は寢顏を見守つてゐた。私は彼女の頰や、顎や、咽喉に、透き徹るやうな皮膚の上から、血管を數へることが出來た。私は何かの超自然力を借りて、此の痲痺し切つた肉體の中に、神祕な働きが起つて回復に向つて行く經過を、見たいものだと望んだ。而していつも、彼女が目醒めさへしたら、少しでも元氣が附いてゐるやうにと願つた。

彼女は、その冷え切つた手で、私の手をしつかりと握つてゐることに、多くの慰めを感じてゐるやうに見えた。時々彼女は私の手を取ると、それを枕の上に置いて、疲れた子供のやうに其の上へ頰を戴せ、すぐに、すや〳〵と眠り就いた。私は彼女を眼醒めさせない爲めに

は、いつまでも手を動かさないでゐて、それが痺れる位は構はないと思つた。

時折彼女は云つた。『何故、貴方も私の横でおやすみになりませんの――ほんとに些ともお寢なさらないわね。』

而して彼女は枕の上へ私の頭を横たへさせた。

『よしよし。では僕達二人で寢よう。』と私は好い模範を示す爲めに、眼を閉ぢて見せた。然し私が眼を開いて見ると、必ず彼女も眼を大きく見開いて、私を瞶めてゐるのであつた。

『これ！』と私は叫んだ。『お前は何をしてゐるの？』

『貴方は？』と彼女は言ひ返した。

彼女の眼には、私の心臓を胸の中で躍り立たすやうな、限りのない深切な表情が籠つてゐた。私は脣を差出して、彼女の眼瞼を接吻した。彼女も私に同じやうに仕返すと云ひ張つた。而してそれを繰返した。

『さあ、今度こそ二人で寢ようよ。』

時には私達の不幸の上に、何物をも忘れさせる帳が掩ひ被せられた。

彼女の痩せた小さい足は、大抵氷のやうに冷たかつた。夜具の下でそれに觸ると、大理石ではあるまいかと云ふやうな氣がした。

『足は死んでるのだと思ひますわ。』と彼女は云つた。

足は私の手で握れる位に、纖細かつた。それが又私の哀れを誘うた。私は飽きもせずそれを溫めようとして、息を吹き掛けたり、接吻で掩ふたりしてやつた。

或る日私は、餘り長い看護に疲れたので、たわいも無く眠り込んだ。丁度彼女の死んだやうな冷たい足を、暖めたフランネルで包んでやつてゐる時、がくりと病床の横へ膝を突いて、其の儘寢込んで仕舞つた。

眼が醒めて見ると、母と醫者と、フェデリコとが、立つて私を見ながら笑つてゐた。私は大いに狼狽した。

『可哀さうに。これは疲れ切つてゐるのだよ。』と云つて、母は慈愛の深い手で、私の亂れた髪を撫でつけてくれた。

『あちらへ連れてつて上げて下さい。お母様。』とジュリアナは願つた。『ね、フェデリコ、貴方、彼の人を連れてつて上げて下さいよ。』

『いや、いや。僕は疲れてやしない。』と私は斷言した。『僕は疲れちやゐない。』

醫者は急用で、出發しなければならないと言ひに來た。病人は峠を越えて、好い鹽梅に回復しかゝつてゐると、彼は確言した。今や、私達は、彼女の力を附ける凡ゆる手段を講じな

ければならない。彼が今迄相談してゐた助手が、今後の注意もして呉れるのだが、その面倒ももう極めて簡單に過ぎないのであつた。彼は醫藥などよりも、彼が規定した衛生上や營養上の規則を、嚴守することの方は大切だと云つた。

『そして私は確信してゐますよ。』と、彼は私の方へ振向いて、云ひきつた。『貴方よりも聰明で、よく氣の附く、熱心な看護婦を求めることは出來ない事をね。貴方は奇蹟をなすつた。これからもなさるでせう。私は安心して出掛けることが出來ます。』

私は心臟が咽喉元までつかへて、窒息するやうな氣がした。此の古馴染から受けた思ひがけない讃辭は、深く私の心に觸れて、此の上ない報賞となつた。私はジュリアナを見た。彼女の眼には涙が浮んでゐた。私が凝つと見てゐると、彼女はだしぬけに泣き出した。私も非常な努力で、自分を抑へようとしたが、駄目であつた。魂が、すつかり私の中で溶けたやうな氣がした、慈愛と親和の世界は、此の永久に忘れられない時機に於いて、私の胸を波打たせた。

（三十五）

ジュリアナの健康は日に日に少し宛よくなつては行つたが、私は少しも氣を緩めなかつた。ヴェベスチ博士が勵ますやうな確證を與へて呉れたので、たゞそれだけが私の介抱に一層元氣を附けて呉れた。私は自分の代りに誰をも立てたくなかつた。私に休めることを勸める母や弟の申出をも凡て拆けた。私は此の骨の折れる仕事にも馴れつこになつたので少しの疲勞も感じなかつた。私に取つては、生活と云ふものが、此の四圍の壁の彼方、わが愛する病人の呼吸をしてゐる空間以上には擴がつてゐなかつたのである。

彼女が絶對に安靜を必要とし、又彼女自分から疲れないやうにする爲めに、話をなるべく避ける方がよい時には、私は家の者さへなるべく病床に近づかせなかつた。此の病室は、外の室とは掛け離れた處にあつた。幾時間も幾時間も、私とジュリアナとはたゞ二人でゐる事があつた。ジュリアナは病氣で苦しんでゐるし、私は看護者としての自分の職分を果さねばならないし、折には二人共相互の間に蟠る悶著を忘れてゐることも珍らしくなかつた。何故なら實際の事に對する觀念は朧ろになつて仕舞つて、私達の無限の愛以外に何も意識しないからであつた。何物もあの恐怖を私達に想ひ起させなかつた。私はたゞ眼の前に苦しんでゐる妹を見るだけであつた。そして彼女の苦痛を靜めてやらうと云ふ以外に何の氣遣ひもなかつた。時々、私は病室のカアテンの外には何物も存在しないやうに感じることがあつた。私

の全存在はそんなに強く病人の方へ惹き附けられてゐるのであつた。

然し、此の忘却の面紗（ヴェール）が無残にも破れて仕舞ふことも珍らしくなかつた。私の母はライモンドの名をよく口にした。而して母の手に抱かれて來る此の闖入者が、いつも忘却の面紗（ヴェール）を破るのであつた。しかも私は其處にゐるのだ。そして凡ての血が心臓に集つたやうに顔が蒼白くなるのを覺えた。ジュリアナの胸の中はどんなであつたらう。

私は、レースの縁の附いた帽子に、半分隠れてゐる拳位（こぶし）な大いさの、紅い顔を見た。そして私の魂から凡ゆる優しい感情を一掃し去つて仕舞ふ兇猛な反感を抱きながら、私は自分で考へた。『私はどうしてお前から遁れようか？　何故――おゝ、何故お前は息を引取つて死なないのだ！』私の憎悪は際限のない譯の分らない、始末におへない、兇猛なものであつた。何物も此の憎悪を抑へることが出來なかつた。何物も此の憎悪を打碎くことは出來なかつた。此の闖入者の顔さへ見ると、何時でも、如何なる時でも、私には、即刻、大津波が押し寄せて來るのであつた。私の抱くのはたゞ一個の感情――彼に對する憎悪だけであつた。

『此の二三日の間に此の兒がどんなに變つたか見て御覽。』と母はジュリアナに云つた。『これはツルリオよりもお前に似てゐる。けれどお前達の何方にも大して似てゐないね。尤も未だ小さいのだから――今に似た處も見えて來るだらう。キスしたくはないかえ。』彼女は病んでゐる若い母の脣に赤ん坊の額をつけた。

ジュリアナの氣持はどんなであらう？

子供は泣き始めた。私は苛立つて來るのを隠して、『彼方へ連れていらつしやる方がいゝでせう。ジュリアナは今、絶對に安靜にしておかねばなりません。一寸した騒ぎも、非常に應へますから。』と云ふだけの自制力を有つてゐた。

母は凹間（アルコヴ）を出た。赤ん坊の泣聲は段々高くなつた。私は次の一つの願望以外には何も考へなかつた――あの聲を又と聞かないやうにするには、窒息させるに如（し）くはない――と。私達は、遠くの室にその聲が消えて行くつい二三分間前までそれを耳にした。聲がやつと止むと沈默が――巨大な、恐しい木材になつて私の上に落ちかゝつて來るやうな氣がした。然し私は自分の感覺を驗（たゝ）してゐる暇がなかつた。私は直ぐに、ジュリアナには救助の必要があることを思ひ出すのであつた。

『あゝ、ツルリオ、ツルリオ――こんな有樣では、とても長續きはいたしません――』

『しツ！　しツ！　お前が私を愛して呉れてるのなら、ジュリアナ！　そんなことを云つて呉れるな。頼むから。』

私の凡ての敵愾心は消え去つた。私は彼女の苦痛のために悲しんだ。彼女が害惡を受けは

しないかと云ふこと、即ち彼女の生命の脆い糸にショックを與へはすまいかと云ふことの爲めに恐れた。

『お前が私を愛して呉れるなら、よくなると云ふことの外何も考へて呉れるな。私もお前以外に何も考へない。私が悲しむのも、苦しむのも、たゞお前の爲めだ。お前は自分で身を苦しめてはならないよ。お前は全く私の愛情に身を任せて仕舞つて、よくならなくては——』

『だけれど、貴方がどんな苦しい思ひをなさらねばならないか分らないのですもの！』と彼女は、弱い、慄へを帶びた聲で呟いた。

『いや、いや、ジュリアナ。お前はそんな事を氣にかけなくてもいゝよ。私はお前が苦しんでゐるのを見ると、矢張り苦しい。私はお前が微笑んで呉れるのを見ると、何も彼も忘れて仕舞ふ。お前の氣持さへよければ、私は全く幸福なんだ。だから私を愛して呉れるのなら、お前はよくならうとしなければいけない。お前はおとなしい、柔順な病人とならねばいけない。何時お前が元通りになつて、又元氣を回復するかは——神様が御存じだ。神様は深切だから。』

『主よ。私達にお惠みを垂れて下さいませ。』と彼女は囁いた。

『その惠みはどんな風にして？』と私は獨りで考へた。『あの闖入者を殺して？』

だから元は私達二人共、彼の死を願ふ祈禱を捧げてゐたのだ。彼女とても此の兒の破滅以外に、遁避の路がないことを承知してゐた。ずつと昔に、夕陽を浴びて、楡の木の下で交はした會話や、其の時彼女がした可哀さうな懺悔やを思ひ出した。『然し一度生れて來た以上、今に於ても未だ彼女がそれを呪つてゐるかどうか？　彼女の肉の肉に對して眞の敵對心を持ち得ようか？　此の小さい魂を、神の御許に還す樣に彼女が祈る事が出來ようか？』——私は、あの悲劇的な夕方に、私の心にちらと浮んだ亂暴な希望を思ひ浮べた。『若し、罪の暗示が彼女の心の中に落着いて、彼女を滅ぼして仕舞ふまで段々に强くなつて行つたらどうだ？』私は看護婦が、まだ生きてるかゐないか分らない赤ん坊の、小さい充血した身體の、背や、瞳（ちしのうら）を亂暴に擦つてゐるのを見た時、彼女が一その事ひと思ひにやつけて呉れたらと、成功しさうもない一時的幻影に、私は捉へられたではないか？　いやジュリアナは到底その勇氣を持つてゐないだらう。これも所詮は私の狂氣じみた考へに過ぎない——

私は寢床の上に延ばしてゐる彼女の手を瞶めた。それは例に依つてたゞ青い脈が浮き上つてゐるので漸く敷布と區別がつく位に白かつた。

（三十六）

病人が日々に丈夫になつて行くにつれて、私の心には一種の不思議な苦惱が起つて來た。それは私の田舍の戸外から、雨の單調な響が聞えて來る間、凹間（アルコヴ）の中で過ごした憂鬱な、暗い日に對する淡い名殘惜しさであつた。あの朝々、あの宵々、あの夜々は、倦怠と苦痛とに滿ちてはゐたが、その中に嚴かな快美がないこともなかつた。病室で働く事は私の眼に、日に日に一層美しいこととして映つた。澎湃たる愛の海が、私の魂の中に氾濫して、暫くは暗い數々の思を溺らせ、戰慄すべき運命を忘れさせて、私に慰籍の幻影と、定め難い夢とを見させて呉れた。私は折々、或る暗い、祕密の聖堂にゐたやうな氣もした。人生の兇暴を避け又誘惑と罪とを避けて、靈廟にでもゐるやうな氣がした。凹間（アルコヴ）のカアテンが、大口を開いてゐる深淵から、私を離れさせて呉れるやうに思はれた。けれど突然の恐怖が私を襲うて、カアテンの彼方の未知の世界の事を考へさせることもあつた。私は夜の看護をしながら、周圍の家の沈默に耳を澄ました。私の魂の眼には、あの離れてゐる室の、柔かい灯影の下に、私の母に取つては喜びと娯しみであり、私には後嗣（あとつぎ）である闖入者の、熟睡してゐる搖籃が見えた。

すべき恐怖が私の全身を傳はつた。私は暫くの間、或る不吉な考へにふと襲はれて、眼を眩まされた。でもカアテンは、大口を開いてゐる深淵から私を引離して呉れた。

然しジュリアナは日に日に快方に赴くものだから、私達は別居生活をする口實がなくなつた。家庭に於ける日常生活は少しづつ靜かな室の中へ這入つて來た。私の母や、弟や、エディス孃は、前より度々見舞に來て、長居をして行つた。ライモンドも否が應でも母の注意を引かないでは置かなかつた。私もジュリアナも、もう彼を避けることが出來なかつた。私達は彼に接吻したり、彼に微笑みかけたりしなければならなかつた。丁寧に上表（うはべ）を裝つたり、しらを切つたり、それから境遇が伴うて來る殘酷な上品振りに堪へたりして、一寸刻みに殺されて行く思ひをさせられた。

丈夫な、肥（こえ）つた乳母に哺育せられ、凡ゆる慈愛の擁護を受けて、ライモンドは漸次に、不快な所が無くなつて、丸々と美しく肥え、肉の輪郭もはつきりとし、碧い眼を大きく見開くやうになつた。然し乳を飲む時の脣の動き方から、小さい手を無暗に動かすのまで、私には脈はしく見えた。私は彼の中に少しの美しさも、可愛らしさも見る事が出來なかつた。隨つて敵意の外、彼に對してはどんな考へも持つことは出來なかつた。私が抱いてやらねばならない時とか、私の母が無理にも接吻を強ふる時とかには、私の皮膚は、丁度何か厭な動物に

でも觸れるやうに、ぞつと冷たくなつた。私の凡ての纖維はそれに反抗して、私の全神經は敵對した。

來る日も來る日も、私を新らしい苛責に遇はせた。私を拷問臺の上にあがらせるのは、外でもない私の母である。或る日私が何氣なく室に入つて、凹間のカアテンを揭げると、赤ん坊はジュリアナと床を並べて休んでゐた。外には誰もゐなかつた——たゞ私達三人だけであつた。赤ん坊はすや〳〵と眠つてゐた。

『お母様が、此處に置いていらしつたのです。』と、ジュリアナは口籠つた。

私は狂人のやうに逃げて行つた。

或る時は又、クリスチナが子供部屋まで來いと云つて私を呼びに來た。行つて見ると、母が、すつかり着物を剝がした嬰兒を、膝の上に載せて腰かけてゐた。

『又此兒に着物を着せる前に、お前に見せようと思つてね。』と母は云つた。『それ、御覽！』

赤ん坊は、自由になつたので、手足を伸ばし、眼を彼方此方と向けて、拳を嘗めてゐた。肘や踝や、膝の後は肉が打粉をかけられて輪を描いてゐた。母は嬉しさうに、その手で小さい四肢に觸つたり、そこ〳〵を指さしたり、浴みをした後の、幾分濡つて、滑々した皮膚を撫で廻したりした。赤ん坊はそれで非常に喜んでゐるやうであつた。

『こんなに緊まつて來たから觸つて御覽よ。』と彼女は云つて、柔かい肉に觸らせるやうに、私にしかけた。だから私も、厭でもそれに觸れなければならなかつた。

『ほら！　此の重いこと。』

私は又厭でもそれを持上げねばならなかつた。そして小さい、生溫い身體が、私の手の中で脈を搏つてゐるのを感じると、私は慄へがついた。——然し、無論愛情のためではなかつた。

『御覽よ。』と母は、前指と拇指との間に、小さい胸の肉を摘んで見せた。その中に此の罪の小生物の、頑くなな生命が宿されてゐるのであつた。

『可愛い兒、可愛い兒、お祖母ちやんの可愛い兒。』と云つて、母は指で赤ん坊の顋の下を擽つた。

此の懷しい白髮の人は、嘗つて私の娘達の搖藍に凭れたと同じやうに、今、何も知らずに、闖入者である他處の男の子の上に、凭りかゝつてゐる。彼女は、私と眞に血を別けたマリヤやナタリヤに對しても、斯程までに優しくなかつたやうに思はれた。

彼女は着物を着せ始めた。此の小さい裸體の上に、彼女は初めて十字と切つた。

『お前は未だクリスチャンぢやない、ねえ。』

それから私の方へ向いて、『私達は此の子の洗禮の日を定めなきやならないよ。』

（三十七）

ヴェベスチ博士の代理は、ジエムマ博士と云つて、エルサレム聖墓の騎士で、陽氣な老人であつた。それが或る朝白菊の大きな花束をジュリアナに贈つて寄越した。

『あゝ。私の大好きな花！』とジュリアナは叫んだ。『本當に有難うございました。』

彼女は花束を取上げて、細い指で花に觸りながら、長い間眺めてゐた。彼女の蒼白さと、此の秋の花の色とは、何處かに悲しい所があるので、その點が似寄つてゐた。それはまるで滿開の薔薇のやうに、蕚が厚くて重く、蒼白くて、血の氣がなく、正氣を失つてゐるやうであつた。その鉛のやうに白い色は恰かも寒さに慄へてゐる小さい乞食の兒の頰を見るやうであつた。尤も中には細かな菫色の纖維の浮いてゐる花や、微かな黄色がかつた花も交つてはゐた。

それは朝であつた。しかも十一月であつた。此の花を見ると思ひ出す、あの不吉な記憶の日の、一周期が來てから、未だ二三日しか經つてゐなかつた。

如何せんユリヂーチェなくば

私が此の白菊を瓶に挿してゐると、このオルフェースの一節が響いて來た。一ケ年前に起つたあの奇怪な場景が、切々（せつ〳〵）になつて、心の中へ浮き上つて來た。柔かな黄金色の光を浴びてゐるジュリアナ、ほのかな芳ばしい香氣、女らしい優雅（やさし）さを具へてゐる彼女の姿態を取卷いてゐるいろ〳〵な物、或る祕密な生命を波打たせて、私の知らない神祕の影を撒いてゐる古代的諧調。此の花を見て彼女もあの記憶を呼び返したらうか。

烈しい悲哀、慰められる術のない戀人の悲哀が、私の魂を壓迫した。今一人の男が私の前に現はれた。彼の眼は闖入者のそれのやうに灰色であつた。

『窓をお開け下さいませんか。』と病室から、醫者が私に呼びかけた。『そしてなるべく空氣と日光を多く入れるように。』

『えゝ、え。開けて頂戴！』と病人も云つた。

私は云ひつけられた通りにした。丁度其の時、私の母は、ライモンドを抱いた看護婦を連れて這入つて來た。私はカアテンを背にして窓に凭れたまゝ遠方を眺めてゐた、後では聞き

なれた聲がした。

十一月も末に近かつた。『死人の夏』ももう仕舞ひであつた。豐かな白い光が、じめ〳〵した田野や、圓々とした落着いた丘陵の上に擴がつてゐた。橄欖の木には銀色の狹霧を通してはつきりと目立つてゐた。蒼白い煙の氣が靜かな空へ向つて其處此處から立上つてゐた。時時思ひ出したやうに微風が吹いて、其の度に微かな葉摺れの音がした。その他のものはすつかり沈默と平和を續けてゐた。

『何故あの朝彼女は唄を歌つたのだらう。』と私は一人で考へた。『私は、何故彼女の歌を聞いて胸騷ぎがしたのだらう。私には全く別の女のやうに見えた。あの時彼女はあの男を愛してゐたのか知ら？　何時にない感情を現はしたが、あれは一體どういふ魂の狀態を物語らうとしたのだらう。戀してゐたから歌つた？　だがさう思ふのも或は間違ひか知れない。事の眞相はまるつきり私には分らない。』私はもう濁つた肉感的な嫉妬は感じなかつた。私の魂のどん底からはもつと精神的な悔恨が湧き上つて來た。『彼女はどんな思出を持つてゐるのだらう。』と私は考へ續けて行つた。『記憶の針は如何に度々彼女を刺したことであらう――子供が何よりも彼等の間の生きた鎖である。ライモンドの中に、彼女は、自ら身を任せた男の面影を見出すに違ひない。それどころかもつとはつきりした類似を見出すに違ひない。彼女

はどうしてライモンドの父を忘れることが出來よう。或は彼女の眼の前には、何時もその面影がちらついてゐるのかも知れない。若しあの男が致命的な打擊を受けたと知つたら、彼女はどう感ずるだらう。』そして私は、可哀想なスピネリの事を思ひ辿りながら、あの男も旋てさうなつて行く中風の病狀の經過を、想像に描いて見た。

『ツルリオー』

それは母の聲であつた。私は窓を離れて病室に入つた。

ジュリアナは銷沈(しようちん)して、默つてゐた。醫者は赤ん坊の頭を診察してゐた。

『私達は此の兒の洗禮式を明後日にしたいと思ふのだがね。』と母が口を切つた。『お醫者樣の云ふのには、ジュリアナはもう少し寢てゐた方がいゝのですつて。』

『これは何(ど)うでせうね、先生。』と私は病人を指さして訊ねた。

『餘り經過がよくないやうですがね。』と彼は美しい白髮頭を振つて答へた。『非常に弱つておいでになりますから、營養物の量を增して、早く元氣を恢復するやうにしないと不可(いけ)ませんね。』

ジュリアナはさも倒き切つたやうな微笑を洩らして私を見た。『先生は私の心臟も診察して下すつたのです。』と彼女は二人の話を遮つた。

『それで！』と私は忙はしく醫者の方へ振り向いて尋ねた。
『その方は心配ありません。』と直ぐに彼は答へた。『いゝ血液を殖やすことと――それから安靜にすることとにさへ氣を附ければよろしい。氣を引き立てなきやいけません。氣を引き立てなきや。今日はお食事はどうでした。』
彼女は厭やさうに蒼ざめた脣を動かしたが、旋て開いた窓から美しい空の一角を瞶めた。
『外は寒いのですか？』と夜具の下へおづ〳〵と兩手を半ば引込めて尋ねた。
而して彼女は、眼立つほど震へてゐた。

（三十八）

次の日、フェデリコと私とはヂオバンニ・ディ・スコルチョを捜しに出掛けた。それは十一月も今日限りの午後であつた。私達は徒歩で、耕してある畑を横切つて行つた。お互に默つて歩いた、思ひ〳〵の考へに耽つて。夕日は地平線の方へゆる〳〵と沈んだ。黄ろい細かな塵埃が一面に靜かな空中を漂つてゐた。濕つた地面は、濕りを帶びて、鮮やかな蔦色を見せてゐた。そして見る眼には默々とした力、さて何と云つたらよからう、まあ無限の力を密か

に具へてゐると云つたやうな印象を與へたのであつた。土からは、微かな息吹きが、丁度家畜の鼻孔から洩れるやうに、立上つてゐた。何でも白い物はみんな、此の穩かな妙な光を浴びて、恰かも搔集めた雪のやうに、白くキラ〳〵と輝いた。遠くにゐる牛、野にゐる勞働者のシヤツ、晒らすので擴げてある布、搾乳處の壁――凡てのものは丁度滿月の光を受けたやうに光り輝いてゐた。
『貴方は鬱いでゐますね。』とフェデリコは優しく私に云ひかけた。
『えゝ、僕は駄目かと――。』
長い沈默が續いた。私達が通つたのに驚いて、鳥の群が慌しい羽音を立てゝ、籬から飛び立つた。遠くから牛の鈴などが微かに聞えて來た。
『だが、兄さんは何で又、そんなに悲觀してるんです。』と弟は何時もに變らぬ深切な口調で續けた。
『ジュリアナの病氣で。』
彼は口を緘ぢた。慰める言葉を知らなかつたのである。屹度彼だつて心を傷めてゐたに相違ない。
『蟲が知らせるとでも云ふのかしら。』と私は附け加へて、『何だかジュリアナはもう寢床から

起き上らないのぢやないかと思ふ。』

彼は返事をしなかつた。私達は森の中の道を通つてゐた。落葉は踏まれてカサ〳〵と音を立てた。落葉のない地面を歩いてゐると、まるで地下が空洞にでもなつてゐるやうに、ドンドンと反響した。

『彼女が死ねば。』と私は續けた。『僕はどうなるのかね。』

一種の憶病風とも云ふべき恐怖が不圖私に襲ひ掛つて來た。私は、口を緘ぢて顏を顰めてゐる弟を見た。私は又夕暮のしんとした淋しい光景を見廻はした。その時ほど身の毛の慄つやうな生命の空虛を感じた事は今までにつひぞ無かつた。

『『いや、いや。ツルリオ。』と私の弟は云つた。『ジュリアナは決して亡くなりません。』

彼の斷言も、運命の宿意に向つては無効であつた、三文の價値もなかつた。しかもそれでゐて彼の言葉は、虛飾がなくて、誠意に富んでゐたから、私を吃驚させずには置かなかつた。時折子供が不用意に、突然心臟の隅までも貫くやうな、思ひ掛けない、力のある言葉を、丁度運命が彼等の無意識の脣を通じて語るかのやうに、口に出す事がある——弟の言葉はそれに似てゐた。

『お前は未來の事が分るのか？』と、皮肉でなく私は尋ねた。

『いや。然しそれは僕の豫感です。そして僕はそれを確信するのです。』

又もや私は、善良な弟から確信の閃きを受けた。又もや彼は私の心を拘束してゐる鐵の輪をゆるめて呉れた。然しその安心は暫時に過ぎなかつた。散歩の殘餘を、彼は私に向つてライモンドの事を語りつゞけた。

ヂオバンニの小屋近くに來た時、フェデリコは、或る田圃の中で、丈の高い老人を見附けた。

『あゝ。彼處にゐますよ。種を蒔いてゐます。私達は聖式に彼を招待しませう。』

私達は彼の方へ歩み寄つた。私は褻瀆の罪を犯す準備をしてゐるやうな、心の恐怖に身を慄はせた。さうだ。實際私は、美なる者、聖なるものを冒瀆しようとしてゐるのだ。私は姦通で生れた子の爲めに、此の尊い人に向つて神父になつて呉れと賴まうとしてゐる。

『偉大なる體軀ですね。』とフェデリコは種を蒔く人を指して云つた。『普通の背丈しかないのに、それで巨人のやうに見える。』

私達は眞向ひの田の、木蔭に足を留めて、彼を見守つた。ヂオバンニは未だ私達に氣附かなかつた。

彼はゆつくりとした落着いた歩み方で、眞直ぐな線を作つて、野を過ぎつてゐた。頭には

フィリヤ人の帽子に似てゐて、耳の上に二つの掩布の垂れ下つてゐる青黑い羊毛の頭巾を被つてゐた。首には、種子の一杯入つてゐる白い袋を革の紐で吊つて、それが、腰まで屆いてゐた。左手で袋の口を開いて置いて、右手で種子を掴み出して蒔いた。彼の身振りは、鷹揚で、自由で、なれたもので、調子まで附いてゐた。種子は彼の手を離れると、黃金の斑點のやうに空に閃きながら、旋て、豐かな、濕つた畝に落ちて行つた。種を蒔く人はゆつくりと進んだ、彼の裸足は、土の中に深くはまり込んで行つた。彼の頭は清淨な光の中に擡げられた。彼の全人格は莊嚴で、威嚴のある單純さを呼吸してゐた。

私達は田を横切つて彼に近附いた。

『御機嫌よう。ヂオバンニ。』とフェデリコが云つた。『お前の種蒔きに祝福あれ、そしてお前の未來の麵麭に祝福あれ。』

『神汝と共にあられむ事を。』と私も繰り返した。

老人は仕事を止めて、頭巾を取つた。

『着ておゐで。ヂオバンニ。でないと、僕達も取らなきやならない。』とフェデリコは云つた。

老人は聊か慌てたやうにして帽子を被り直し、幾分當惑したやうに微笑した。

『ようこそおいで下さいました。どう云ふ御用で？』と彼は遠慮勝ちに云つた。

私はそれに答へたが、聲をふるはせまいとしてどんなに骨を折つたか知れなかつた。『僕の子供のため、教父になつて貰はうと思つて、それをお願ひに來たのだよ。』

老人は呆氣に取られて私を見たが、旋て又弟の方へ向いた。彼は益々狼狽へた。

『私には勿體な過ぎて。』と彼は呟いた。

『だが、どうだらうね。』

『お言葉に隨ひませう。今日私に與へて下さいました名譽には神様がお酬い下さりませう。私のやうな老耄れへ、斯うした歡喜を授けて下さいました神様の御名の御榮えがありますように。天の御惠が貴方の御子息に注がれますように。』

『ヂオバンニ。有難う。』

私は彼に手を差出した。深い、悲しげな兩眼は、感動したのか慄へてゐた。私の心は限りない苦痛に押し潰ぶされて破れんばかりであつた。

『お名前は何とお附けになりました。』と老人は尋ねた。

『ライモンド。』

『あゝ、大旦那様の御記念ですな。あの方は千人に一人しか見られない方でございました。貴方は其の方に似てゐらつしやいます。』

『お前は一人で種子を蒔いてるのか。』と私の弟が云つた。
『はい。一人で蒔いて、土を被せるのも一人です。』と彼は鳶色の土の上に横はつてゐる耙と熊手を指さした。私達のゐる廻りには善い種子が蒔いてあつて、まだ土が被せられないでゐる。此種子から旋て早苗が芽を吹き出すのだ。
『さあ。』と私の弟は云つた。『仕事のお邪魔をしたね。明日の朝ラ・バディオラに來て呉れ。さやうなら、ヂオバンニ。お前の種蒔きに祝福あれ。』
私達二人は疲れを知らない彼の右手に握手をした。それは勞働と、周圍に蒔いた善事とで淨められてゐる。老人は田圃の端れまで私達について來ようとした。が立ち止つて、躊躇ひ勝ちに云つた。『一つお願ひがございますが？』
『何だね、ヂオバンニ。』
彼は首に吊つた袋を開いた。『これを一掴み取つて、私の田圃に蒔いて頂けますまいか。』
私は手を差入れて、出來るだけ大掴みにして、地面へそれを蒔いた。弟も同じやうにした。
『これで神様は。』と、ヂオバンニ・ディ・スコルヂョは深く感動して云つた。『私の名附け子も此の種子から生れる麵麭のやうに、立派に成長なされますように。必ずさうなりますように。

（三十九）

その翌朝、洗禮の式は擧げられたが、ジュリアナの病氣の爲め、常例の祝典はしなかつた。子供は此の家に續いてゐる木蔭道を通つて會堂へ連れて行かれた。私の母と弟、マリヤ、ナタリヤ、エディス孃、二人の看護婦、それにジエムマ博士も列して呉れた。私はジュリアナの枕下に停まつてゐた。
彼女は深い昏睡狀態にゐた。半ば開いてゐる脣からは微かな微かな息が洩れるだけであつた。その脣はまるで日蔭に咲いた、とんと色艶のない薔薇のやうに蒼白かつた。
病室は一杯の影であつた。私はジュリアナを見ながら考へた。『結局私は彼女を救はうとはしてゐないのか？　私は一度は死を驅逐したが、それは今再び茲に歸つてゐる。何か急な變化でも起ればいざ知らず、でなければ彼女は無論死ぬだらう。私がライモンドを彼女から遠ざけてゐた間は、私が献身的な注意と愛とである幻影を作つて、彼女に忌はしい記憶を忘れさせてゐた間は、彼女は恢復に向いて行くやうだつた。だが彼女が再び厭でも子供を見なければならなくなつてからは、彼女の苦惱は戻つて來るやうになり、病氣は毎日段々重くなつ

て、出血にも劣らないほど早く衰弱して行く。私は彼女の苦悶を見てゐなければならない。彼女は私の云ふことを聽かない。そして前のやうに從順でない。一體誰が彼女を死なせるやうに仕向けてゐるのだ？　あれでなくて誰が！　あれは確かに彼女を殺すのだ。』憎惡の浪が私の身體の根本からもく〳〵と振ひ立つて來た。そして恐しい力で指の先までも漲つて行くやうに思はれた。後生大切に扱はれて、平和と安全との中に生ひ生ち、有り餘る乳で、薔薇色に肥つてゐる有實な小生物を、私は見た。『母はこれをジュリアナ以上に可愛がつてゐる。母は此の頻死の病人に對するよりも、より以上の心遣ひをこの兒に拂つてゐる。あゝ、然しどうあつても此の兒は除かなくてはならない。』今までにも見たことのある罪を仕遂げた時の幻影が、私に閃いて來た。屍衣を纏うた小さい骸、小さい無邪氣な骸の、柩に載つてゐる幻影だ。『あの兒の洗禮は、同時にあの子の臨終の聖餐となるであらう。』

突然ある好奇心が私を襲つて來た。ジュリアナは、依然として昏睡狀態にある。私は起つ立つて、こつそりと室を出た。私の代りに病床にゐらせる爲めクリスチナを呼んだ。それから昂奮の爲め、喘ぎながら、息を切りながら、大急ぎて敎會を指して行つた。

扉は開かれた。私は格子戸の前に一人の男が跪いてゐるのを見た。彼は私の生れた頃から此の會堂にゐて私の受洗の時も手傳ひをして呉れた忠實な老僕のピエトロであつた。彼は窮屈さうに立上り始めた。

『其の儘にしておいで。ピエトロ。』と私は彼に囁いて、片手を彼の肩の上に置き、跪いた儘でゐるやうに强ひた。

私も彼の傍に腰を卸し、格子に額を附けて下の會堂を覗き込んだ。私は靜かに取行はれてゐる凡ゆることを見得たし、又樣々な式例を聞くことが出來た。

儀式はもう始まつてゐた。私はピエトロから、子供がもう潮を受けたことを聞いた。ツシシの敎區牧師であるドン・グレゴリオ・アルテスが司會してゐた。彼と敎父とは信條を朗讀してゐた。前者は高い聲で、そして後者は低い聲でそれに續けてゐた。チオバンニは右手に赤ん坊を抱いてゐた。あの手は昨日善い種子を蒔いてゐたのだ。彼は左手を赤ん坊の禮服のレースとリボンの間に入れてゐた。そしてそれ等の手——節立つて——、筋が張つて、蒼色で、生きた靑銅の鑄物のやうに見える——は、百姓仕事で硬くなり、善事を行ひ、多くの勞働に携はつて聖化されてゐる。その兩手は、私が眼を離すことが出來ない位、大事さうに、注意して、優しく赤ん坊を抱いてゐた。ライモンドは泣かなかつた。彼は絕えず脣を動かしてゐた。涎は顎からその下の刺繡のある涎懸けへ流れ落ちるのであつた。

惡魔祓ひは終つた。牧師は指を唾で濡らして、小さい、紅い耳に觸れながら一定の身振り

をして、奇異な言葉を放つた。

（元老。）

彼は小さい鼻孔に觸れて又云つた。

（優雅なる匂ひもて。）

それから彼は拇指を聖膏に浸して、十字を切りながら、子供の胸に油を灌いだ。次にヂオバンニが子供を引繰返しにすると、牧師は同じ方法で、兩肩の間に聖膏を灌いた。

（主なるイエス・キリストの御名により救ひの聖膏をもて、われ汝を塗る。）

彼は綿の切れで、聖膏を塗つた後を拭つた。

此の後で彼は、悔恨と悲哀の色である菫色の法服を脱いで、歡びの徴であり、又凡ての原罪の汚れが洗ひ去られた事を示す白い法服を着た。彼はライモンドの名を呼んで、彼に嚴かな三つの質問を出し、敎父がそれに答へた。

（われ信ず、信ず、信ず。）

會堂は不思議に響き渡つた。卵形の高窓を通して、日光の帶が大埋石の版石に注いだ。その下には深い丸天井があつて、多くの先祖が最後の眠りを續けてゐる、母と弟とはヂオバンニの背後に並び合つてゐた。マリヤとナタリヤは物好きに赤ん坊を見ようとして、爪先立ちになつて微笑んだり、時折は小聲で呼いたりした。ヂオバンニはかういふ呼きを聞くと愛想のいゝ顏附きをして、時折振返つて見た。その顏には、此の頼りない祖父の寛かな心に溢れてゐる子供に對する愛が、言葉には現はし難いけれど、あり〳〵と見えてゐた。

（ライモンドよ。汝は洗禮を望むや。）と牧師は尋ねた。

牧師は洗禮の水の光つてゐる銀の盆を取上げた。敎父が洗禮の準備をしてゐる間に、私の母は幼兒の帽子を引上げた。小さい丸い頭を水盆の上にのぞかせると、牧師は小さい貝殼に若干の水を掬み入れて、三度幼兒の頭の上に注ぎ、その度に十字を切つた。

（父と子と聖靈の御名により、汝に洗禮を授く。）

ライモンドは聲高に泣き出し、頭の水が乾いて行く間は一層高く泣いた。ヂオバンニが再び彼を抱き上げた時、私は血が逆上して紫色になつた顏と、憤激の叫びに依つて、捩ぢ曲げられた口とを見た。彼の泣聲は何時も私に、同じ苛々した苦痛と、同じ兇暴な昂奮とを惹起した。此の兒の中でも、此の聲位私を苛立たせるものはなかつた。あの物悲しい十月の夜明けに初めてそれを聞いた時、其の頑くなな號泣は私の神經を絞り廻したものであつた。それだけでも私には堪へられなかつた。

牧師は拇指を聖膏に浸して、洗禮を受け終つたばかりの幼兒の額に塗り、その間儀式にな

つてゐる信條を朗誦したが、殆んど赤ん坊の泣き聲に妨げられて聞えなかつた。彼は次にそれを無垢の象徴である白袍に包んだ。

（白き聖衣を受けよ。）

そして敎父の手へ、聖用に充てた蠟燭を手渡して、

（燃ゆる光明を受けよ。）

此の幼兒は泣聲を收めて、丈けの高い色蠟燭の頂きに煌めいてゐる焰に眼を留めた。ヂオバンニ・ディ・スコルヂョは右手に新らしく出來た基督敎徒を抱き、左手に聖火の象徴を持ち、嚴かなさつぱりした態度で司會の牧師を瞶めた。その頭は其處に列した殘餘の證人を拔いて高かつた。

（安らかに過せ。主は汝と共にあらん。）

（アーメン。）

母はその老人の手から、罪なき者を受け取つて、胸に抱き寄せて接吻した。次ぎに弟が接吻した。順次に他の參會者が接吻した。

ビエトロは私の傍に跪いた儘涙を流してゐた。私は群がり起るいろ〳〵の感情を抱いて、すつくと立上つて、通路を驀進して、ジュリアナの室に飛び込んだ。

『あら、貴方、どうかなさいまして？』とクリスチナは吃驚した呼き聲で訊ねた。

『何でもない。何でもない。あれは眼が醒めてゐるか。』

『いゝえ。旦那樣。まだお休みでございます。』

私はカアテンを引いて、そつと病室へ入つた。最初の程、此の蔭で、白い枕以外には何も見えなかつた。私は寢床に近づいて、その上に倚り掛つた。ジュリアナは大きく眼を見開いて、凝つと私を瞶めてゐた。確かに、彼女は私の顏から私の苦悶を見拔いたに違ひないけれど、何も云はなかつた。それから再び眼を見開くまいとするかのやうに、も一度それを閉ぢた。

（四十）

私は到頭其の日から例の罪を犯さうとする、正氣で而かも狂氣じみた考にすつかり卷込まれて仕舞つた。私が眞面目になつて此の犧牲を殺害する一番容易い安全な方法を考へ初めるやうになつたのも其の日からである。

私は、ある冷酷な、鋭い、手酷しい計畫に全力を傾倒した。私は迚も信じられないほど熱

心に又執拗くそれに心を打込んだ。私は無我夢中であつたが、さう定めてゐる考へだけは着着として私を目的に向つて進ませた。心はよく働いて三倍の力にもなつた。だから内にあるものであらうが、外にあるものであらうが、何一つ私の注意から洩れるものは無かつた。私の警戒は一瞬時も弛まなかつた。私のしたこと、私の云つたことは何んなことでも疑惑を抱かせたり、吃驚させたりするやうなことはなかつた。私は絶えず人前を繕つた。それは母やその他の者ばかりでなく、ジュリアナの前でも同様であつた。

彼女に對すると私は、斷念して、平靜になつて、時には殆んど何事も忘れてゐるやうな風をした。私は努めて闖入者のことは云はないやうにした。私はいろ〳〵な手段を盡して、彼女を喜ばせたり、氣を引立てたり、彼女の健康を回復するに當つて爲すべき事を仕遂げさすやうにした。私は愛情のこもつた注意を倍加して、彼女に、深い、自分を忘れたやうな優しさを示してやつた爲め、常に彼女の中へ、生命に對する清新で、眞實な味はひを眼醒めさせることが出來た。私は再びあの瘻れ果てた身體に私の血を移し、彼女に私の力の幾分を分ち、あの疲れた心に動力を與へるやうな感じを持つた。毎日彼女を生きて行くやうに刺戟して、悲劇的な解放の時が來るまで、假構的な力を彼女に呼吸させてゐるのは、私に外ならなかつた。『明日こそ。』と私は一人で云つた。そして明日が來て、又過ぎて行つたが、その決行は延びた。そして私は又もや『明日こそ。』と繰返すのであつた。

私は、此の母親の命が此の子供の死に繋がつてゐることを承知してゐた。一度此闖入者を除いたなら、彼女は恢復するだらうと云ふやうな氣がしてゐた。『彼女が恢復しないなどと云ふことはあり得ない。』と私は論證した。『彼女は生き返るであらう。少し宛生れ返つて來るであらう。新らしい血液を得るであらう。彼女は凡ゆる汚垢を清められた新生の生物のやうに見えるであらう。斯うした長い、痛ましい贖罪の後では二人共清められて、お互に價値のあるものと感ずるであらう。彼女の病氣と、彼女の恢復とが、苦しい思出を、朧ろな遠方へ遂ひやつて仕舞ふであらう。そして私は彼女の魂から、その思ひ出の陰影まで拭ひ去るであらう。彼女は私の愛に擁せられて、全く忌はしい記憶を忘れ去つて仕舞ふであらう。私達の、かうした大きい試みの後の愛に比すれば、他の凡ゆる人の愛も無用に見えるであらう。』未來の幻影は私の耐忍に炎を點じた。此の不安定な境遇は堪へ難いものになつた。あの行爲も私の心の中では最早恐しいものではない。私は疑惑と要心の上に斯くも永く逡巡してゐる自分を嚴しく叱つた。而かも尙ほ、何等の光明も私の困迷の上に投げられなかつた。私は未だ、如何なる手段を取るかを決定することが出來なかつた。

ライモンドが自然に死んだもののやうに見せる事が何よりも必要であつた。醫者が露ほど

の疑惑も示さないやうにすることが必要であつた。私が自分で持ち出した多くの方法の中で、實行出來さうに見えるのはたゞの一つも無い。そして私が、天與の啓示、燦爛たる神興の到來を待つてゐる間に、一種の奇妙な魅惑が、私を犧牲の方へ惹き寄せた。

私はたび〳〵、うつかりしては子供部屋へ入つて、乳母がそれを聞き附けはしなかつたらうかと云ふことを氣遣つて、私の胸は早鐘を打つやうであつた。乳母はアンナと云つた。彼女はモンテゴルゴ・パウスラの生れで、山國の立派な種族の一人であつた。時に彼女は青銅に刻んだキベレ（希臘神話中、萬物の母なる女神）そつくりで、たゞ塔狀の冠だけが無かつたのである。彼女は、その田舍風の衣服を着けてゐた。紅いベチコートには、無數の眞直ぐな、調和のいい襞襞があつて、黑い胸衣には黃金の刺繍がほどこされてゐた。それに二つの長い袖が着いてゐるが、手を通したことはほとんどない。彼女の頭は、雪白のシュミセットから屹と聳えて、兩眼の白さと、ひらめく齒とは、リネンの輝やかしさをも凌ぐほどであつた。磨きを掛けた琺瑯質のやうな眼は、ほとんど眼動ぎもしないで、瞑想もせず、空想の影さへあらはさず、たゞ凝つと瞶めてゐるだけであつた。口は大きく、豐かで、默つてゐて、丈夫で、平らな二列の齒列が光りを添へてゐた。紫色に光るほど漆黑な髮は、低い、廣い額の上で分けられて、二條の辮髮として、兩耳のうしろへ牡羊の角のやうに垂らされてゐた。彼女は、何時行つて見ても、嚴かでもなく、浮き立つてもゐない平靜な態度で、嬰兒をあやしながら、坐つてゐた。

室は大部分が蔭になつてゐた。私が入つて行くと、此の嚴正で、莊重な婦人の手には、白い團塊が抱かれてゐるのを見た。彼女は話しもしなければ、微笑もせず、偶像のやうに動かない眼を据ゑて、ぢつと私を見た。私は彼女の胸に抱かれてゐる赤ん坊を瞶めながら、時としては長い間動かないこともあつた。その柔かい頰は脣の動くのと共に動き、その咽喉は口一杯に乳を吸ふ度に脈打ち、その小さい顏は胸の押し附けられて殆んど隱されてゐる。此の新鮮な、健全な、氣力の旺盛な乳汁を吸ふ、その一口、一口に、此の闖入者の精氣は一層頑强となり、一層抵抗が强くなり、そして私達にとつては一層有害になつて來るやうに思はれた。そして此の兒が生長し、發育して、少しも健康を害したやうに見えないのに氣附いた時、强くはないけれど私は一種の憤懣を感じた。『然し。』と私は考へた。『此の子が生れる迄の、母親の凡ゆる昂奮、苦惱は確かに、此の子に有害であつたに違ひない。此の子は何等かの生理的故障を有つてゐて、それが今に現はれて遂には命を取ると云ふやうなことはないものであらうか。』

或る日私は、彼が搖籃の中で素裸にせられてゐるのを見て、嫌惡の情を制する事が出來な

くなつた。そして彼に觸つたり、頭から足迄しらべて見たり、その小さい胸に耳を附けて見たり、心臟の皷動を聽いたりした。彼は玩具のやうな足を引込めて、亂暴に蹴り、窪みのある手をじたばたさせ、小さい、透明な爪のある指を、口の中へ入れたりした。

私は一層繁々と、彼の寢てゐる所を見瞶めて、再三例の手段について考へを廻らしたが、白菊の花輪に掩はれ、柩の上下にともされてゐる二本の蠟燭に照らされて、横はつてゐる、屍衣をつけた小さい骸の幻影が、私の決行を逡巡させた。彼は靜寂な熟睡に娛しんでゐた。仰向けになつて、拇指を出して堅く閉ぢた小さい拳を、中向けに胸の上へ伏せてゐた。時々濡れた脣は、乳を吸ふ時のやうにピク〳〵と動いた。若し此の罪なき熟睡が私の心を動かすことがあれば、又若しその脣の無意識な動きが私の思ひを融和させることがあれば、その時には自分の決心の鈍らないやうに私はきつぱり云つた。『彼は是非死なければならないのだ。』そして私は彼が前から私に嘗めさせた苦痛や、私の子供をそつちのけにして一人で擅にしてゐる愛情や、ジュリアナの不幸や、私の頭に掩ひ被さつてゐる暗雲に包まれた凡ゆる不幸や危險を思出した。斯うして私は殺意の焰を煽り立て、斯うして私は再び眠れる赤ん坊の上に死の宣告を與へた。しかも蔭の一隅にはモンテゴルゴ生れの女が坐つて、彫像のやうに物も言はず、動きもせず私を瞶めてゐた。彼女の白眼(しろめ)と齒とは耳にかけた大きな黃金の環と

同じやうに光つてゐた。

（四十一）

或る夕方（十二月十四日であつた。）フェデリコと私とがラ・バディオラに歸る途中、私達は一人の男が前を歩いてゐるのを見受けた。直ぐに、ヂオバンニ・ディ・スコルヂョであることが分つた。

『ヂオバンニ。』と弟は呼び掛けた。

老人は立止つて、後から追附くのを待つた。

『今晩は。ヂオバンニ。何か變つたことでもあるかえ？』

老人は、私達が彼の行爲を責めでもしてゐるやうに臆病さうに、そして不安さうに、微笑した。

『私は出掛けたのです。』と、彼は吃つた。『出掛けたのです——その敎子のことで。』

彼は非常に神經質で、その無遠慮な行爲の許可を哀願するやうにさへ見えた。

『あれに會ひたいのかい？』とフェデリコは低い聲で訊ねた。恰も彼は機微に觸れたことを

言ひ出して、此の孤獨な老人の心を動かしてゐる悲しい、然し優しい感情を、よく了解してやつてゐるかのやうな調子であつた、

『いや、いや。私はたゞ御機嫌伺ひに上りましたので。』

『それぢや會ひたくはないのか。』

『へ――いゝえ。此の時刻に上りましては、お休みを妨げませうから。』

『一緒においで。』とフェデリコは子供のやうに手を取つて、云つた。『あの子を見においで。』

私達は一緒に家へ行つて、子供部屋へ上つた。

其處には私の母もゐた。彼女はヂオバンニを見ると、優しく微笑して、靜かにするやうにといふ意味の目配せをした。『よく寢てゐるよ。』と彼女は云つた。

それから私の方へ向いて、幾分不安さうに附け加へた。『今日はね、晩方から少し咳が出るのだよ。』

此の新事實は私をどきりとさせた。母が急いで私を安心させようとした位、私の心の騷ぎはひどかつた。

『ほんの一寸だよ。云ふ程のこともないのだから、吃驚するには當るまい。』

フェデリコと老人とは搖籃の傍へ行つて、沈んだ灯影で、小さい熟睡者を見た。ヂオバンラは子供の上に屈んだ。

『接吻してやつてくれ。』とフェデリコが囁いた。

老人は首を上げて、迷ふやうな風で母と私とを見た。それからゆつくりと口から、鬚の延びかけた顎の邊りを撫で廻した。

『さうしましたら。』と、彼は誰よりも氣安く話の出來る弟に、低い聲で云つた。『屹度お坊様を引掻くので、お眼醒めになりませう。』

然し弟は、此の哀れな淋しい老人が、どんなに赤ん坊を接吻しようとする慾望を抑へてゐるかを見て、身振ひしてそれを奬めた。そして此の嚴かな老人の頭は、そつと、そつと、そつと搖籃の上へ下つて行つた。

（四十二）

ライモンドが額にヂオバンニの接吻を受けて、平和に眠つてゐる搖籃の傍で、室には私と母とたつた二人しかゐなくなつた時、彼女は同情の籠つた聲で云つた。

『可哀さうな老人だよ！　彼は殆んど毎晩のやうに來るのだが、お前は知つておいでかえ。

だけれど極くこつそり來るのだよ。ピエトロが見たと云つて私に話したが、家の外へ隱れてゐるのだとさ。洗禮の日に、此の室の窓は庭から見ると何處にあるかと聞いたが、それも屹度赤ん坊を見にやつて來るためだつたんだよ。可哀想な老人だね。本當に氣の毒だよ。』

私はライモンドの呼吸に耳を傾けた。別に異狀があるやうな音でもなかつた。彼はよくすや〳〵と眠つてゐた。

『今日此の子は呟いたのですつて？』と私は云つた。

『ほんの少しね――だけど騷ぎ立てる程の事はない。』

『多分風邪を引いたんでせう。』

『だけどこれ程用心してゐるのだから、風邪を引く筈はないのだがねえ。』

ある考へが私の心に閃いた。私は不意に戰慄を覺えた。母のゐる事が堪へられなくなつて來た。私は眼が眩んで、混亂して、自分で自分を裏切りはしまいかと恐れた。閃いて來た考へは、それほど激烈なものであつた。『これぢや幾分かは顏に出るに違ひない。』私の恐怖には根據はなかつたが、私はそれを抑制することが出來なかつた。私は搖籃の方へ進み寄つて、その上に倚りかゝつた。

私の母は勿論私が何うかしてゐる事に氣が附いたが、それを都合のいゝやうに解釋して呉れた。

『お前はひどく神經質だね！』と彼女は云つた。『靜かに息をしてゐるのを御覽。此の子がどんなに丈夫さうに眠つてゐるか、お前には分らないのかえ。』

彼女はさう云ひはしたものの、その調子に何處か不安さうなところがあつた。彼女は自分も心配してゐることを私から隱して仕舞ふことは出來なかつた。

『本當にお母樣の仰しやる通りで、別に變つたことは無いやうです。』と、私も身を引きながら答へた。『貴女はまだ此處にゐらつしやいますか？』

『あゝ。アンナが歸るまでね……。』

『では、私は行きませう。』

私は其處を出て、ジュリアナの處へ急いだ。彼女は私を待つてゐた。彼女の食事の用意は出來てゐた。私は食事の時を彼女が退屈がらない爲めに、一緒にそれをすることにしてゐた。つまり私の示す模範と注意とに依つて彼女が誘はれて喰べるやうになればいゝと願つたのであつた。今宵は私の言ふことも、することも、餘り昂奮し、又殆んど陽氣であり過ぎた。私は變な、神經の高潮のために、自分のすることを意識しても居なければ、しつかりと自分自身を抑制して置くことも出來なかつた。だが感情を解剖するだけの餘裕はあつた。私は常

例を破つて、醫者がジュリアナに飲めと命じてゐたバアガンディを二杯も、三杯も呷つた。
私は彼女に向つても、何時もより澤山飲めと勸めた。
『ちつとは氣持がいゝか、え？』
『えゝ。』
『お前が非常に大人しくしてゐて從順なら、私は約束する、クリスマスには起きられると。それ迄にもう十日しかない。十日間に、努めて丈夫になるやうにするがいゝ。もう一杯おあがり。ジュリアナ。』
彼女は、或る驚きと、好奇心とを持つて私を見ながら、凡ゆる注意を私に集めようとした。それは彼女が既に疲れて、眼瞼が重くなつてゐたため、坐つてゐれば、少時經つと眩暈をしさうになるからであつた。
彼女は私の勸めた酒杯を脣に持つて行つた。
『出養生に、お前は何處へ行くつもりだえ。』と私は訊ねた。
彼女は微かに笑つた。
『リヴィエラか？　アウグスト・アリチに手紙を書いて、別莊を借りて呉れるやうに手筈をしようか。ギノザの別莊が手に入るといゝのだがなあ。お前はあれを覺えてゐるかえ。』

彼女は再び笑つたが、前よりも一層微かであつた。
彼女は眩暈がして、倒れさうになつてゐた、私はそれに氣がついたので、兩手で彼女を抱いて、背に枕をかい込み、頭を低くして休ませた。それは普通の手段であつた。暫くの中に彼女は正氣に還つた。そして夢を見てゐるやうに呟いた。
『えゝ。えゝ。參りませう——』

（四十三）

私は名狀し難い不安に襲はれた。どうかすると俄かに元氣を振ひ起して、愉快になることもあつた。又時には烈しい性急と我慢の出來ない昂奮に驅られることもあつた。或は時には誰かに逢つて話がしたい、腹の中を打明けたいといふ烈しい熱望を起すこともあつた。さうかと思ふと、たまらなく孤獨が戀しくなることもあつた。何處か人に知れない隱家に身を潜めて、其處で自分の思ふことを吟味したり、自分の計畫を築き上げたり、やがて起つて來る事件の顚末の一々をよく考へて、それに對する處置をきめて置きたいと思つても見た。斯うした數へきれない、矛盾した衝動や、一層譯の分らない、不確かな昂奮とが眼まぐるし

いほどの早さで、私の心の中に次から次と現はれた。その爲めに私の心の働きは馬鹿々々しいほどに忙はしくなつた。

私の頭に這入つて來た閃光、さうだ、不思議な光の波は、暗い處に沒してゐたが、それでも前から確かにあつた心の底にある何とも云へない意識を急に明るく照らし出して、私の記憶の深い眠つてゐる地層を眼覺まして吳れたやうに思はれた。私はまだ憶えてゐるといふことを感じた。でもどんなことをしたつて、記憶の源まで辿ることは出來ないし、又その記憶の性質がどんなものであるか定めることも出來なかつた。私はたゞ憶えてゐるといふことを確かに知つてゐるだけであつた。ずつと以前に讀んだこと——何かの本に似寄りの場合を述べた記事なのか知ら、それとも誰かが實際の生活に起つた出來事であると云つて聞かせてくれたことなのか。或は又單に幻想的な感じ、さうだ神祕な聯想作用の働きに過ぎないものか。私の取らうとしてゐた手段は確かに誰かが私に暗示してくれたものらしい。誰かが不意に私の處へ來て、『お前は斯樣々々にしなければならない、他の人も斯ういふ場合に臨んだ時にはさうしたのだから。』と云つて、私がすつかり困り果てゝゐるのを救つて吳れたやうに思ふ。だが一體他の人といふのは誰だつたらう。私は屹度何處かで其の人に逢つてゐるに相違ない。けれどもどんなに骨を折つて見ても、其の人を私から引離して眺めようとして

も駄目だつた。私は自分の陷つた心の狀態をはつきりと說明することが出來ない。私は或る事件の步一步進んで行く其の進み具合を、つまり或る人が定まつた計畫をどん〳〵實行に移して行く其の動作の一つ〳〵をはつきりと頭に描くことが出來たが、私の先人である其の人は、皆目私には分らなかつた。でも私は、其の人の位置に自分の身を置かないと、どうしても此の光景にそれと關連したいろ〳〵な觀念を結びつけることが出來なかつた。斯うして私は自分が既に他人のやつた特殊な行爲を實行して居り、又自分と同じやうな事情の下に他人が試みた動作を眞似てゐるのに氣がついた。私には自發とか獨創とかいふ考へが全く缺けてゐたのであつた。

ジュリアナの室を出てから、私は暫らく廊下を當もなく彷徨つた。誰にも會はなかつた。やがて私は子供部屋の方へ足を向けた。戸口で耳を欹てると、調子の低い母の聲が聞えた。私は直ぐにその場を立去つた。

彼女が斷じて其處から去らなかつたら。屹度赤ん坊は一層咳がひどくなつたらう。私は小兒の氣管支加答兒がどんなものかよく知つてゐた。つまりそれは見た所は何でもないやうに見えるが實は恐しい病氣である。私は、マリヤが生れて三月目にその病氣にかゝつて、あぶなかつたことを思ひ出した。その徵候を一つだつて忘れはしなかつた。マリヤも初めは一

二度嚏をして、かすかな咳をしただけであつた。そして、多く睡眠を貪るやうな傾きがあつた。『たれにも分ることぢやないが、若し俺が時を待つて、自分でけりをつけるやうなことをせずに居れば、或は天がやがてやつて來て、俺を救つて呉れるかも知れない。』と私は獨語を云つた。私は戻つて行つて、もう一遍耳を欹てた。母が何かするのが聞えた。私は室へ這入つて行つた。

『えゝと、ライモンドはどうですか。』と私は自分の心配を隱さうともせずに尋ねた。

『おほきに快いよ。あれからはもう咳もしないし、呼吸も全く普通だし、體溫も平溫だよ。ど覽、牛乳をよく飲んでるだらう。』

私の母はすつかり安心して、落着いてゐるやうであつた。

アンナは寢床の上に腰掛けて子供に乳をやつてゐた。子供は時々ゴク〳〵といふ小さな音を立てながら、甘さうに飲んでゐた。アンナはまるで彫像のやうな不動の姿勢で、頭を垂れたまま、眼を床の上に落してゐた。洋燈の灯影はゆら〳〵と搖れて彼女の赤い寛衣の上にチラ〳〵と光や影を投げた。

『此室は少し蒸しやしませんか。』と私は何だか息がつまるやうに思はれたので云つた。

室の中は實際暑かつた。隅の暖爐の周圍には子供の着物が干してあつた。湯のグラ〳〵とたぎる音が聞えた。時々窓は家の周圍を吹きすさんでゐる風に見舞はれて、パタ〳〵と音を立てた。

『まあ何といふ風！』かう私の母が叫んだ。

私には他の音はもう聞えなかつた。私は餘念なく風の音に耳を傾けた。するとまるで冷い外氣の絲が急に骨の髓まで刺さつたやうに、戰慄が身體中を傳はつた。私は窓の方へ行つて、顫へる指先で鎧戸を開けた。私は冷い硝子戸に額を凭せて、外を眺めようとした。けれども私の息で急に硝子に曇りが出來て、見ることが出來なかつた。私は顏を上げて、窓越しに高く輝いてゐる星空を眺めた。

『よく晴れた夜ですね。』と私は窓枠から身を引きながら云つた。

そして私は靜かに乳母の胸に抱かれてゐるライモンドを見てゐる間も、戸外の何となく不吉な底の知れない夜の幻影を追つてゐた。

『ジュリアナは今夜食事をしましたか。』と私の母は優しく尋ねた。

『えゝ。』と私は突慳貪に答へた。といふのは次のやうなことを考へずにはゐられなかつたからである。『今夜は一晩中お前は一寸も彼女を見舞つてやる暇がなかつたんだね。何もお前が彼女を介意つてやらないのは今夜が初めてぢやないよ。すつかりライモンドに心を奪

はれたのだね。』

（四十四）

次の朝、ジェンマ醫師は赤ん坊を診察して、もうすつかり健康狀態であることを言ひ渡した。私の母は子供が咳をしたことを告げたが、醫者は別に氣に止めなかつた。でも、醫者は私達が餘り用心し過ぎてゐること心配してゐることを笑つたが、この數日の嚴寒の際、わけても子供に湯浴をさせてやる際はよく注意した方がよいと云つた。

彼はかういふやうなことをジュリアナの前で話した。私も其處に居合はせた。私達の眼は二三度、ちらと出會つた。

斯うして見ると、天の助けも今ではあてにはならなくなつた。私は例のことを實行しなければならない、最初の機會を摑まなければならない、そして實行を急がなければならない。私は堅く決心した。私は夜まで待つて、それから徐ろに實行に取りかゝらう。

其處で私は有りと有ゆる精力を集中した。鋭敏に頭を働かした。云ふこと行ふことにも馬鹿らしくなるほど注意を拂つた。私の一言一行は決して疑惑や驚愕を起すやうなことがあ

つてはならないのだ。私は一瞬間と雖も注意を緩めなかつた。私は少しもめそ〳〵するやうな眞似をしなかつた。多感な性情を私は押へてゐた、殺してゐた。私の能力といふ能力は或る問題を實際に解決することに集中された。今夜はどうしても、數分間あの闖入者と二人つきりでゐなければならないのだ、そして邪魔をされる心配のない、ある一定の事情の下に二人つきりでなければならないのである。

私は其の日の間に幾度か子供部屋へ行つて見た。何時もアンナがむつちりしたまゝ自分の座に陣取つてゐた。何かこちらから問ひかけると、彼女は『はい。』とか『いえ。』とか答へるだけだつた。それは何となく耳障りのする聲で、不思議な反響が伴つた。彼女の沈默と無精とは私を苛々させずに置かなかつた。

彼女は食事の外は殆ど子供の側を離れなかつた。そもて彼女がゐない時には何時も私のだとか、エディス孃だとか、クリスチナだとか、其の他一人二人の女中が屹度附添つてゐた。アンナのゐない場合なら、或は何かの用事に托して其處にゐる女を立ち去らせて、居て貰つては困る仲間を追ひやることが出來るかも知れない。だが矢つ張り思ひ掛けない時に、誰かが來はしないかといふ恐れは依然としてなくならない。兎に角、私はアンナの代り役が出來ないとすれば、偶然の機會を待つより外に仕方がなかつた。恐らくは今夜のやうに來る夜も

來る夜も私の母が附添つてゐるであらう。それにしても私はどうして何時までも張りつめた用心と氣苦勞とを續けて、絶えず恐しい時刻の來るのを待設けながら生きて行くことが出來ようか。

私が尙ほ困惑から遁れ出る道は無いものかと色々頭を惱ましてゐると、其處へエディス孃がマリヤとナタリヤを連れて這入つて來た。戸外の競爭で氣の立つてゐる小さい二人の美神は、暖かさうに黑黃鼬の上衣の釦をかけてゐて、澤々した捲髮に同じ毛皮の帽子を冠つて、寒さに頰を赤らめて來た。そして來るなり直ぐに嬉しさうな聲を擧げて私にかぢりついた。斯うして暫らくの間、室は彼等の樂しいお喋りで賑はつた。

『お父樣、山の人がもう來てよ。』とマリヤは云ひ出した。『今夜は降誕祭の九日間祈禱(ノーヴェナ)が敎會で始まるのよ。まあお父樣、ピエトロのこさへた秣槽を御覽になつて！　それは本當に綺麗よ。お祖母樣は降誕祭の木を下さると約束したわ。さうぢやなくつて、エディス先生。それはマ、の室へ飾らなくつちやならないわ。マ、は降誕祭までにはよくなるんぢやないの。まあ、どうか本當によくして上げて頂戴な。』

ナタリヤは立ち止まつてライモンドの方に眼をやつた。赤ん坊はまるで襁褓をはづさうとでもするやうに、絶えず足をバタ〳〵やつてゐた。

『私赤ちやんを抱いて見たいわ。』と彼女は急に氣まぐれな考へに襲はれて叫んだ。

彼女はもう我慢が出來なかつた。そして兩腕に赤ん坊を抱かうとして、ありつたけの力をこめた。そして人形を抱いてお母樣ごつこをする時のやうに眞面目くさつた顏をした。

『今度は私の番よ。』とマリヤは叫んだ。

小さな弟は何も云はずに甲の手から乙の手へと渡つた。けれどもエディス孃から心配さうに見守られながら、マリヤが赤ん坊を抱いて歩き廻つてゐると、不意に彼は彼女の腕から辷り落ちさうになつた。エディス孃は時をはづさず彼を抱き取つて乳母の手へ渡した。乳母は四邊のいろ〳〵な人達からもいろ〳〵なものからも離れて、深い夢路でも辿つてゐるのか、一人ぽつねんと坐つてゐた。

『ぢや今夜九日間祈禱(ノーヴェナ)會が始まるのかえ。』と私は自分の考へ事を追ひながら云つた。

『え、え、今晩よ。』

私はちらと一目アンナを見た。彼女は聞耳を立てゝ、熱心にこちらの話を聞き取らうとしてゐるらしかつた。

『音樂家は幾人なんだえ。』

『五人よ。』とマリヤは答へた。彼女は何でも精しく知つてゐるやうだつた。『風笛が二人に、

縱笛が二人、それから横笛が一人よ。みんなお前の方の山から來るんだよ。』と彼女はアンナの方へ振向いて附け加へた。『モンテゴルゴから來てる者も屹度あるわ。』

乳母の眼は物々しい光を失つて、生々して來た。そして涙に曇つて妙に悲しい光りを放つた。顏の表情がすつかり變つて、思ひも寄らない感情が現はれた。其の時私は可哀さうにも女は苦しんでゐるのだ、といふことが分つた。そして彼女の病氣の名前は懷鄕病（ノスタルヂヤ）といふのであることも分つた。

（四十五）

夜は段々近づいて來た。私は九日間祈禱（ノヴェナ）の準備――秣槽、花、眞白な蠟燭――が出來てゐるかどうかと思つて、會堂へ降りて行つた。私は何の目當もなく、戸外へ彷徨ひ出てライモンドのゐる子供部屋の窓を見上げた。それからは痙攣的な戰慄が骨に滲みこむやうな烈しい寒さに打克ちたいと思ひながら、彼方此方を忙しなく歩き廻つてゐた。

夕暮は寒かつた。空氣は劍のやうに人を突き刺した。アッソロの溪流が蜿々と流れてゐる鉛色をした谷間の向うの遠い地平線に沿つて、青黑い帶が擴がつてゐた。

私は急に臆病風に襲はれた。『恐しいんだつて。』斯う私は考へた。私はまるで誰かに自分の魂を見透かされてゐるやうに感じた。『恐しいんだつて？　何が――あの行爲そのものが、それとも誰かに發見されるかも知れないことが恐しいのか？』私は高い樹木の影を見ても、廣々とした空を見ても、アッソロの冷い光を見ても、それから取りとめないあたりの物音を聞いても戰慄した。夕の祈禱の鐘が鳴り出した。私は鈴も追ひ廻はされでもしたやうに、家の中へ遁げ込んだ。

私はまだ燈火のつかない廣間で母に出會つた。

『何處へ行つてゐたんだね。ツルリオや。』

『今外から來たんです――戸外で一寸散歩してゐたんですよ。』

『ジュリアナが待つてますよ。』

『九日間祈禱（ノヴェナ）は何時に始まるんですか。』

『六時だよ。』

その時は五時十五分であつた。それまでにはまだ四十五分あつた――其の間私は好い顏をしてゐなければならないのだ。

『二階へ行きますよ、お母さん。』私は一二歩行きかけてから、母の方へ呼びかけた。『フェデ

リコはもう歸りましたか。』

『いゝえ。』

私はジュリアナの室の方へ進んで行つた。彼女は私を待つてゐた。そしてクリスチナは忙しさうに簡單な食事の準備をしてゐた。

『まあ、こんなに長いこと何處へ行つていらしつたの。』と憐れな病人は優しくなづるやうな口調で尋ねた。

『マリヤやナタリヤと一緒にゐたんだよ。それから會堂を見て來たよ。』

『あゝさう、九日間祈禱が今夜始まるのね。』彼女は斯う悲しさうに呟いた。

『此處からだつて屹度音樂は聞えるよ。』

彼女は暫らく默つたまゝ考へに沈んでゐた。何だか大變悲しさうであつた。涙を湛へた胸から出て來さうな、思ひあまつた悲しみにくれて、今にもすゝり泣きをしやしないかと思はれた。

『何をそんなに考へてゐるんだえ。』私はかう尋ねた。

『私初めてラ・バディオラで迎へた降誕祭のことを考へ出しましたの。貴方憶えていらしつて。』

彼女は大變昂奮してゐるらしかつた。そして私に優しくして貰はうとした。妙に私に縋りついて來た。其の爲め私は撫で賺して、沈み勝ちな元氣を振ひ起して、接吻の一つもして涙を拭いてやらなければならないやうにさへ思つた。『だが俺は、激勵などしちやならないのだ。』と私は不安さうに考へた。『俺は餘り長く此處に引留められてゐてはいけないのだ。時はどん〳〵過ぎて行く。若し一度でも氣を緩めて彼女の捕虜にでもなつたら、容易には逃げられないだらう。若し彼女に泣出されでもした日には、俺にはそれを放つて置くだけの勇氣がない。兎に角心を餘つ程しつかり引緊めてゐなくつちやならない。時間は段々短くなるばかりだ。誰がライモンドの側に殘つてゐるんだらう。屹度お母様さんぢやあるまい。ひよつとすると乳母だかも知れない。他の者は皆んな會堂へ行つて集つてゐるんだらう。クリスチナを此處へ寄越して置けば、何も心配はあるまい。俺にとつてこんなに都合の好い場合は又とあるまい。今から二十分の間に、俺は自由の身にならなければならないのだ。』

私は努めてこれ以上は病人を昂奮させないやうにした。私はしらばつくれて彼女の云ふことを聞かないやうにした。彼女の口を洩れる言葉に一々は返事をしなかつた。努めて感情的な問題からは彼女の注意を外すやうにした。クリスチナは毎晩私達二人だけを殘して、座を外す習慣になつてゐたが、今夜はわざつと私の方でさうさせないやうに計らつた。そして何

時になく食事のことを大げさに注意をしたりした。

『ですが今夜はどうして一緒に召し上らないの。』と彼女は尋ねた。

『今は何もほしくないんだよ。身體の具合がどうもよくなくつてね。だがお前は何か食べなくつちやいけないよ。ね、どうか食べておくれ。』

どんなに骨を折つて見ても、私は、胸騷ぎに苦しめられてゐるのを隱すことが出來なかつた。幾度か彼女は私の方を瞶めて、熱心に神祕を呟き出さうとした。するうちに忽ち彼女は顏を曇らして、默り込んだ。食物には殆ど手を觸れなかつたし、葡萄酒の洋盃にも脣をつけるかつけない位であつた。私は間もなく有りつたけの勇氣を振ひしぼつて、其處を出ることに定めた。馬車の音が聞えたやうだと云つて、私はその方に耳を向けて云つた。

『フェデリコのやうだよ。直ぐに會はなくつちやならないんだ。一寸位ゐなくつても氣にしはしまいね。クリスチナがゐて呉れるだらうから。』

彼女の顏は、今にもわつと泣き出しさうにブル〳〵と顫へた。私は彼女の答へを待たないで、急いで出て仕舞つた。でもクリスチナに自分が戻つて來るまでは女主人の側についてゐてくれと賴むことを忘れはしなかつた。

室から外へ出た瞬間、私は成らうことなら、息苦しい心臟の鼓動を靜めたいと思つて、ぢ

つと立ちどまらないではゐられなかつた。『うまく神經を制することが出來ないなら、俺はもう駄目だ。』斯う私は考へた。私は聞き耳を立てゝ何かを聞かうとしたが、自分の脈搏の鳴る音以外には何も聞えなかつた。私は廊下傳ひに梯子段の側まで進んで行つた。誰にでも會はなかつた。家の中には物音一つ聞えなかつた。『みんな今頃は教會にゐるに違ひない。召使までもさうなんだ。』私は斯う獨語を云つた。『人の氣勢に就いてはもう何も心配になることはない。』私は落着かうとして二三分間待つてゐた。さうしてゐる間に、心のはりは何時となく綏んで來た。私は何だか眩惑がするやうに思はれた。ぼんやりした當のない考が私の頭に浮んで來た。それは、私が今仕遂げようとしてゐる行爲とは まるで 見當違ひのものであつた。私は機械的に、欄干の横木を數へた。

『アンナが屹度赤ん坊と一緒にゐるに相違ない。子供部屋は會堂からさう遠くはないから、九日間祈禱が始まれば、よく樂の音が聞えて來るだらう。』私は子供部屋の方へ足を向けた。けれども入口まで行かない間に、もう初めの風笛の音が聞えて來た。私はぐづ〳〵しないで部屋へ這入つた。私の推測は決して誤つてゐなかつた。

アンナは自分の椅子の側に立つてゐた。私はその樣子から推して、直ぐに彼女は故鄕の山の音樂の初めの調子を、古い宗教的な序曲を聞いた瞬間に直ぐさま立上つたのであることを

知つた。

『赤ん坊は眠つてゐるかえ。』斯う私は尋ねた。

彼女はたゞ點頭いて返事をしただけであつた。

音樂は離れてゐるせゐか幾分ぼんやりして、稍耳障りになる所があつたり、長く引つぱつたり、單調に響いたりしたが、それでも夢のやうに心地よく續いてゐた。澄んだ笛の音は、伴奏樂に如何にも自然な忘れることの出來ない調子を添へてゐた。

『お前も會堂へ行つて見るがいゝ。』と私はアンナに云つた。『私が此處にゐてやるからね。何時頃赤ん坊は寢着いたんだえ。』

『たつた今で御座んす。』

『あゝさうか、それは結構。ぢや九日間祈禱へ行つて來るがいゝよ。』

彼女の目は急に生々と輝いた。

『行つても宜しう御座んすか。』

『あゝいゝとも、いゝとも。私が赤ん坊の番はしてゐてやるよ。』

私は自分で扉を開けてやつた。そして彼女を出すなら後をぴつしやりと閉めた。それから爪先で搖籃の側へ驅け寄つて、中をそつと覗いて見た。赤ん坊は、無邪氣にも拇指を中へ入

れて、小さな拳を握つたまゝ、すや〳〵と眠つてゐた。何だか私には、あの灰色の眼が閉ぢた眼瞼越しにはつきり見えるやうに思はれた。けれども私は彼に對する以前のやうな盲目的な憎惡や憤怒を少しも感じなかつた。彼に對する嫌惡の情は前よりも大變少くなつてゐた。私は幾度も私の指をうごかした、ある犯罪的暴行をやりたいといふ本能的な衝動に少しも刺戟されなかつた。私はたゞ、今自分が何をしてゐるかといふことをはつきり頭に思ひ浮べながら、冷靜な透明な意志の命ずるところに從つてゐるだけであつた。

私はもう一遍入口の方へ行つて、扉を開けて、外を眺めて、廊下には誰もゐないことを確めた。それから窓の方へ駈けて行つた。私は不意に母の云つたことを思ひ出した。そして若しやヂオバンニ・ディ・スコルヂョが下の庭園に降りてゐはしないかといふ考が頭にちらつと浮んで來た。私は用心に用心を重ねて、窓を開けた。氷のやうに冷たい空氣がさつと這入つて來た。私は窓敷居に凭れて、四邊の樣子を覗つた。疑はしいやうな物の影は何も見えなかつた。九日間祈禱のつき通るやうな樂の音の外には物音一つ聞えなかつた。私は窓の處を離れて、搖籃に近づいた。そして自分では厭なのを無理に、赤ん坊をなるべく靜かに抱き上げて心臟がまるで大鎚でたゝかれてでもゐるやうに烈しく皷動してゐる横腹から引離して、高く支へながら、私は開いた窓の方へ連れて行つて死神のやうな空氣に曝した。